

千葉県八千代市

ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書

—宅地造成に先行した埋蔵文化財発掘調査—

2 0 0 0

安 原 徳

八千代市遺跡調査会

序 文

本市は、市域南部では東京や近郊都市への通勤圏として、昭和30年代から市街化が進んでいます。一方市域中央～北部では特定の農産物や牧畜業による緑地の保全が図られています。

平成8年4月、新たな交通手段として第3セクターによる東葉高速鉄道が開通しました。今回の発掘調査の契機となる宅地造成も、八千代緑が丘駅に至近の距離で駅周辺整備に符合した事業といえます。関係者との協議の結果、発掘調査による記録保存を講ずることになりました。

調査の結果、縄文時代前期中葉の限られた時期の集落跡を発見することができ、遺物についても多種多様な文様構成をもつ等研究面に寄与できうる資料が出土しています。

本書が刊行されるにあたり、資料を公表できる喜びをかみしめると共に、八千代市の先史を考古資料を通じて考える一助になっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで御指導・御協力をいただいた千葉県教育庁文化課、八千代市教育委員会、安原 徳氏をはじめ、関係諸機関の皆様方に対して深く感謝いたします。また、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた調査補助員、整理補助員の方々にもあわせてお礼申し上げます。

平成12年2月15日

八千代市遺跡調査会
会長 藤城恒昭

例 言

- 1 本書は、八千代市大和田新田字ライノ作に所在するライノ作南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、安原 徳氏の依頼を受け、八千代市遺跡調査会が実施した。
- 3 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

第1次確認調査 調査期間 平成7年3月8日～同年3月28日 調査面積 1,592m ² /15,000m ² 調査担当 武藤 健一 備考 市直営による国庫補助事業	本調査 調査期間 平成8年8月4日～同年12月19日 調査面積 8,400m ² 調査担当 森 竜哉 備考 市調査会による事業者負担事業
--	--

第2次確認調査 調査期間 平成7年11月10日～同年12月15日 調査面積 1,720m ² / 17,200m ² 調査担当 宮澤 久史 備考 市直営による国庫補助事業	本整理作業 整理期間 平成10年10月1日～ 平成11年4月23日 整理担当 森 竜哉 備考 市調査会による事業者負担事業
--	---

- 4 本書の編集、執筆は遺構を森 竜哉が、遺物を玉井庸弘が以下の通り分担した。

第1章第1, 2節 森	第2章第2節 b, c 玉井
第3, 4節 玉井	第3節 a 森 玉井
第2章第1節 玉井	第3章第1, 4節 玉井
第2節 a 森 玉井	第2, 3節 森

- 5 現場の遺構、遺物及び室内の遺物の撮影は森が行った。
- 6 本書の作成・刊行に際しては森、玉井を中心として以下のように分担して行った。
 遺構図版作成 遠藤玲子 鈴木一代 立石ふく子 寺澤洋子 鳥羽良子 野中則子
 遺構・遺物トレース 森竜哉 鈴木一代 立石ふく子 鳥羽良子
 遺物接合・石膏 遠藤玲子 鈴木一代 立石ふく子 寺澤洋子 鳥羽良子 野中則子
 遺物(土器類) 実測 遠藤玲子 鈴木一代 立石ふく子 寺澤洋子 鳥羽良子 野中則子
 遺物(石器類) 実測 玉井庸弘 遠藤玲子 寺澤洋子 野中則子
 遺物拓本 笠川千代子 古滝洋子 鈴木勉 原田雪子 日向洋子 福島正晃
 遺物図版作成 笠川千代子 古滝洋子 鈴木勉 原田雪子 日向洋子 福島正晃
 写真図版作成 森竜哉
- 7 魚骨圧痕土器の魚種の同定・分析については千葉県立中央博物館 歴史学研究科長 小宮孟氏に御教示を得た。
- 8 石器類の石材鑑定には岫山武郡市文化財センター吉田直哉氏に、縄文土器全般については、同センター中野修秀氏に御教示を得た。
- 9 出土遺物、実測図等は八千代市教育委員会において保管している。
- 10 発掘調査から整理作業、原稿執筆にいたる過程において、内外の方々に御指導、御協力をいただきました。記して感謝いたします。

(敬称略)

齋藤弘道 村田六郎太 阿部朝衛 小栗信一郎 朝比奈竹男 常松成人

凡 例

- 1 本書の遺構番号は、現地発掘調査時において使用した番号に同一である。
- 2 各遺構に表示した標高は、東京湾における平均海面を基準としている。
- 3 遺構・遺物の縮尺は下記のとおりで統一している。
 住居跡 1/80 ビット 1/40 土器・礫石器・土製円盤等土製品 1/3
 剥片・剥片石器・石匙・石織・裝飾石器 2/3
- 4 遺構・遺物のスクリントーン及び鎖線の表示は以下のとおりである。
 スクリントーン1 住居跡の伊・繊維混入の土器
 スクリントーン2 貝ブロック
 ———— 住居内床硬化面

本文目次

序 文

例言・凡例

八千代市遺跡調査会組織表

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 立地と環境	2
第4節 周辺の縄文時代前期遺跡	2

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代	5
第2節 縄文時代	6
a. 遺構と遺物	6
b. 遺構外出土遺物	22
c. 土製品	23
第3節 歴史時代	27
a. 遺構と遺物	27

第3章 まとめ

第1節 ライノ作南遺跡出土の黒浜式土器編年	28
第2節 縄文時代前期黒浜期の住居跡について	35
第3節 縄文時代のピットについて	38
第4節 自然遺物について	39
a. 貝類	39
b. 魚骨圧痕土器	40

表 目 次

第1表	旧石器時代出土石器観察表	5
第2表	黒浜式土器における文様変遷表	17
第3表	遺構内出土石器観察表	24
第4表	遺構外出土石器等観察表	25
第5表	器種及び石材構成比	25
第6表	土製品観察表	26

図 版 目 次

第1図	遺跡位置及び周辺の遺跡	第14図	26D平面実測図
第2図	遺跡周辺の地形	第15図	23P・29P平面実測図
第70図	黒浜式古段階の土器(1)	第16図	30P・31P平面実測図
第71図	黒浜式古段階の土器(2)	第17図	32P・33P平面実測図
第72図	黒浜式中段階の土器(1)	第18図	36P・37P平面実測図
第73図	黒浜式中段階の土器(2)	第19図	39P・45P平面実測図
第74図	黒浜式中段階の土器(3)	第20図	48P・49P平面実測図
第75図	黒浜式新段階の土器	第21図	47P・52P平面実測図
第76図	無文浅鉢形土器	第22図	53P・56P・57P・58P平面実測図
第77図	ライノ作南遺跡住居跡の分類	第23図	59P・62P・66P平面実測図
第78図	ライノ作南遺跡ピットの形態別集成	第24図	01M平面実測図(北側)
第79図	貝類構成比	第25図	01M平面実測図(南側)
第80図	マガキの殻高分析	第26図	60P・61P平面実測図
第81図	マイワシの中軸骨格	第27図	旧石器時代石器
第3図	ライノ作南遺跡トレンチ 及び遺構配置図	第28図	06D出土遺物
第4図	ライノ作南遺跡遺構配置図	第29図	07D出土遺物
第5図	06D・07D平面実測図	第30図	08D出土遺物(1)
第6図	08D・09D平面実測図	第31図	08D出土遺物(2)
第7図	10D・11D平面実測図	第32図	09D出土遺物
第8図	12A B D・14D平面実測図	第33図	10D出土遺物
第9図	13D・15D平面実測図	第34図	11D出土遺物(1)
第10図	16D・17D平面実測図	第35図	11D出土遺物(2)
第11図	19D・20D平面実測図	第36図	11D出土遺物(3)
第12図	21D・23D平面実測図	第37図	12D出土遺物(1)
第13図	24D・25D平面実測図	第38図	12D出土遺物(2)
		第39図	13D出土遺物

第40図	14D出土遺物	第55図	20D出土遺物(2)
第41図	15D出土遺物	第56図	21D出土遺物
第42図	16D出土遺物(1)	第57図	23D出土遺物(1)
第43図	16D出土遺物(2)	第58図	23D出土遺物(2)
第44図	16D出土遺物(3)	第59図	24D出土遺物
第45図	16D出土遺物(4)	第60図	25D出土遺物
第46図	16D出土遺物(5)	第61図	26D出土遺物
第47図	17D出土遺物(1)	第62図	ピット出土遺物
第48図	17D出土遺物(2)	第63図	遺構外出土遺物(1)
第49図	19D出土遺物(1)	第64図	遺構外出土遺物(2)
第50図	19D出土遺物(2)	第65図	遺構外出土遺物(3)
第51図	19D出土遺物(3)	第66図	遺構外出土遺物(4)
第52図	19D出土遺物(4)	第67図	遺構外出土遺物(5)
第53図	19D出土遺物(5)	第68図	土製品
第54図	20D出土遺物(1)	第69図	01M出土遺物

写真図版目次

写真図版1	遺跡周辺の地形	21D-全景	遺物出土状況
写真図版2	遺構近景	写真図版16	23D-全景 遺物出土状況
写真図版3	06D-全景 床面状況 炉跡状況	写真図版17	24D-全景 遺物出土状況
写真図版4	07D-全景 床面状況 07D-遺物出土状況	写真図版18	25D-全景 遺物出土状況 26D-全景
写真図版5	08D-全景 床面状況	写真図版19	23P-全景 29P-全景 30P-全景 31P-全景 32P-全景 33P-全景 36P-全景 37P-全景
写真図版6	09D-全景 床面状況	写真図版20	39P-全景 45P-全景 47P-全景 48P-全景 49P-全景 52P-全景 53P-全景 56P-全景
写真図版7	10D-全景 床面状況	写真図版21	57P-全景 58P-全景 59P-全景 60P-全景 62P-全景
写真図版8	11D-全景 床面状況 11D-遺物出土状況	写真図版22	01M-全景 土層堆積状況
写真図版9	12D-全景 床面状況 12D-遺物出土状況	写真図版23	旧石器時代出土遺物
写真図版10	13D-全景 床面状況 14D-全景	写真図版24	06D・07D出土遺物
写真図版11	15D-全景 遺物出土状況	写真図版25	07D・08D出土遺物
写真図版12	16D-全景 遺物出土状況	写真図版26	08D・09D出土遺物
写真図版13	17D-全景 P5内遺物近景	写真図版27	09D・10D出土遺物
写真図版14	19D-全景 貝ブロック半截状況 19D-遺物出土状況		
写真図版15	20D-全景		

- 写真図版28 11D出土遺物
写真図版29 11D・12D出土遺物
写真図版30 12D出土遺物
写真図版31 13D出土遺物
写真図版32 14D・15D出土遺物
写真図版33 16D出土遺物
写真図版34 16D出土遺物
写真図版35 16D・17D出土遺物
写真図版36 17D・19D出土遺物
写真図版37 19D出土遺物
写真図版38 19D出土遺物
写真図版39 19D・20D・21D出土遺物
写真図版40 21D・23D出土遺物
写真図版41 24D・25D出土遺物
写真図版42 26D出土遺物
写真図版43 ビット出土遺物
写真図版44 遺構外出土遺物(1)
写真図版45 遺構外出土遺物(2)
写真図版46 遺構外出土遺物(3)
写真図版47 遺構外出土遺物(4)
写真図版48 土製品・01M出土遺物
写真図版49 貝類

八千代市遺跡調査会組織表

〔本調査〕

平成8年度	会 長	村 越 利 光	(八千代市教育委員会生涯学習部長)
	委 員	今 井 利 久	(同生涯学習部参事兼社会教育課長)
		安 原 徳	(土地所有者)
	監 査	安 原 一 雄	(土地所有者長男)
	事務局 長	今 井 利 久	(同生涯学習部参事兼社会教育課長)
	事務局 係長	小名木 伸 雄	(同生涯学習部社会教育課文化係長)
	事務局 係員	秋 山 利 光	(同生涯学習部社会教育課文化係主事)
		常 松 成 人	(同生涯学習部社会教育課文化係主事)
	調査 担当	森 竜 哉	(同生涯学習部社会教育課文化係主事)

〔本整理〕

平成10年度	会 長	藤 城 恒 昭	(八千代市教育委員会生涯学習部長)
	副 会 長	三 浦 幸 子	(八千代市教育委員会生涯学習部次長)
	委 員	実 川 憲	(同生涯学習部社会教育課長)
		安 原 徳	(土地所有者)
	監 査	安 原 一 雄	(土地所有者長男)
	事務局 長	実 川 憲	(同生涯学習部社会教育課長)
	事務局 係長	小名木 伸 雄	(同生涯学習部社会教育課文化財係長)
	事務局 係員	秋 山 利 光	(同生涯学習部社会教育課文化財係副主査)
		宮 澤 久 史	(同生涯学習部社会教育課文化財係主事)
	整理 担当	森 竜 哉	(同生涯学習部社会教育課文化財係主事)

〔本調査〕

調査補助員 岩井治枝・遠藤玲子・落亀昌子・小柳英世・笠川千代子・斎藤節子・酒巻紀子・
東原和男・田久保松枝・寺澤洋子・鳥羽良子・野中則子・原田雪子・室井恭子・
矢尾ヤス子・渡辺信子・三宅由美子・鈴木時子・立石春枝・立石みね子・豊田八重・
村越美津子・山口ひで・吉川志代

〔本整理〕

整理補助員 玉井庸弘・遠藤玲子・笠川千代子・古滝洋子・鈴木一代・鈴木 勉・立石ふく子・
寺澤洋子・鳥羽良子・野中則子・原田雪子・日向洋子・福島正晃

〔本調査・本整理〕

事 務 員 鈴木安子・高橋昌代・高崎房江

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

平成6年10月、安原 徳氏より共同住宅建設のため、当該地に埋蔵文化財が所在しているか否かの照会が提出された。面積は今回の調査地を含む24,931㎡である。千葉県教育庁文化課及び八千代市教育委員会では、北側隣接地の発掘調査結果や照会地において縄文土器などが散布している状況から、遺跡が所在している旨回答した。

現況保存がむずかしいとの事業者の判断により、記録保存による発掘調査を実施することとした。確認調査は平成7年3月と平成7年11月～12月の2回にわたって国庫補助事業として実施した。その結果、縄文時代前期の集落及び同時代のピットが展開していることが判った。そして、南側と東側では遺構密度が薄くなっている状況であった。その後事業計画の変更により、飼料畑のみを調査区域とし、山林部分を現状保存するとの結論を経て、今回の調査に至った。調査面積は、8,400㎡となった。

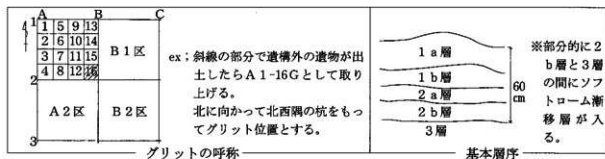
第2節 調査の方法と経過

確認調査及び北側隣接地の本調査の成果から遺構の掘り込みが浅い点、遺構覆土中に多量の遺物が含まれていることは判っていた。こうした事実を踏まえて、重機による表土除去を行った。遺構確認は、遺物が多量に出土する面やソフトローム上面からやや上層において確認面とした。層序の詳細は後述する。

調査区の設定は、公共座標系に沿って20m方眼を設定し1グリットとした。このグリット内を5mごとに分割して小グリットとした。1グリット内の小グリットは16区画となる。遺構外の遺物は小グリット内一括として取り上げている。なお、グリットの呼称は図示するので、参照されたい。

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。1 a層 茶褐色土（腐食していない表土層）、1 b層 黒色土（腐食した表土層）、2 a層 褐色土（新期テフラ層 ロームに似ているがやや濁っている。ややぼそぼそしている。）、2 b層 暗褐色土（2 a層に黒色土を混入している。ややぼそぼそしている。遺構外の場合、縄文時代の遺物は2 a下層～2 b上層に比較的集中して出土する。）、3層 ソフトローム層（立川ローム層最上面）となっている。前述した遺構確認面は、住居跡の場合2 b層の下位で、ピット、溝は2 b層の下位～3層上面で行った。なお、基本層序の部分図を示すので、参照されたい。

調査経過は、平成8年8月5日～同12月19日にわたって現場調査を実施した。8月5日～22日重機による表土除去及びプラン確認、8月23日～12月17日遺構調査、12月18日～19日遺跡清掃、全景撮影と現場撤収により現地での調査を終了した。このあと12月～平成9年1月、3月の2回にわたって遺物の洗浄と注記を実施した。



第3節 立地と環境 (第1～2図)

西八千代遺跡群¹⁾が所在する八千代市は、比高差の少ない下総台地北西部に位置する。市域を占める台地²⁾には樹枝状に支谷が形成され、複雑な地形を創出している。

ライノ作南遺跡は、新川³⁾の支流の一つである桑納川へと流入する水系により開析された小支谷の最奥部、標高25～27mの舌状台地平坦部に立地する。地質的には下総上位面と呼ばれる洪積台地に占められ、水田面との比高差は12～13mを測る。低地へと下る斜面は、西側が急斜面、東側が緩斜面である。

- 1) 支谷最奥部に陥む台地上に展開する遺跡の総称である。主に仲ノ台遺跡、芝山遺跡、ライノ作遺跡、ライノ作南遺跡などを示し、縄文時代前期中葉黒浜期の長期にわたる集落形成をうかがうことができる。
- 2) 市域の台地は、南北を縦断する新川と東西を横断する桑納川により概ね3ブロックに分けることができる。
- 3) 現在の新川は開削工事により東京湾へと流入するが、本来は印旛沼へ流入していた。

第4節 周辺の縄文時代前期遺跡 (第1図)

現在、市域で確認されている遺構を伴う縄文前期遺跡は10遺跡である。時期的には黒浜期と浮島～興津期が主体を占め、花積下層、関山、諸磯、十三菩提期は土器片のみの検出にとどまる。遺跡の立地は、小支谷最奥部の台地平坦部に展開する傾向が強うかがえるが、瓜ヶ作遺跡のように大支谷から小支谷に面した台地上に展開する例もある。

ライノ作遺跡(1) 黒浜式古段階の住居跡1軒が検出されている。また浮島～興津、前期末の包含層も検出され、若干量ではあるが花積下層式、関山式、諸磯式土器の出土も確認している。

芝山遺跡(2) 黒浜式古段階～中段階の住居跡3軒¹⁾が検出されている。また浮島～興津、前期末の包含層も検出され、若干量ではあるが諸磯式土器の出土も確認している。

内野南遺跡(3) 諸磯、浮島～興津期の土坑4基が検出されている。

仲ノ台遺跡(4) 黒浜式古段階～中段階の住居跡10軒が検出されている。また浮島～興津、前期末の包含層も検出され、若干量ではあるが関山式、諸磯式土器の出土も確認している。

仲ノ台遺跡b地点(5) 浮島Ⅲ期の小竪穴状遺構1基が検出されている。

大溜入遺跡(6) 黒浜～諸磯期の落とし穴4基、土坑1基が検出されている。

新林遺跡(7) 浮島～興津期の土坑41基、包含層が検出されている。遺跡の性格としては、当該期の土坑群との位置づけが考えられる。

二重堀遺跡(8) 浮島～興津期の竪穴状遺構1基、土坑37基、包含層が検出されている。本遺跡も新林遺跡同様、該期の土坑群との位置づけが考えられる。

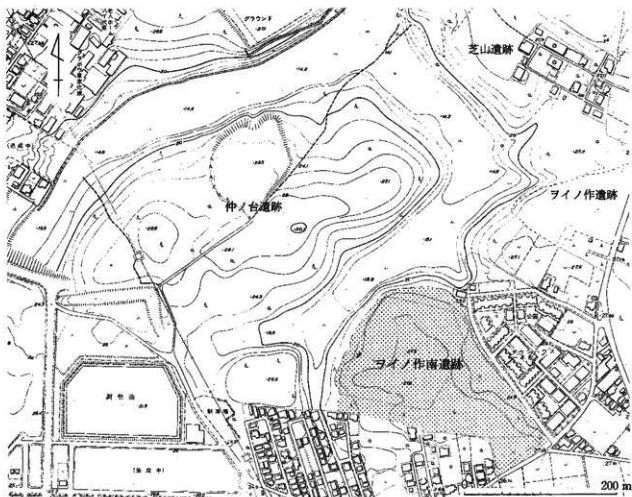
瓜ヶ作遺跡(9) 黒浜、浮島～興津期の住居跡17軒が検出されている。遺跡は大支谷から小支谷に面した千葉段丘面に立地し、市域北部における該期の拠点集落との認識がなされる。時期的には数期にわたり形成された遺跡と思われるが、詳細は現在確認中である。

なお、既報告のライノ作南遺跡では、黒浜式中段階～新段階の住居跡4軒が検出されている。

- 1) 鉾千葉県文化財センター (落合 1989) では1軒、八千代市西八千代遺跡群調査会 (森 1996) では2軒検出されている。



第1図 道跡位置及び周辺の道路 (国土地理院発行 1/50,000 佐倉を使用)



第2図 遺跡周辺の地形（八千代都市計画基本図に加筆 1：5,000）

（参考文献）

- 関 俊彦他 1982 「おとおめいり遺跡」 大溜入遺跡調査会
 落合章雄 1989 「八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡」 朝千葉県文化財センター
 大塚依子・豊田秀治 1994 「八千代市神塚遺跡・上の台遺跡 他」 朝千葉県文化財センター
 森 竜哉 1996 「仲ノ台遺跡・ライノ作遺跡他発掘調査報告書」 八千代市西八千代遺跡群調査会
 八千代市教育委員会 1995 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告平成6年度」
 八千代市教育委員会 1996 「八千代市埋蔵文化財調査年報—平成6年度版—」
 八千代市教育委員会 1996 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告平成7年度」

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代 (第27図; 写真図版23)

本遺跡からは旧石器時代に比定される石器が数点出土している。しかし、いずれも遺構覆土内や縄文土器包含層中からの出土であり、詳細な出土層位の把握には至らなかった。このため、形態的な特徴や石材の同定により、縄文石器との分離を図った。なお、支谷を隔てた仲ノ台遺跡(落合 1989)では2ヶ所のブロック、同北側の芝山遺跡(落合 1989)では19ヶ所のブロック(内2ヶ所環状ブロック)が確認されており、本遺跡の調査中においても当該期の細石刃の検出に伴い(Ⅲ層上面)、下層の調査を一部行ったが、遺物の検出は皆無であった。

1はナイフ形石器である。2は尖頭器で、有種状の剥離が施される。石質や製作技法から、東内野型尖頭器に比べるとやや異質な感じを受ける。3は細石刃である。4は両面調整石器である。主要剥離面がなく、調整痕のみが残る。製作途上で破損したものか。5~13は剥片である。12には二次加工が施される。14は楔形石器である。ハイボーラテクニックにより、上下両端面から剥離を行う。15~17は礫である。15は被熱する。

単位 (cm)

No	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
1	遺構外	ナイフ形石器	珩質頁岩	3.1	2.8	0.7	7.7	
2	01M	尖頭器	黒曜石	5.2	2.9	0.9	9.5	透明度の低い黒曜石
3	遺構外	細石刃	黒曜石	2.7	0.7	0.3	0.4	透明度の高い黒曜石
4	36P	両面調整石器	チャート	3.9	2.6	1.1	12.4	主要剥離面なし・原石面を残す
5	36P	剥片	チャート	2.1	3.3	0.6	4.4	原石面を残す
6	16D	剥片	粘板岩	4.4	4.5	1.3	34.3	原石面を残す
7	08D	剥片	ホルンフェルス	3.1	2.9	0.4	6.8	
8	26D	剥片	黒曜石	2.9	2.4	0.6	4.4	気泡の目立つ黒曜石
9	遺構外	剥片	石英	4.7	3.1	1.1	15.5	原石面を残す
10	遺構外	剥片	珩質頁岩	3.3	2.1	0.6	3.9	
11	13D	剥片	水晶	2.5	1.6	0.7	2.3	原石面を残す
12	遺構外	剥片	チャート	2.6	2.3	0.9	4.1	二次加工を施す
13	遺構外	剥片	メノウ	2.3	2.3	1.3	8.2	
14	遺構外	楔形石器	チャート	3.9	1.9	1.1	10.5	原石面を残す
15	遺構外	礫	流紋岩	6.2	3.4	3.3	73.6	被熱する
16	19D	礫	流紋岩	5.5	3.1	2.7	85.5	
17	遺構外	礫	流紋岩	6.6	5.7	3.6	166.8	

第1表 旧石器時代出土石器観察表

第2節 縄文時代

a. 遺構と遺物

本遺跡の主体となる遺構、遺物が検出されている。遺構は、住居跡20軒、ピット21基を検出した。住居跡は、全て前期黒浜式の中～新段階に限られた時期である。ピットは落とし穴15基、用途不明6基である。落とし穴の内、時期が特定できるピットは、前期黒浜式のやや古段階のもの2基、中期加曾利E式のもの1基である。用途不明のピットはおおむね前期黒浜式に帰属するものと思われる。

以下各々の遺構について概要を記す。

06D (第5図・写真図版3)

規模 3.7m×4.2mのややいびつな方形 N-58°-W (炉を奥にして計測)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A22cm A'17cm C-C'間 C12cm C'18cm

床面 全体にやや軟弱だが、炉の対辺から炉にいたる部分にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。

ピット P1-30cm P2-18cm P3-18cm P4-24cm 全体に浅く柱穴となりうるか不明。

炉 62cmの円形の掘り込みの中に、ドーナツ状に赤変したロームブロックが見られる。外径32cm、内径25cmで深さは10cmを測る。覆土は黒褐色土に焼土粒を少量含む。

遺物量 150点程度出土している。

07D (第5図・写真図版4)

規模 4.2m×4.8mのややいびつな方形 N-24°-W (炉1を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A17cm A'14cm C-C'間 C13cm C'17cm

床面 東西方向にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。北及び南壁際では軟弱で、踏み締められた痕跡はほとんど見られない。

ピット P1-38cm P2-62cm P3-30cm P4-27cm P5-23cm P6-48cm P7-28cm
P8-37cm P9-9cm

P1, 2, 6, 8-主柱穴 P3, 7-副柱穴? P4, 9, 5-貯蔵穴?

炉 炉1 48cm×37cmの楕円形で深さ8cmを測る。赤変したロームブロックが全体的に見られる。
炉2 42cm×30cmの楕円形で深さ10cmを測る。部分的に焼けたロームブロックが見られる。覆土はロームブロック混じりの黒色土に焼土粒を少量混入している。炉1がより使いこまれている。

遺物量 500点程度出土している。

08D (第6図・写真図版5)

規模 3.8m×4.5mのややいびつな長方形 N-29°-W (炉1を奥とし計測)

確認面 暗褐色土下層 B-B'間 B19cm B'21cm D-D'間 D13cm D'19cm

床面 南北方向にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。北壁際ではやや軟弱である。東壁ではロームブロック状を呈するがそう踏み締められてはいない。

ピット P1-77cm P2-74cm P3-75cm P4-76cm P5-16cm P6-79cm
P1, 2, 3, 4, 6-主柱穴 P5-副柱穴?

炉 炉1 52cm×36cmの楕円形で深さ2cmを測る。中央部で赤変したロームブロックが見られる。
炉2 45cm×38cmの楕円形で深さ3cmを測る。炉1同様の状況を呈する。炉3 55cm×48cmの楕
円形で深さ5cmを測る。炉1同様の状況を呈する。覆土はいずれも暗褐色土でローム粒、焼
土ブロックを少量含む。全体的に炉2の使用ひん度が高い。

遺物量 550点程度出土している。

09D (第6図・写真図版6)

規模 3.55m×3.15m×2.9mの台形 W-36°-S (床硬化面から想定)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A16cm A'11cm D-D'間 D16cm D'12cm

床面 東壁側から舌状に奥にのびて、固く踏み締められた痕跡が見られる。範囲以外においてもロ
ームブロック状を呈する。

ピット P1-27cm P2-10cm P3-40cm 主柱穴等の性格は不明。規格性はみられない。

炉 炉 45cm×37cmの楕円形で深さ4cmを測る。やや偏って赤変したロームブロックが見られる。
覆土は暗褐色土でロームブロック、焼土ブロックを少量含む。

遺物量 200点程度出土している。

10D (第7図・写真図版7)

規模 3.8m×4.3mのややいびつな長方形 N-72°-W (炉2を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A10cm A'10cm D-D'間 D13cm D'17cm

床面 東西方向にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。北西角、南東角ではロ
ームブロック状を呈するがそう踏み締められてはいない。

ピット P1-70cm P2-13cm P3-84cm P4-70cm P5-20cm P6-22cm P7-70cm
P8-36cm P9-74cm P10-10cm

P1, 3, 4, 7, 9-主柱穴 P2, 5, 6, 10-副柱穴? P8-貯蔵穴?

炉 炉1 52cm×38cm (想定)の楕円形で深さ7cmを測る。底面で赤変したロームブロックが見ら
れる。P1に切られる。炉2 45cm×40cmの楕円形で深さ7cmを測る。やや偏って底面が赤変
している。P1によって炉1が覆されているので、炉1から炉2への造り替えが想定される。

遺物量 300点程度出土している。

11D (第7図・写真図版8)

規模 4.05m×3.70m×3.5mの不整形台形 N-11°-W (炉1を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 B-B'間 B20cm B'23cm C-C'間 C21cm C'7cm

床面 中央部及び北側部分にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。東、南、西
壁際においてはやや軟弱で踏み締められてはいない。

ピット P1-30cm P2-49cm P3-74cm P4-74cm P5-64cm P6-18cm P7-12cm
P8-46cm P9-26cm P2, 3, 4, 5, 6, 8, 9-主柱穴 P1, 7-副柱穴?

炉 炉1 68cm×50cmの楕円形で深さ8cmを測る。北側に偏って赤変したロームブロックが見られる。炉2 82cm×56cmの楕円形で深さ7cmを測る。覆土にごく少量の焼土粒を混入する。炉3 62cm×55cmの楕円形で深さ7cmを測る。底面中央において赤変したロームブロックが見られる。全体としては炉1, 3の使用ひん度が高い。炉2は試みに使用した感がつよい。

遺物量 2000点程度出土している。

12ABD (第8図・写真図版9)

本跡はプラン確認時において、同様の覆土であり、遺物も明らかな時期差は認められなかった。長軸方向にセクションを設定し掘り下げた結果、黒浜式期の2軒の住居跡であることが判明した。セクションの観察ではBからAの造り替えは認められたが、出土遺物からは、明確な時間差は認められなかった。

12AD

規模 3.6m×3.7m (想定) の不整形 N-68°-W (炉を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 B-B'間 B22cm B'16cm E-E'間 E20cm E'21cm

床面 東西方向にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。他の部分はやや軟弱である。

ピット 検出されなかった。

炉 炉47cm×40cmの楕円形で深さ5cmを測る。底面中央に赤変したロームブロックが見られる。覆土は暗褐色土に2mm大の焼土粒を混入する。

12BD

規模 3.2m×4.1mの不整形 E-66°-S (炉を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 D-D'間 D22cm D'15cm E-E'間 E17cm E'16cm

床面 南壁際から西壁南側部分を除いて固く踏み締められた痕跡が見られる。

ピット P1-60cmのみ 副柱穴か?

炉 炉67cm×45cmの楕円形で深さ10cmを測る。西側に偏って赤変したロームブロックが見られる。

遺物量 A, B合わせて1500点程度出土している。

13D (第9図・写真図版10)

規模 4.52m×7.3m×3.0mの不整形台形 N-32°-W (炉を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 C-C'間 C15cm C'13cm E-E'間 E26cm E'18cm

床面 全体的に固く踏み締められた痕跡が見られる。南東及び南西コーナーにおいても強く踏み締められた状況ではないが、ロームブロック状を呈する。

ピット P1-59cm P2-50cm P3-64cm P4-15cm P5-15cm P6-66cm P7-22cm
P1, 2, 3, 6, 7-主柱穴 P5-貯蔵穴?

炉 炉80cm×50cmの楕円形で深さ5cmを測る。底面中央に赤変したロームブロックが見られる。なお、P4は底面においてロームブロックがカリカリした状態で、覆土にごく少量の焼土粒

を混入していた。

遺物量 900点程度出土している。

14D (第8図・写真図版10)

規模 3.0m×3.0m (想定) の不整形 北-7°-西

確認面 暗褐色土下層 B-B'間 B20cm B'23cm C-C'間 C21cm C'7cm

床面 北側はカクランにより消失しているが、中央やや西に偏って固く踏み締められている部分がある。その他はやや軟弱で踏み締められてはいない。

ピット P1-13cm P2-14cm 主柱穴か？

炉 検出されず。

遺物量 400点程度出土している。

15D (第9図・写真図版11)

規模 3.07m×4.2mの不整形 北-52°-西 (炉を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A10cm A'13cm C-C'間 C12cm C'7cm

床面 東壁側では、やや掘り過ぎのため不明だが、全体に固く踏み締められた痕跡がみられ壁際においてやや軟弱である。

ピット P1-5cm P2-10cm 柱穴か？

炉 掘り過ぎのため明確ではないが、23cm×26cmの円形の範囲で赤色ローム化している。掘り下げの経過をみると、そう使用しているとは思えない。

遺物量 160点程度出土している。

16D (第10図・写真図版12)

規模 4.3m×4.6mの不整形 北-6°-西 (炉1を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A20cm A'22cm D-D'間 D20cm D'20cm

床面 西壁側を除いてロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。西壁側ではやや軟弱である。

ピット P1-50cm P2-74cm P3-56cm P4-65cm P5-63cm P6-20cm

P1, 2, 3, 4, 5, 6, -主柱穴

炉 炉1 80cm×59cmの楕円形で深さ6cmを測る。底面中央に赤変したロームブロックが見られる。炉2 80cm×46cmの楕円形で深さ7cmを測る。覆土にごく少量の焼土粒を混入する。炉2はP5に壊されているので、炉2から炉1への造り替えが行われていると思われる。

遺物量 1000点程度出土している。

17D (第10図・写真図版13)

規模 4.1m×4.5m×3.15mの不整形 北-5°-西 (炉を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A18cm A'20cm E-E'間 E17cm E'19cm

床面 中央部から南側部分にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。特に炉を北

側とした中央部分は著しく硬化している。

ピット P1-42cm P2-34cm P3-43cm P4-45cm P5-22cm P6-43cm P7-36cm
P3, 4, 6, 7-主柱穴 P1, 2-副柱穴? P5-貯蔵穴? P5は、覆土下層から垂飾品と石匙がセットで出土している。家屋内祭祀あるいは墓坑としての性格も考えられる。

炉 炉87cm×38cmの楕円形で深さ5~8cmを測る。2カ所で赤変したロームブロックが見られる。覆土は黒褐色土で焼土ブロックを少量混入している。

遺物量 600点程度出土している。

19D (第11図・写真図版14)

規模 4.7m×5.8mの長方形 N-36°-W (炉を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 C-C'間 C32cm C'24cm H-H'間 H27cm H'27cm

床面 北、西壁際においてはやや軟弱である。中央から東壁にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。

ピット P1-42cm P2-66cm P3-68cm P4-72cm P5-50cm P6-66cm P7-45cm
P8-61cm P9-34cm

P2, 3, 4, 5, 6, 8-主柱穴 P1, 7, 9-副柱穴 ピットの覆土は上層で暗褐色土に1~2mm大のローム粒を全体に含む。深いものは1~3cm掘り下げると、最下層までローム土が充填されていた。

炉 炉70cm×50cmの楕円形で深さ3cmを測る。底面に赤変したロームブロックが見られる。覆土は暗褐色土で焼土ブロックを少量混入する。

その他 貝ブロックが2カ所において検出された。貝ブロック1は30cmの円形で厚さ6cmを測る。貝ブロック2は95cm×45cmの楕円形で厚さ12cmを測る。貝種はマガキ、ウミナ、ハマグリ、サルボウでマガキが主要量である。住居廃絶後のP6が埋まった段階で投棄している。

遺物量 2400点程度出土している。

20D (第11図・写真図版15)

規模 4.13m×3.70m×3.25mの不整形 W-38°-S (炉1, 2を右側にして計測)

確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A14cm A'7cm F-F'間 F7cm F'9cm

床面 中央部から東コーナーにロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。とくに炉を中心に非常に良く踏み締められている。他はやや軟弱である。

ピット P1-50cm P2-43cm P3-12cm P4-7cm 規格性のある配置ではないが、柱穴と想定される。

炉 炉1 70cm×48cmの楕円形で深さ15cmを測る。やや偏って赤変したロームブロックが見られる。炉2 55cm×45cmの楕円形で深さ7~16cmを測る。覆土は黒褐色土で2~3mm大の焼土粒を含む。使用ひん度は炉1が高い。

遺物量 150点程度出土している。

21D (第12図・写真図版15)

- 規模 5.3m×3.0m以上の長方形 N-36°-E (炉2を通して長軸で計測)
- 確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A18cm A'30cm C-C'間 C19cm C'17cm
- 床面 全体に軟弱で踏み締められた痕跡はうかがえない。しいていえば、炉を中心にソフトロームを踏み締めた痕跡がある。
- ピット P1-41cm P2-23cm P3-13cm P4-30cm規格性のある配置ではないが、柱穴と想定される。
- 炉 炉1 59cm×50cmの楕円形で深さ13cmを測る。底面中央に赤変したロームブロックが若干見られる。炉2 76cm×56cmの楕円形で深さ11cmを測る。やや偏って焼土ブロックが見られる。炉3 40cm×31cmの楕円形で深さ2cmを測る。底面中央において赤変したロームブロックが若干見られる。炉4 25cm×20cmの楕円形で深さ6cmを測る。炉5 38cm×32cmの楕円形で深さ4cmを測る。赤変したロームブロックが底面中央に見られる。以上5カ所において使用痕のある炉跡?が検出されているが、使用ひん度は炉1が高い。続いて同程度の使用として2, 3, 5となる。
- 遺物量 400点程度出土している。

23D (第12図・写真図版16)

- 規模 3.5m×2.5mの楕円形 N-2°-E (長軸方向で炉を右にして計測)
- 確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A17cm A'18cm D-D'間 D18cm D'18cm
- 床面 中央部分にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。壁際部分は全周にわたってやや軟弱である。
- ピット P1-36cm P2-76cm P3-28cm P4-41cm P5-68cm P6-18cm
P2, 5-主柱穴 P1, 3, 4, 6-副柱穴
- 炉 炉83cm×58cmの楕円形で深さ5cmを測る。底面中央に赤変したロームブロックが見られる。覆土は黒褐色土で焼土ブロックを少量含む。上場と赤変したロームブロックの間が一段下がったドーナツ状となっている。
- 遺物量 400点程度出土している。

24D (第13図・写真図版17)

- 規模 3.2m×2.7mの隅丸長方形 N-17°-W (炉を奥として計測)
- 確認面 暗褐色土下層 A-A'間 A17cm A'16cm D-D'間 D15cm D'12cm
- 床面 中央部分にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。壁際部分はほぼ全周にわたってやや軟弱である。
- ピット P1-38cm P2-25cm 主柱穴か?
- 炉 炉68cm×32cmの楕円形で深さ0~10cmを測る。底面は凸凹でロームブロックがカリカリしている状態。覆土は暗褐色土で5mm大の焼土ブロックを混入する。
- 遺物量 80点程度出土している。

25D (第13図・写真図版18)

規模 3.7m×3.2mの不整形 N-60°-W (炉1, 2を奥として計測)

確認面 暗褐色土下層 B-B'間 B20cm B'23cm E-E'間 E21cm E'7cm

床面 中央部分にロームブロック状の固く踏み締められた痕跡が見られる。壁際部分はほぼ全周にわたってやや軟弱である。

ピット P1-21~24cm P2-28cm P3-15cm P4-31cm P5-24cm P6-10cm
P1と4 P2と3 P6と5を相対した柱配置と想定できる。

炉 炉1 48cm×38cmの楕円形で深さ8cmを測る。すり鉢状の断面を呈する。底面においてロームブロックがカリカリ状態となっている。覆土は黒褐色土で2mm大の焼土粒を混入する。炉2 35cm×21cmの楕円形で深さ6~16cmを測る。覆土及び底面は炉1と同様な状況となっている。1, 2とも同様な使用状況と言える。

遺物量 350点程度出土している。

26D (第14図・写真図版18)

規模 3.1m×1.5m以上の方角か長方形 N-38°-E (炉を奥として計測)

確認面 ソフトローム上面 A-A'間 A7cm A'10cm C-C'間 C7cm C'7cm

床面 東西の壁際を除きロームブロック状のやや踏み締められた痕跡が見られる。

ピット P1-28~42cm 貯蔵穴か？

炉 炉34cmの円形で深さ3cmを測る。底面にロームブロックがカリカリ状態となって検出されている。

遺物量 80点程度出土している

23P (第15図・写真図版19)

規模・長軸方位 2.6m×1.08m×深さ1.58mの楕円形 N-58°-E

壁・底面の状態 底面は平坦で、壁は直立して上部でやや広がる。

覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中~下層は人為堆積で褐色土系となっている。

29P (第15図・写真図版19)

規模・長軸方位 2.8m×1.3m×深さ2.56mの楕円形 N-82°-E

壁・底面の状態 底面は緩いU字状をなす。壁は直立して上部でやや広がる。

覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中~下層は人為堆積で褐色土系となっている。

30P (第16図・写真図版19)

規模・長軸方位 1.79m×1.39m×深さ0.87mの隅丸長方形 N-32°-W

壁・底面の状態 底面はやや段差はあるが、平坦を意識している。小ピットが3カ所検出された。壁は直立後中段から上方にやや広がる。

覆土の状態 上~中層は自然堆積で黒褐色土系、下層では、やや埋め戻しを意識してローム土を混入している。

31P (第16図・写真図版19)

- 規模・長軸方位 2.98m×0.99m×深さ1.69mの楕円形 N-29°-E
 壁・底面の状態 底面はやや凹凸があるが、平坦である。壁は直立後上方でやや広がる。
 覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

32P (第17図・写真図版19)

- 規模・長軸方位 2.68m×0.75m×深さ0.88mの楕円形 N-23°-W
 壁・底面の状態 底面は平坦である。壁は直立後上方で広がる。
 覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

33P (第17図・写真図版19)

- 規模・長軸方位 2.77m (想定)×1.03m×深さ1.8mの楕円形 N-26°-E
 壁・底面の状態 底面は平坦である。壁の立ち上がりはややオーバーハングして直立し上方でやや広がる。
 覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

36P (第18図・写真図版19)

- 規模・長軸方位 1.9m×1.46m×深さ2.28mの楕円形 N-44°-W
 壁・底面の状態 底面は平坦で、壁は直立して上部でやや広がる。
 覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

37P (第18図・写真図版19)

- 規模・長軸方位 2.6m×0.9m×深さ1.3mの楕円形 N-49°-W
 壁・底面の状態 底面はやや高低があるが平坦で、壁はやや斜方向に直立する。
 覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

39P (第19図・写真図版20)

- 規模・長軸方位 2.29m×1.06m×深さ1.07mの楕円形 N-22°-E
 壁・底面の状態 底面は平坦で、壁は直立して上部でやや広がる。
 覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

45P (第19図・写真図版20)

- 規模・長軸方位 2.35m×1.73m×深さ1.79mの楕円形 N-46°-W
 壁・底面の状態 底面は平坦で、壁は直立して上部でやや広がる。
 覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

47P (第21図・写真図版20)

- 規模・長軸方位 3.05m×1.56m×深さ1.98mの楕円形 N-46°-W

壁・底面の状態 底面はやや高低はあるが平坦で、壁は立ち上がりでややオーバーハングしながら直立し、上部でやや広がる。

覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

48P (第20図・写真図版20)

規模・長軸方位 3.21m×0.94m×深さ0.37mの楕円形 N-31°-W

壁・底面の状態 底面は高低の二段を有している。壁はやや角度をもって立ち上がっている。

覆土の状態 覆土は黒褐色土系でやや締まっている。

49P (第20図・写真図版20)

規模・長軸方位 2.56m×1.79m×深さ3.01mの楕円形 N-35°-E

壁・底面の状態 底面はほぼ平坦で、壁は直立して中位から緩やかに広がる。

覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

52P (第21図・写真図版20)

規模・長軸方位 1.91m×1.38m×深さ1.0mの隅丸長方形 N-42°-W

壁・底面の状態 底面はほぼ平坦である。壁は角度をもって、立ち上がる。

覆土の状態 上～中層は自然堆積で黒褐色土系、下層では、やや埋め戻しを意識してローム土を混入している。

53P (第22図・写真図版20)

規模・長軸方位 1.73m×1.23m×深さ2.13mの隅丸長方形 N-84°-E

壁・底面の状態 底面はやや壁際が上がるが、平坦である。壁の立ち上がりはややオーバーハングぎみに直立し、上方で広がる。

覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

56P (第22図・写真図版20)

規模・長軸方位 0.79m×0.79m×深さ0.5mの円形 方位計測なし

壁・底面の状態 底面は平坦である。壁はやや角度をもって立ち上がっている。

覆土の状態 覆土は黒褐色土系で締まっている。焼土粒をごく少量含む。

57P (第22図・写真図版21)

規模・長軸方位 2.2m×1.08m×深さ0.3mの不整形円形 E-2°-S

壁・底面の状態 底面はあまり平坦ではなく、壁はだらだらと立ち上がる。

覆土の状態 覆土は黒褐色土系で締まっている。

58P (第22図・写真図版21)

規模・長軸方位 1.22m×1.02m×深さ0.54mの不整形円形 N-24°-E

壁・底面の状態 底面は平坦である。壁はやや角度をもって立ち上がっている。

覆土の状態 覆土は黒褐色土系で締まっている。

59P (第23図・写真図版21)

規模・長軸方位 1.9m×1.39m×深さ2.05mの不整楕円形 N-21°-W

壁・底面の状態 底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

覆土の状態 上層は自然堆積で黒褐色土系、中～下層は人為堆積で褐色土系となっている。

62P (第23図・写真図版21)

規模・長軸方位 2.0m×1.8m×深さ0.38mの不整円形 N-18°-E

壁・底面の状態 底面は平坦である。壁はやや角度をもって立ち上がっている。

覆土の状態 覆土は黒褐色土系で締まっている。

66P (第23図)

規模・長軸方位 0.42m×0.42m×深さ0.12mの円形 方位計測なし

壁・底面の状態 底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土の状態 覆土は焼土粒を多量に含んでいる。

その他 炉としての性格も考慮したが、周辺において遺物、施設は検出されなかった。

縄文式土器の分類について

本遺跡からは、縄文時代早期条痕文系土器～後期加曾利B式土器までの諸型式が出土し、なかでも主体を占めるものは前期中葉黒浜式土器である。この傾向は集落の営まれた時期と符合し、周辺の遺跡展開とも合致する。今回の報告では、特に黒浜式土器について文様上の細分を行い、出土土器に関する記載は、下記の分類項目に従い進めていくこととする。なお、黒浜式土器の文様細分が示唆する変遷過程については、第2表を参照されたい。また、黒浜式土器の無絨織土器については、水子段階(新段階後半)に比定されるものと考え、断りがない限り該期の土器と判断していただきたい。

早期の土器

第I群 条痕文系土器

前期中葉の土器

第II群 関山式土器

第III群 黒浜式土器

- a 種 格子目文土器 (沈線により格子目文が描出されるもの)
- b 種 横位全面施文土器 (櫛歯状施文具や半截竹管状施文具による沈線が、器面全面に対し横位に展開するもの)
- c 種 櫛歯状文土器 (沈線により創出した横長の区画の中に、櫛歯状文を施すもの)
- d 種 貝紋文土器 (放射肋をもつ貝殻腹縁の押圧により文様を施すもの)
- e 種 陸帯文土器 (粘土紐の貼付により、陸帯を施すもの)
- f 種 縷糸文土器 (木目状縷糸文、網目状縷糸文、数条単位の縷糸文などにより、地文が施されるもの)
- g 種 全面縄文土器 (無節、単節、複節、付加条、異節、結節、結束などの各種縄文により、地文が施されるもの)
- h 種 肋骨文土器 (沈線により、肋骨文が描出されるもの)
- i 種 羽状菱形縄文土器 (付加条縄文により、地文羽状菱形縄文が施されるもの)
- j 種 組み合せ櫛歯状文土器 (沈線により複数の区画 (パネル的) を創出し、全体的に櫛歯状文を呈すもの)
- k 種 無文土器 (主に浅鉢形土器の破片と思われ、擦痕の残るものもある)
- l 種 有尾式系土器 (中部高地周辺に分布する土器で、近年群馬県や埼玉県西部での出土が目立つ・在地産)
- m 種 大木2a式系土器 (東北地方南部仙台湾周辺に分布する土器で、黒浜式成立に多大な影響力をもつ・在地産)

第IV群 大木2a式土器 (胎土および文様から搬入品と推されるもの)

前期後葉の土器

第V群 諸磯式土器

第VI群 浮島式土器

中期の土器

第VII群 五傾ヶ台式土器

第VIII群 阿玉台式土器 (猪沢式～新道式を含む)

第IX群 加曾利E式土器 (曾利系を含む)

後期の土器

第X群 加曾利B式土器

	関山Ⅱ式	黒浜式古段階		黒浜式中段階		黒浜式新段階		諸磯a式 浮島I式
		前半	後半	前半	後半	前半	水子段階	
格子目文								
横位全面施文								
鋸歯状文								
貝殻文								
隆帯文								
撚糸文								
縄文								
肋骨文								
羽状菱形縄文								
組み合わせ鋸歯状文								
大木2a式系土器								

第2表 黒浜式土器における文様変遷表

06D出土遺物（第28図・第3表；写真図版24）

1～9、11は第Ⅲ群である。1はa種である。2はb種である。3～4はh種で、3は初期肋骨文に比定される。5～9、11はg種である。5は無節、6～9、11は単節である。10は流紋岩製の磨石である。

07D出土遺物（第29図・第3表；写真図版24・25）

3は第Ⅰ群である。1～2、4～25は第Ⅲ群である。2、4～5はb種である。2は浅鉢形土器、4には隆帯が貼付され、共に古段階に比定される。5は中段階に比定される。6～8はh種である。9～10はj種である。9は初期段階に比定される。11～12はf種で、11は木目状撚糸文、12は2条単位の撚糸文が施される。1、13～19、21、23はg種である。13、23は無節、1、14～19は単節、21は付加条である。なお14、23は多条である。20、22はi種である。24～25は底部破片で、24はh種、25はg種に帰属する。26は流紋岩製の使用痕ある碟である。27は流紋岩製の用途不明石器である。

08D出土遺物（第30～31図・第3表；写真図版25・26）

1は第Ⅱ群で、付加条縄文が施される。2～38は第Ⅲ群である。2～4はa種である。5～6はb種である。7はc種で、単段の鋸歯状文が施される。8はe種である。9～12はh種である。9は流水状の肋骨文が描出される大型深鉢の口縁部で、新段階に比定される。13はj種である。14～26はg種である。14～15は無節、16～17は単節と異節、18～24は単節、25～26は付加条である。16・17は同一個体で、16には追加整形と粘土粒、17には幾何学文が施される。黒浜式古段階初期に比定される。26には粘土隆起と追加整形が残る。27～35はi種である。29・31は同一個体である。30は追加整形が施され、右傾左傾の付加条の境に沈線を加えることで、肋骨文を意識する。36～37は底部破片で、36はd種、37はi種に帰属する。38はP2からの出土遺物で、i種に帰属する。39～40は磨石である。石材は39がホルンフェルス、40が流紋岩である。41は流紋岩製の敲石である。42は蛇紋岩製の磨製石

斧の基部である。43は軽石（流紋岩）である。

09D出土遺物（第32図；写真図版26・27）

1~17は第Ⅲ群である。1はb種である。2~4、14はh種である。14は波状文・肋骨文・地文付加条縄文の3文様帯構成で、初期肋骨文に比定される。5~9、11~12、15~16はg種である。15は無節反撚り、5~6、12、16が単節、7~9、11が付加条である。10、17はi種である。17の口縁部には細かな爪形文が周回する。13は第V群で、木葉（レンズ）状肋骨文が描出される。木葉文内は磨り消され、地文には単節縄文が施される。諸磯a式に比定される。

10D出土遺物（第33図・第3表；図版27）

1~18、20は第Ⅲ群である。1~2はa種である。3はb種で、中段階に比定される。4~5はh種である。4は矢羽状に肋骨文が描出される。6はj種である。7~17はg種である。7~8は無節、9~13、15~17は単節、14は付加条である。18はi種である。20は第Ⅳ群である。口縁部文様帯は低い隆帯により区画され、上部文様帯には円形竹管文、下部文様帯には爪形文が施される。地文には単節縄文が施され、白色系を呈す胎土には雲母、長石、石英などの鉱物が多量に含まれる。大木2a式土器である。19は黒曜石の剥片である。

11D出土遺物（第34~36図・第3表；写真図版28・29）

1は第Ⅰ群である。2~57は第Ⅲ群である。2~6、50、54はa種で、5・6は同一個体である。52はb種で、砲弾形を呈す大型深鉢土器と思われる。7~10、56はh種である。9は初期肋骨文に比定される。11~16はj種である。17はd種である。18~19はe種で、同一個体である。眼鏡状の隆帯を頸屈曲部に周回させ、地文には燃糸文が施される。20はf種である。2条単位の燃糸により菱形文を描出する。21~35、53、55、57はg種である。21~23、55は無節、24~25は無節と単節、26~34、53、57は単節、35は複節である。55には施文時における粘土隆起が残る。36~43、51はi種である。44~45はl種である。文様は口縁部に巡る沈線と刺突文で描出され、地文には単節縄文が施される。大木2a式の文様構成に近似する。なお45の胎土中には石英などの鉱物が多量に含まれ、搬入品の可能性がある。46~50は底部破片である。46はa種、47~48はg種、49はi種に帰属する。58はホルンフェルス製の縦型石匙である。全体的に摩耗している。59は軽石（流紋岩）製の漁労浮子である。断面凹字形を呈す。60~61は磨石である。石材は60が砂岩、61が流紋岩である。62は流紋岩製の蔽石である。

12D出土遺物（第37~38図・第3表；写真図版29・30）

31は第Ⅰ群である。平底の底部で、土器内面の条痕調整は看取されない。1は第Ⅱ群である。注口部は雉なつくりを呈す。2~30、32~35は第Ⅲ群である。2~3、32はa種である。32は鉢状の器形を呈す。4はb種である。5~8はh種である。8は諸磯的な文様帯を構成する。9~11はj種である。9は初期段階に比定される。12はd種である。13~14はf種で、2条単位の燃糸により菱形文を描出する。14には補修孔が残る。15~20、34~35はg種である。いずれも単節縄文である。21~28はi種である。28は縦位の円形竹管文を右傾左傾の付加条の境に垂下させ、肋骨文を意識する。29~30

は底部破片である。いずれもg種である。33はk種の無文鉢形土器である。36は流紋岩製の磨石である。37はホルンフェルス製の磨石-蔽石である。38~39は軽石(流紋岩)製の漁労浮子である。38は断面凸字形を呈し、39には半截竹管状工具による平行沈線が上部に残る。

13D出土遺物(第39図・第3表;写真図版31)

1~31は第Ⅲ群である。1~2はc種である。1には幾何学的文様が描出される。3~4はh種である。5はj種である。6はf種で、2条単位の撚糸により菱形文を描出する。7~19はg種である。7~11は無節(8は反撚り)、12~18は単節、19は複節である。20は沈線により交叉状に文様が描出される土器である。法蓮寺山遺跡第3号住居址(『小金線』所収 宮入他 1973)出土の土器(第50図18)に類例を求めることができる。21~26はi種である。27は赤彩土器である。文様は波状文が施される。29~31は底部破片である。29はa種、30はh種、31はg種である。28は第V群である。木葉(レンズ)状肋骨文が描出され、木葉文内は磨り消される。諸磯a式に比定される。32はチャート製の小礫である。33はホルンフェルス製の打製石斧である。34は砂岩製の磨石である。35は安山岩製の磨石-蔽石で、破損した石皿を転用する。

14D出土遺物(第40図;写真図版32)

1は第I群で、底部付近の破片である。2~22は第Ⅲ群である。2~3はa種である。4~6はh種である。8~16はg種である。8は無節、9、11~15は単節、16は複節、10は付加条である。17~21はi種である。22は底部破片で、g種に帰属する。7は第VI群である。肋骨文が描出され、地文には撚糸文が施される。浮島Ia式に比定される。

15D出土遺物(第41図・第3表;写真図版32)

1~29、32は第Ⅲ群である。1~3はa種である。4~6はh種である。7はj種である。32はf種で、2条単位の撚糸により菱形文を描出する。8~22、25はg種である。8~9は無節、10~21は単節、22は付加条、25は結節回転痕のみが施される。23~24はi種である。26~27は底部破片である。26はg種、27はh種に帰属する。28~29はP2からの出土遺物で、28はh種、29がg種である。30は砂岩製の小礫である。31は流紋岩製の磨石-蔽石である。

16D出土遺物(第42~46図・第3表;写真図版33~35)

1~3は第I群である。4~70は第Ⅲ群である。4~8、58~59はa種である。9はb種である。10~12、60~61はh種である。11には追加整形の痕跡が残る。13~16はj種である。17~18はf種である。18は網目状撚糸文である。19~40、63、65~68はg種である。19~22は無節、23~33、63、65~68は単節、34~40は付加条である。41~51、64、69~70はi種である。52~57は底部破片である。52はa種、53、55はg種、54、56~57はi種である。62はk種の無文浅鉢形土器である。71は蛇紋岩製の磨製石斧である。72は緑泥片岩製の磨製石斧である。73は砂岩製の蔽石である。

17D出土遺物(第47~48図・第3表;写真図版35・36)

1は第I群である。2~36は第Ⅲ群である。2~4はa種で、2・3は同一個体である。5~8は

b種である。いずれも古段階に比定される。9～12はh種である。13はj種である。34はd種の小型深鉢形土器である。14はf種で、雑な捺糸文が施される。15～26、35～36はg種である。15は無節、16～26は単節、35～36は付加条（36は軸繩がRL、付加される繩がRLRか）である。16には追加整形、19には補修孔が残る。36は、黒浜式古段階初期に比定される。27～31はi種である。33は底部破片で、a種に帰属する。32はP5からの出土土器で、g種に帰属する。37～38も同じくP5（貯藏穴）の覆土下層より出土した石器及び石製品である。37は粘板岩製の横型石匙である。全体的に摩耗する。38は蛇紋岩製の垂飾品である。

19D出土遺物（第49～53図・第3表；写真図版36～39）

1～3は第I群である。4は第II群である。5～100、104～125は第III群である。5はb種である。6～9はa種で、6・8は同一個体である。10～27、111～113はh種である。23～27は木葉（レンズ）状肋骨文で、23～25、26～27は各々同一個体である。なお26・27は、諸磯a式に比定される可能性もある。112・113も同一個体である。28はj種である。115、117はd種で、115はロッキング手法による施文がなされる。29～65、94～95、116、118～121、124はg種である。29～35、118は無節で、118は反撚りである。36～64、94～95、116（多条）、119～121、124は単節である。41には施文時における粘土隆起、42には追加整形の痕跡が残る。121の土器内面には黒色塗料が付着している。124は完形の小型深鉢形土器である。65は複節である。66～93、114、122～123、125はi種である。93は口縁部文様帯に肋骨文が描出される。114は縦位の爪形文により肋骨文を意識する。96～98はk種である。器形は96が小型深鉢、97～98が浅鉢と思われる。99～100はl種である。爪形文により大形菱形文が描出されるものと思われる。101は第IV群である。縦位の無節縄文を地文とし、波状文が描出される。胎土は橙白色を呈し、口唇部は刻まれる。大木2a式土器である。104～110は底部破片である。104はa種、105はh種、106～108はg種、109～110はi種である。102は第IX群である。中期末から後期初頭に比定される。103は第X群である。胎土は乳白色を呈す。126は黒曜石製の横型石匙である。127は粘板岩製の磨製石斧である。128～129は砂岩製の磨石-敲石である。130は流紋岩製の敲石である。

20D出土遺物（第54～55図・第3表；写真図版39）

1～22は第III群である。1～3、21はh種である。3は木葉（レンズ）状肋骨文、21は初期肋骨文に比定される。4はj種である。5～11、22はg種である。5は無節反撚り、6～9、22は単節、10～11は付加条である。7には円形押捺文が施される。12～17はi種である。18は底部破片で、g種に帰属する。20はk種で、無文浅鉢形土器である。19は水子段階～諸磯a式にかけての時期に比定される土器と思われる。23はチャート製の横型石匙である。24は流紋岩製の磨石である。

21D出土遺物（第56図・第3表；写真図版39・40）

1～25は第III群である。1、25はa種である。25は鉢状の器形を呈す。2～6、24はb種である。6は中段階に比定される。24は砲弾形の器形を呈すものと思われる。7はc種である。8～10はh種である。11～20はg種である。11～13は無節、14～19は単節、20は複節である。なお、11は鉢状の器形、13には施文時における粘土隆起が残る。21～23はi種である。26は缺状耳飾りである。穿孔されていることから、欠損後、垂飾品として再利用された可能性も考えられる。27はチャート製の石鏝で

ある。

23D出土遺物（第57～58図・第3表；写真図版40）

1～31、33～36は第Ⅲ群である。1はa種である。2はc種である。3～5、35はb種である。4～5、35は中段階に比定される。6はh種で、矢羽状に肋骨文が描出される。7はj種である。8はd種で、ロッキング手法による施文がなされる。9はf種で、2条単位の燃糸により菱形文が描出される。10～22、36はg種である。10、36は無節、11～21は単節、22は付加条である。なお12には幾何学文、36には施文時における粘土隆起が残る。23～27はi種で、26には追加整形の痕跡が残る。28は1種に帰属するものと思われ、連結する複数の菱形文の中に渦巻文が充填される土器である。地文は施されていない。29～31は底部破片である。29はd種、30はa種、31はg種である。33～34はP2からの出土遺物である。33はb種の中段階、34はa種に帰属する。32は第Ⅸ群である。胎土には雲母・長石などの鉱物を多量に含む。加曾利E I式に比定される。37～39は小礫である。石材は37が流紋岩、38がチャート、39が石英である。

24D出土遺物（第59図・第3表；写真図版41）

1～15は第Ⅲ群である。1はb種で、地文には単節縄文が施される。2～3はh種である。4はf種で、2条単位の燃糸文が施される。5～10、14はg種である。14が付加条の他は、全て単節である。11～13はi種である。15は底部破片で、g種に帰属する。16は流紋岩製の礫である。

25D出土遺物（第60図・第3表；写真図版41）

1～28は第Ⅲ群である。1～3はa種である。2・3は同一個体で、鉢状の器形を呈す。4～5はb種で、4は中段階に比定される。6～9はh種で、8・9は同一個体である。10～12はj種である。13～21はg種である。13～17は無節で、13・14、17は反撚りである。18～21は単節である。22～25はi種である。23は付加条の右傾左傾の境に沈線を加え、肋骨文を意識する。25は波頂部直下に爪形文による×字状文を施す。26～27はP4、28～29はP2からの出土遺物である。26～27はg種、28はi種、29は第Ⅶ群の浮島I a式に比定される。30は流紋岩製の円礫である。

26D出土遺物（第61図・第3表；写真図版42）

1～23、26～27は第Ⅲ群である。1～2はa種である。3、26はb種である。26は縦位の波状文が施される。4～8はh種である。9はf種である。10～21、27はg種である。10～12は無節、13～21は単節、27は付加条である。12は反撚り、27は異なる2本の付加条の原体を交互に施文し、羽状縄文を描出する。22～23はi種である。24は第Ⅶ群である。櫛歯状施文工具により条線文が施される。浮島I a式である。25は流紋岩製の小礫である。

ビット出土遺物（第62図・第3表；写真図版43）

(23P) 1は第Ⅲ群g種で、単節縄文である。

(29P) 1～2は第Ⅲ群g種で、1は無節、2は単節である。3は黒曜石製の石籤である。

(36P) 1～5は第Ⅲ群g種で、1～4は単節、5は付加条である。5は最下層中の出土である。

- (37P) 1は第Ⅲ群g種で、無節縄文である。
- (39P) 1は第Ⅲ群h種である。2は同g種で、無節縄文である。
- (45P) 1は第Ⅲ群f種の木目状燃糸文である。2は同i種である。
- (47P) 1～4は第Ⅲ群g種で、いずれも単節縄文である。5は同i種である。6は底部破片で、同g種に帰属する。
- (48P) 1は第Ⅲ群h種である。2は同i種である。
- (49P) 1は第Ⅲ群j種である。2～8は同g種で、2～3は無節、4～6は単節、7～8は複節である。9～10は底部破片で、9はg種、10はh種である。9の底面には節の細かい単節縄文が施される。なお、4・6・9は最下層中の出土である。
- (53P) 1は第Ⅸ群で、単節縄文である。最下層の底面近くより出土した遺物である。
- (57P) 1は第Ⅲ群h種である。2～4は同g種である。2は追加整形の痕跡が残る。4の爪形文間は磨り消される。
- (58P) 1～3は第Ⅲ群g種で、1～2は付加条、3は単節である。
- (59P) 1～2は第Ⅲ群g種で、1は単節、2は付加条である。3～5は同i種である。

遺構外出土遺物 (第63～67図・第4表; 写真図版44～47)

1～11は第Ⅰ群である。1は口縁部文様帯の破片で、太沈線により主文様が描出される。口唇部及び隆帯上には、沈線による刻みと貝殻殻頂部による押圧が施される。土器内面には擦痕が残る。早期後半茅山下層中に比定される。11は尖底土器である。12～110、150～151は第Ⅲ群である。12～17はa種である。18～28、150はb種である。18～23は古段階に、24～28、150は中段階に比定される。なお、24～26は同一個体である。29～43はh種である。36～43は水子段階に比定され、40、42～43は木葉状肋骨文が描出される。44～54はj種である。44は初期段階に比定される。55はd種である。56はe種である。57～58はf種である。57は網目状燃糸文、58は2条単位の燃糸文が施され、57には追加整形と剥落痕が残る。59～87はg種である。59～81は単節、82～87は付加条である。62は鉢状の器形を呈す。88～99はi種である。100は新段階に比定される土器である。101～105はk種である。いずれも浅鉢形土器の破片である。106～110は底部破片で、g種に帰属する。111～117は第Ⅴ群である。111・112は同一個体で、区画内には円形竹管文が施される。114はレンズ状肋骨文が描出される。115～117は木葉文が描出される。木葉文内には単節縄文が残る。なお、115・116は同一個体である。いずれの土器片も諸磯a式に比定される。118～122は第Ⅵ群である。118～119は山形文が施される。118の地文には細かな燃糸文が施される。120は地文燃糸文が施される。121は平行沈線文が施される。122は無文で、擦痕が顕著に残る。118～120は浮島Ⅰa式、121は同Ⅰb式、122は同Ⅲ式に比定される。123～125は第Ⅶ群である。123は複合口縁、124は三角印刻文、125は単節縄文が施される。123～124は五領ヶ台Ⅰ式、125は同Ⅱ式に比定される。126～140は第Ⅷ群である。文様は、断面三角形を呈する隆帯や角押文、有節沈線文、刺突文、連続刺突文、嬰状の輪積痕、縄文などで描出される。136～137は平底の底部である。128は阿玉台Ⅰa式、126～127、129～134は同Ⅰb式、135は同Ⅳ式に比定される。138～140は猪沢式～新道式に比定され、138・139は同一個体である。141～149は第Ⅸ群である。141・142は同一個体で、地文には条線文が施される。143～147は区画文と地文が施される。地文は145が条線文、147が複節縄文で、他は単節縄文である。いずれも加曾利EⅡ式に比定される。148・149は隆帯と縦位

の沈線により文様が構成される。曾利系の土器である。152～168は縄文石器である。152～154は石鏃である。石材はいずれもチャートである。155は黒曜石製の縦型石匙である。156～158は磨製石斧である。石材は156、158がホルンフェルス、157が蛇紋岩である。159はホルンフェルス製の打製石斧である。160は安山岩製の敲石である。茅山下層式と同一箇所出土している。161～162は磨石-敲石である。石材は161が流紋岩、162が砂岩である。163は流紋岩製の敲石である。164は流紋岩製の使用痕ある礫である。165はホルンフェルス製のスタンプ形石器である。166～168は石皿である。石材は166が砂岩、167～168が安山岩である。169は流紋岩製の砥石である。170は寛永通宝である。

土製品（第68図・第6表；写真図版48）

本跡から出土した土製品は土製円盤、土器片鏃、ミニチュア土器、魚骨圧痕土器などである。時期的には黒浜期が主体を占めるが、阿玉台期のものも若干まとまって出土している。

1～24は土製円盤である。5は部分的に凹状の使用痕が残る。7は大型のもので、形状は分銅形を呈す。6、11、14は水流による摩耗が顕著であるが、使用痕か廃棄後の所産によるものかは判断しかねる。計測値から見た全体的な傾向としては、長径が2.5～3.5cm、重さが7.0～8.0gの間に該当するものが多い。25～40は土器片鏃である。25は関山Ⅱ式終末～黒浜式古段階初期に比定される土器片である。27、30は短軸上に刻みが施される。34の表面には、縄を絡げた痕跡が溝状に残る。41はミニチュア土器の底部破片である。42は土製品ではないが、底部裏面に魚骨の圧痕が残る土器片である。遺存する魚骨の部位は腹椎骨から尾椎骨にかけての移行部分と思われ、魚種はニシン科に属する可能性が高い。詳細は自然遺物の項で言及する。

第3表 遺構内出土石器観察表

単位 (cm)

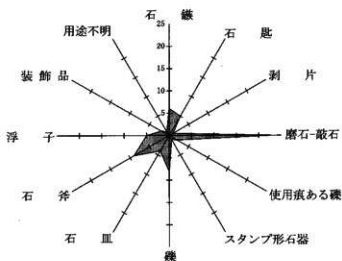
遺構No	探穴No	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	備考
06D	10	磨石	流紋岩	6.5	7.2	4.0	263.4	縁辺部と上下面に磨痕・被熱する
07D	26	使用痕ある礫	流紋岩	10.1	4.8	3.1	212.8	底面に使用痕
07D	27	用途不明石製品	流紋岩	2.8	1.3	0.5	3.3	凹部に摩耗痕
08D	39	磨石	ホルンフェルス	7.2	4.8	2.8	113.9	
08D	40	磨石	流紋岩	5.9	5.2	3.5	181.9	被熱する
08D	41	敲石	流紋岩	4.7	2.0	1.6	20.4	先端部に敲打痕
08D	42	磨製石斧	蛇紋岩	2.6	1.9	1.3	10.4	基部
08D	43	浮子	軽石	2.3	2.0	1.8	2.8	欠損品か
10D	19	剥片	黒曜石	2.8	1.9	0.8	2.5	
11D	59	石匙	ホルンフェルス	7.9	2.1	0.8	19.2	先端部が欠損・全体的に摩耗する
11D	60	浮子	軽石	7.6	6.2	6.8	22.8	中央に凹みを有す
11D	61	磨石	砂岩	8.7	6.5	4.8	397.4	縁辺部と上下面に磨痕・被熱する
11D	62	磨石	流紋岩	11.4	5.5	3.2	274.7	縁辺部と下面に磨痕
11D	63	敲石	流紋岩	8.5	3.7	3.5	153.7	中央に敲打痕
12D	36	磨石	流紋岩	6.1	5.7	3.5	156.2	縁辺部と上下面に磨痕
12D	37	磨石	ホルンフェルス	7.0	3.7	2.1	58.7	縁辺部に溝状に残る磨痕、上下面にも磨痕
12D	38	浮子	軽石	7.5	4.9	2.1	9.4	凸字形を呈す
12D	39	浮子	軽石	7.4	4.4	2.6	19.9	上端に沈線、右辺部に溝状に残る使用痕
13D	32	小礫	チャート	3.3	3.4	1.7	24.3	全体的に光沢をもつ
13D	33	打製石斧	ホルンフェルス	5.1	4.8	1.1	40.4	原石面を残す
13D	34	磨石	砂岩	7.2	5	2.1	128.1	縁辺部と上下面に擦痕
13D	35	敲石-磨石	鞍山岩	13.6	4.2	4.5	522.9	石重を転用・先端部に敲打痕、左辺面に磨痕
15D	31	磨石-敲石	流紋岩	8.9	7.5	2.7	250.4	縁辺部に磨痕、上面に敲打痕
15D	32	小礫	砂岩	3.2	1.7	1.1	7.4	
16D	71	磨製石斧	蛇紋岩	10.8	6.1	3.4	394.7	刃こぼれが著しい
16D	72	磨製石斧	緑泥片岩	12.4	4.6	2.3	230.7	
16D	73	敲石	砂岩	4.7	1.8	1.6	17.3	先端部に敲打痕
17D	37	石匙	粘板岩	4.2	4.9	0.7	12.3	全体的に摩耗する
17D	38	垂飾品	蛇紋岩	2.1	1.8	1.0	4.9	
19D	126	石匙	黒曜石	1.3	1.7	0.3	0.4	縞模様が目立つ黒曜石
19D	127	磨製石斧	粘板岩	5.9	1.6	0.6	9.4	
19D	128	磨石-敲石	砂岩	7.3	4.8	3.1	149.8	縁辺部に磨痕、上面に敲打痕
19D	129	磨石-敲石	砂岩	9.2	6.3	3.7	339.2	左辺部に磨痕、上面に敲打痕
19D	130	敲石	流紋岩	5.2	2.7	1.8	45.1	上面と先端部に敲打痕
20D	23	石匙	チャート	1.6	3.1	0.4	1.8	
20D	24	磨石	流紋岩	6.4	7.0	5.0	305.3	縁辺部と上下面に磨痕・被熱する
21D	26	缺状耳飾り	軟玉質の石	2.8	1.8	0.7	4.1	破損後、垂飾品に転用か
21D	27	石鏃	チャート	0.9	1.0	0.3	0.2	
23D	37	小礫	流紋岩	4.0	2.0	1.2	14.3	摩耗する
23D	38	小礫	チャート	2.9	2.5	1.2	13.2	
23D	39	小礫	石英	2.4	1.8	0.8	6.6	
24D	16	礫	流紋岩	5.6	2.9	2.2	42.2	被熱する
25D	30	礫	流紋岩	3.7	3.1	1.3	22.1	被熱する
26D	25	礫	流紋岩	4.0	2.2	1.8	19.6	被熱する
29P	3	石鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.5	先端部欠損
01M	34	石鏃	黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.3	透明度の高い黒曜石
01M	35	石皿	流紋岩	8.9	5.4	5.2	359.0	

第3表 遺構内出土石器観察表

単位 (cm)

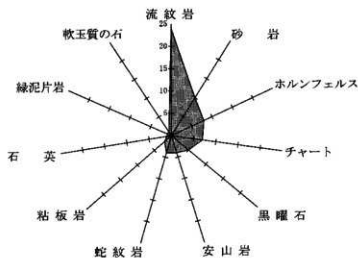
No.	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
152	石 鏃	チャート	2.7	1.5	0.4	1.1	
153	石 鏃	チャート	2.8	1.1	0.3	0.6	
154	石 鏃	チャート	3.1	2.0	0.4	1.9	
155	石 匙	黒曜石	3.3	2.0	0.6	3.5	縞模様の目立つ黒曜石
156	磨製石斧	ホルンフェルス	5.5	3.1	0.9	19.3	
157	磨製石斧	蛇紋岩	3.2	4.3	0.8	12.0	
158	磨製石斧	ホルンフェルス	6.8	4.9	3.4	187.5	
159	打製石斧	ホルンフェルス	10.1	5.8	1.8	150.9	原石面を残す
160	敲石	安山岩	7.4	3.7	3.0	91.5	上下両端部に敲打痕
161	磨石-凹石	流紋岩	9.6	4.7	3.9	264.3	縁辺部に磨痕、上下面に敲打痕
162	磨石-凹石	砂岩	9.2	3.5	3.8	189.6	縁辺部に磨痕、上面に敲打痕
163	敲石	流紋岩	6.7	1.8	1.9	39.5	先端部に使用痕
164	使用痕ある礫	流紋岩	8.0	5.5	6.4	403.8	底面に使用痕
165	スタンプ形石器	ホルンフェルス	10.9	6.9	4.0	429.5	底面に敲打痕
166	石 皿	砂岩	5.8	8.2	3.7	209.1	被熱する
167	石 皿	安山岩	7.0	5.8	2.5	104.6	
168	石 皿	安山岩	13.1	8.8	5.4	534.2	側面と裏面に蜂の巣状に凹みを有す
169	砥石	流紋岩	4.3	3.0	3.0	53.5	各面に使用痕が残る
170	寛水通宝	—	2.2	2.2	0.1	2.2	

第4表 遺構外出土石器等観察表



器種	個体数	構成比(%)
石 鏃	6	9.0
石 匙	5	7.5
剥片	1	1.5
磨石-敲石	23	34.0
使用痕ある礫	2	3.0
スタンプ形石器	1	1.5
礫	8	12.1
石 皿	4	6.0
石 斧	9	13.4
浮子	5	7.5
装飾品	2	3.0
用途不明	1	1.5
合計	67	100%

不掲載分3個体含む



石材	個体数	構成比(%)
流紋岩	24	35.8
砂岩	10	14.9
ホルンフェルス	8	11.9
チャート	7	10.4
黒曜石	5	7.5
安山岩	4	6.0
蛇紋岩	4	6.0
粘板岩	2	3.0
石英	1	1.5
緑泥片岩	1	1.5
軟玉質の石	1	1.5
合計	67	100%

不掲載分3個体含む

第5表 器種及び石材構成比

第6表 土製品観察表

単位 (cm)

No.	遺構No.	種 別	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	整 形	土器型式
1	07D	土製円盤	2.6	3.2	1.1	8.9	研磨	黒浜
2	07D	土製円盤	1.1	2.2	0.8	2.7	研磨	黒浜(新)
3	08D	土製円盤	3.0	3.0	0.9	7.6	打欠	黒浜(古)
4	12D	土製円盤	3.5	3.2	1.3	14.9	打欠-研磨	黒浜
5	13D	土製円盤	3.3	3.3	1.0	11.7	研磨	黒浜
6	13D	土製円盤	2.9	3.5	0.8	9.2	研磨	黒浜(新)
7	13D	土製円盤	6.6	4.9	1.2	42.4	打欠-研磨	黒浜
8	14D	土製円盤	3.2	3.4	0.8	8.8	打欠-研磨	黒浜
9	14D	土製円盤	2.3	2.6	1.0	6.4	研磨	黒浜
10	14D	土製円盤	2.9	2.4	1.0	7.4	打欠-研磨	黒浜
11	14D	土製円盤	1.2	1.2	0.8	1.7	研磨	黒浜(新)
12	14D	土製円盤	2.9	3.5	0.6	7.4	打欠-研磨	黒浜(新)
13	14D	土製円盤	3.1	2.8	0.7	7.6	打欠-研磨	黒浜(新)
14	14D	土製円盤	3.4	3.4	0.6	7.8	研磨	黒浜(新)
15	14D	土製円盤	3.1	2.8	0.7	9.1	研磨	黒浜(新)
16	14D	土製円盤	2.7	2.9	0.9	6.0	研磨	黒浜(新)
17	14D	土製円盤	2.8	3.0	0.8	9.5	打欠-研磨	黒浜(新)
18	19D	土製円盤	1.8	2.7	0.7	3.2	打欠	黒浜
19	19D	土製円盤	2.9	2.9	0.8	7.7	打欠-研磨	黒浜(新)
20	19D	土製円盤	2.2	4.0	0.8	7.6	研磨	黒浜(新)
21	19D	土製円盤	3.2	2.0	0.8	5.6	研磨	黒浜(新)
22	21D	土製円盤	2.9	3.1	1.0	10.2	打欠	黒浜
23	25D	土製円盤	2.6	2.6	0.9	16.5	打欠	黒浜
24	49P	土製円盤	2.6	2.5	1.0	7.0	研磨	黒浜
25	08D	土器片錘	9.4	9.3	1.1	88.9	—	関山Ⅱ
26	09D	土器片錘	7.9	7.2	0.9	55.9	—	黒浜
27	11D	土器片錘	6.4	6.1	1.1	42.7	—	黒浜
28	12D	土器片錘	7.6	8.7	1.1	83.2	—	黒浜(古)
29	19D	土器片錘	2.8	3.5	0.8	9.9	—	黒浜
30	19D	土器片錘	5.4	5.4	0.7	22.0	—	黒浜(新)
31	遺構外	土器片錘	6.4	5.7	1.0	41.2	—	黒浜
32	遺構外	土器片錘	3.8	4.1	0.9	12.5	—	黒浜(新)
33	遺構外	土器片錘	3.2	3.4	0.9	11.4	—	黒浜
34	遺構外	土器片錘	4.4	3.1	0.9	15.6	—	黒浜
35	遺構外	土器片錘	6.3	3.7	0.8	22.8	—	黒浜(新)
36	遺構外	土器片錘	2.7	3.0	0.8	8.2	—	黒浜(新)
37	遺構外	土器片錘	4.8	3.4	1.5	21.6	—	阿玉台
38	遺構外	土器片錘	3.4	4.4	0.7	12.2	—	阿玉台
39	遺構外	土器片錘	2.8	3.8	0.8	11.2	—	阿玉台
40	遺構外	土器片錘	4.1	2.8	0.8	13.2	—	中期末~後期初頭
41	20D	ミニチュア土器	—	—	0.6	6.1	—	黒浜
42	遺構外	魚骨圧痕土器	—	—	1.2	19.8	—	黒浜

第6表 土製品観察表

第3節 歴史時代

a. 遺構と遺物

本時期の遺構は、溝状遺構2条よりなる01Mと溝状遺構をきって造られた60,61Pの3遺構のみである。

01M(第24～25図・写真図版22) 本稿では2本の溝を同一遺構として01Mとした。それは相互に沿って並走している点、覆土の締まり具合が同様である、深い溝と付随した施設として浅い溝を想定することが可能ではないかと考えたからである。以下、これに従って概要を記す。

全 長 ①調査区では78m 調査区外での成果では総長200m以上となる。

②調査区では74m 北側で立ち上がるが、掘り込みがロームに達していないと判断できるので更に北にのびる。

規模・方位 ①上面幅 2.1～2.7m 下面幅 0.9～1.2m 深さ0.6m N—8°—W

②上面幅 1.1～1.2m 下面幅 0.7～0.8m 深さ0.05～0.1m #

壁・底面の状態 ①断面は中位に段をもつ逆台形状をなす。底面はほぼ平坦でピット等の施設はみられない。溝さらいの痕跡と思われる壁面の切り込みも顕著ではない。

②断面は逆台形状をなす。底面はほぼ平坦である。

覆土の状態 ①2～3mm大のローム粒を含む黒褐色土系で自然埋没と考える。

②黒褐色土～暗褐色土系の単一層である。

帰属時期 混入遺物が多いが、土師器坏の出土から平安時代～中世に造成されたと考える。

01M出土遺物(第62図・第3表;写真図版48)

1～27は第Ⅲ群である。1～3はa種である。4はb種である。5～6はh種である。7はj種である。8はf種で、木目状燃糸文である。9～23はg種である。9～12は無節、13～23は単節縄文である。24～27はi種である。28～29は水子段階～諸磯a式の時期に比定される。30～31は第Ⅵ群である。30は櫛歯状施工具による条線文が施される。浮島Ⅰ式に比定される。31は浮島Ⅲ式に比定される。32は第Ⅳ群である。33はロクロ使用の土師器坏である。胎土に長石、雲母、粗砂粒を混入する。焼成は良好である。34は黒曜石製の石鏃である。35は流紋岩製の石皿である。

60P(第26図・写真図版21)

規模・長軸方位 1.2m×0.45m以上×深さ0.3m 方位計測なし

壁・底面の状態 底面は平坦である。壁はやや角度をもって立ち上がっている。

覆土の状態 覆土は黒褐色土系で締まっている。炭化粒を多く含む。

61P(第26図・写真図版21)

規模・長軸方位 1.54m×1.23m以上×深さ0.35mの不整形円形 N-12°-W

壁・底面の状態 底面は平坦である。壁はやや角度をもって立ち上がっている。

覆土の状態 覆土は黒褐色土系で締まっている。炭化粒、炭化物を多く含む。

第3章 まとめ

第1節 ヲイノ作南遺跡出土の黒浜式土器編年について

本跡出土の黒浜式土器の主体となる時期は、集落が形成された黒浜式中段階～新段階である。それ以前の古段階は器形復元が可能な資料が多く出土しているが、本跡からは該期の住居跡は検出されていない。ここではヲイノ作南遺跡出土の黒浜式土器を対象に、文様要素からみた変遷過程について考察を加えていく。

黒浜式古段階（第70図～71図）

該期は、関山Ⅱ式の主文様要素である口縁部文様帯の幾何学文や地文様要素であるループ文、組紐文などを棄却し、大木2 a 式の南下現象を受容した黒浜式成立段階である。主文様は関山Ⅱ式の遺制である格子目文や鋸歯状文、大木2 a 式土器の影響下に派生した横位全面施文などで構成される。地文様は粗く節の大きな無節、単節縄文が一般化され、反撚り、異節、異条、多条などの原体も存在する。また付加条縄文は、関山Ⅱ式からの減少傾向が続き、客体的な存在と言える。新たな文様手法としては、大木2 a 式の撚糸文や隆帯文、東関東で隆盛する貝殻文などが確立される。なお、施文・製作技法の特徴である「縄文施文時の粘土隆起」や「胎土への追加整形」は、該期の土器に顕著に施される。

格子目文土器（1～6）は関山Ⅱ式の格子目文や口縁部周辺の刻目文などを母胎とし、中段階前半で肋骨文土器へと変容する。文様は、関山Ⅱ式的な平行沈線による正格子目文（1～2）、関山Ⅱ式の刻目文を母胎とした口縁部周辺に施される縦位の格子目文（3）、斜位の格子目文（5）、アトラングダムな格子目文（4、6）などで構成される。施文部位からは、器面全面に格子目文が施されるもの（4～6）と地文を伴い口縁部周辺や胴上半部、胴下半部に施されるものとに大別できる。

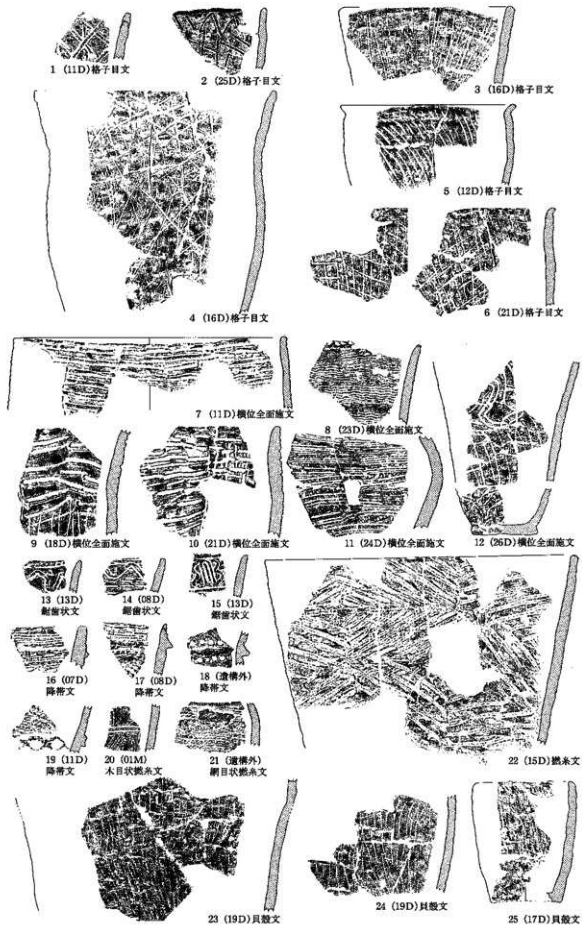
古段階横位全面施文土器（7～12）は大木2 a 式土器の横位全面施文を母胎とし、中段階において画一的な文様変化に伴う段階区分が設定できる。文様は半截竹管状施文具（7、12）や棒状施文具（9、10）、鋸歯状施文具（8、11）などにより波状文やコンパス文、各種沈線文が器面全面に横位・縦位に展開する。地文は概して施されず、工具文のみの単一文様帯を構成する種が主体である。

鋸歯状文土器（13～15）は関山Ⅱ式の幅狭な区画内に鋸歯状文が施される土器を母胎とし、古段階前半で消滅する。文様は口縁部や頸・胴屈曲部に施され、区画内の鋸歯状文は波状文風（13、14）に崩れる傾向にある。また幾何学文（15）が施される例もあり、いずれも区画外には地文が施されるものが一般的である。

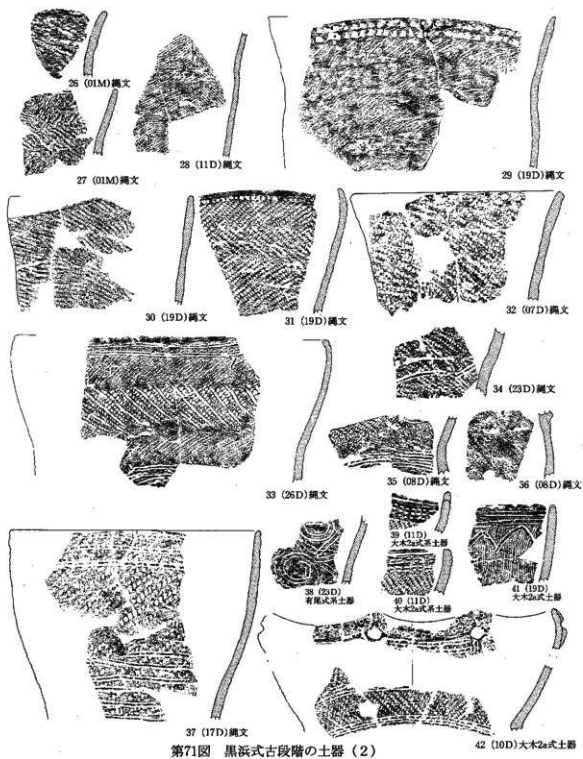
隆帯文土器（16～19）は有尾式や大木2 a 式の隆帯文を母胎とするものと思われ、古段階で消滅する。施文部位により、口縁部（16～17）や頸・胴屈曲部（18～19）に1～2条の隆帯が周回するもの、口縁（唇）部に意匠性をもつ隆帯区画が施されるもの、渦巻文などの意匠的な隆帯文が施されるものなど、3種に類別できる。前者は有尾式、後二者は大木2 a 式の影響を受けたものと考えられる。

撚糸文土器（20～22）は大木2 a 式土器の地文撚糸文を母胎とし、古段階で消滅する。文様は木目状撚糸文（20）、網目状撚糸文（21）、数条単位の撚糸で菱形文を描出するもの（22）などがある。なお、撚糸で菱形文を描出する種は、後述の羽状菱形縄文土器への変容も考えられる。

貝殻文土器（23～25）は系統不明で、利根川下流域から古鬼怒湾周辺を主体とした東関東の古段階に確立される。文様は、主に放射筋をもつ貝殻腹縁によるアトラングダムな施文（23、25）やロッキング手法による整った施文（24）がなされる。貝殻を施文具に用いる点は関山式と共通するが、施文効



第70図 黒浜式古段階の土器 (1)



第71図 黒浜式古段階の土器(2)



第72図 黒浜式中段階の土器(1)

果や技法、狭小な分布範囲などを考慮すると一線を画すべく必要があると考えられる。

全面縄文土器(26~37)は黒浜式全段階にわたり存在し、その変遷過程で主体となる原体を変化させながら推移する。該期の原体の種類には無節(26~29)、単節(30~32、34~36)、複節、付加条(33、37)、異節、異条などがある。このなかには多条(26、30)、反撚り(29)、若干のループ縄文、結束(27、31、53)、結節(82)などが含まれ、バラエティーに富む。施文技法では、施文時における粘土隆起(28)や追加整形の痕跡を残すもの(36)、施文幅の短い原体を用いて羽状縄文を描出するもの(27、31、33)などがある。また、地文縄文上に崩れた幾何学文や異質な区画文を施すもの(34~37)もあり、これらは関山Ⅱ式最終末~黒浜式初頭のメルクマルとして位置づけが可能である。文様からは器形的な制約を受けないが、概して黒浜式初頭の全面縄文土器は器形が一定せず、特異な器形(主に関山Ⅱ式の影響)が多く存在する。

有尾系土器(38)は、東関東圏の黒浜式古段階に伴伴する。出土量や東関東の黒浜式土器への影響力は大木2 a式に比べると劣るが、菱形文を構成する点は共通する。なお38は、大型菱形文ではなく、連結する複数の菱形文の中に渦巻文が描出される種と思われる。

大木2 a式(系)土器(39~42)は黒浜式成立期、なかでも横位全面施文土器、撚糸土器、隆帯土器の成立に多大な影響力をもつ。特に横位全面施文土器は中段階前半まで流入する。文様は口縁部の幅狭な文様帯に配される刺突文(39~40、42)、口縁部や口唇部に施される区画・意匠性(渦巻文や円形浮文など)をもつ隆帯文、横位全面施文(41)などで構成される。地文には縄文の他に木目状撚糸文、網目状撚糸文などが施される。

黒浜式中段階(第72図~74図)

該期は前段階に存在した9種の文様要素が4種へと集約され、次型式の諸磯a式や浮島I a式まで継承される肋骨文が確立された段階である。主文様は黒浜式オリジナルの肋骨文と大木2 a式の横位全面施文とで構成され、地文様では新たに羽状菱形縄文が確立される。時間軸の設定には、主文様の消長により二分が可能で、前半を格子目文と初期肋骨文、横位全面施文併存の段階とし、後半を肋骨文隆盛の段階とすることができる。

肋骨文土器(43~47)は、母胎となる格子目文土器が縦位区画を導入したことに伴い成立し、諸磯a式~浮島I a式まで発展・継承される。文様形態から該種をみると2期区分が可能である。前半は縦位区画の施されないものや肋骨文の施文幅が短いもの、複数の文様要素と組み合わせものなどの初期肋骨文の段階(43~44)。後半は器面全面に肋骨文が施されるもの(45~47)や肋骨文と地文との二文様帯構成をとる肋骨文隆盛の段階とに大別される。なお後半の肋骨文のうち、二文様帯構成をとる種は新段階前半~水子段階を経て次型式まで継承されていくが、全面に施文される種は新段階前半を境に客体化していく傾向にある。

中段階横位全面施文土器(48~49)は、大木2 a式の横位全面施文土器を引き続き母胎とし、前段階に存在した複数の文様形態が1種へと集約される。つまり文様が、胴部が張り頭部で捩れ内弯、外反気味に開く器形のもと、口縁部主文様帯に各種沈線文とコンパス文との交互施文による横位全面施文、胴部地文様帯に各種縄文(付加条が主体)が施されるものが主体となる。この文様形態は、中段階前半で消滅するまで大きく変化することはない。なお本跡から出土した該種は、成立段階のような文様の整然さはなく、比較的崩れた文様形態を呈す。

中段階全面縄文土器(50~54)は、前段階の粗く節の大きな無節、単節縄文や複節、付加条、多条、

反ったり、異節、異条などの複雑な原体の採用がなくなり、比較的精緻な原体による縄文単節化が始まる段階である。同時に、施工時における粘土隆起や追加整形などの施工・製作技法も減少し、その背景として原体の精緻さや施工のタイミング、胎土の状態の差などを考えることができる。また、新たな文様表現として円形押捺文(52)や縦位の簡素な区画文、磨消縄文(53)などが該期後半に確立され、次型式まで継承・発展されていくこととなる。

羽状菱形縄文(55~63)は、該期後半に燃糸菱形文や整った羽状縄文(主に付加条か)などを母胎として成立し、水子段階には至らず新段階前半に消滅する。文様は、器面全面に軸繩の現れない付加条縄文を用いて羽状菱形縄文(55、61~63)を描出するものを基調とし、口縁部に区画文や円形押捺文、×字状文、焼成前穿孔を伴うもの(56、58~60)もある。これら口縁部に文様が施される種、特に円形押捺文や×字状文、焼成前穿孔は新段階前半に帰属するものと思われる。また、付加条の右傾左傾の境に沈線を加えることで肋骨文を描出するもの(57)は、肋骨文土器との共伴を示す資料と言える。

黒浜式新段階(第75図)

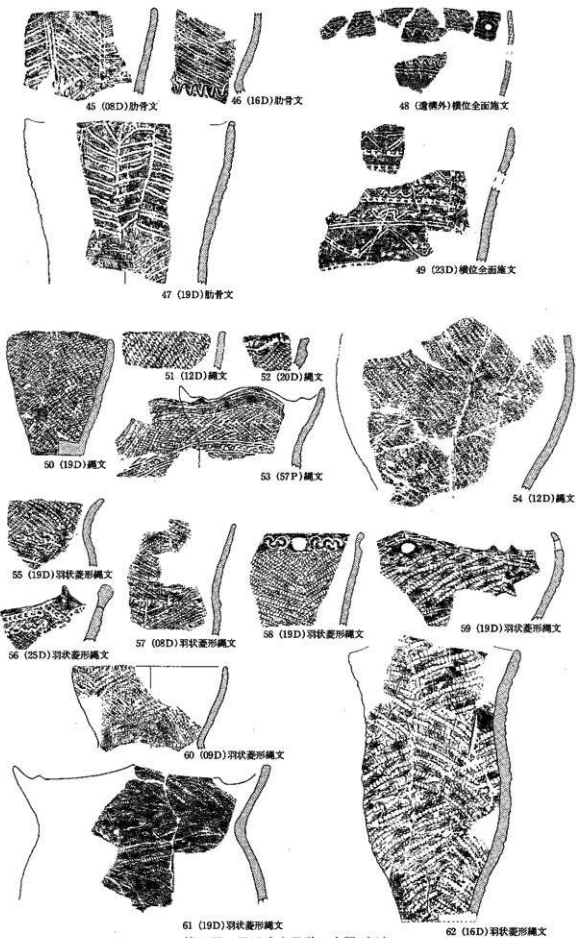
該期は諸磯a式や浮島Ia式への準備段階であり、早期中葉の田戸上層式以降、連続と継承されてきた胎土への繊維混入が、地文系土器より破棄され始める段階である。いわゆる胎土中の含繊維、無繊維併存の段階である「水子段階」(新段階後半)を経て、無繊維化が促進・敷衍されていくこととなる。文様は中段階より続く肋骨文と、それを母胎として成立した組み合わせ鋸歯状文とで主文様が構成される。地文様は羽状菱形縄文と全面縄文とで構成され、原体はほとんど単節縄文化する。また該期を経ることで、主文様=肋骨文、地文様=単節縄文・燃糸文との2種に集約され、便宜的な線引きである「黒浜式土器」は終焉を迎えることとなる。

新段階肋骨文土器(64~70)は、諸磯a式への過渡期を担う種で、諸磯a式における肋骨文の構築段階である。前半は中段階後半より続く含繊維の全面肋骨文や肋骨文と地文との二文様帯を構成するもの(66)が主体で、そのなかに平行沈線文と円形竹管文による縦位区画を伴うもの(64~65)や流水状肋骨文(64)、木葉状肋骨文などの形態変化したものが含まれる。後半(水子段階)になると無繊維土器が一般化し、木葉状(レンズ状)肋骨文(68~70)が増加する。文様は、肋骨文と地文との二文様帯が主体である。それに伴い初源的木葉文も成立し、木葉文内が磨り消されるものも発生する。

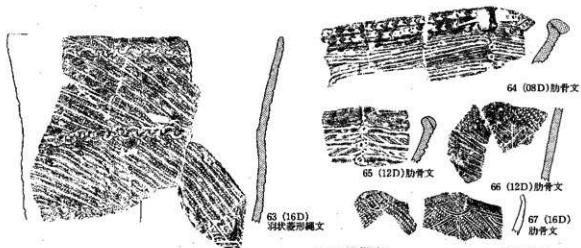
組み合わせ鋸歯状土器(71~76)は、新段階中頃に肋骨文土器から派生した種で、諸磯a式直前まで存続する。文様は、縦位横位の区画により複数のパネルを創出し、その中に斜位の沈線を施すことで、全体的に鋸歯状文を描出するものである。胎土は含繊維のもの(71~74)と無繊維のもの(75~76)の両者が存在し、縦位区画の施されないもの(71)は初源的な様相を呈すものと思われる。

新段階全面縄文土器(77~83)は、いち早く無繊維化を受容した種で、裝飾は簡素な区画文により施される。採用される原体は精緻な単節縄文(78~79、81~83)が一般化され、無節(77、80)や付加条縄文は激減する。区画文は縦位の円形竹管文が垂下するもの(77~78、83)や、爪形文(80)、平行沈線文(81)などが施される。また、口唇部が刻まれるもの(79)や結節回転痕を残すもの(82)が増加し、胎土中には繊維の代わりに長石や石英などの角礫が多量に含まれるようになる。

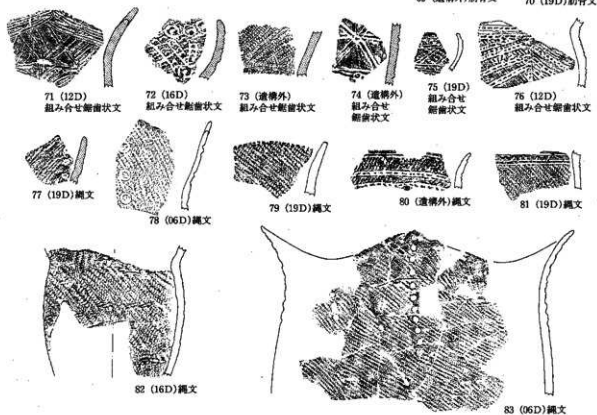
以上のように、本跡出土の黒浜式土器について変遷過程を設定した。当然「本跡出土」という限定枠の中では捕捉不可能な資料が多々存在するはずであるが、変遷概要を知るには比較的良好な資料であったと言える。今後、浅鉢形土器(第75図)を含めた西八千代遺跡群出土の黒浜式土器をモデルケースとして集約し、古東京湾を挟んだ下総台地の黒浜式を明らかにしていく必要があると言える。



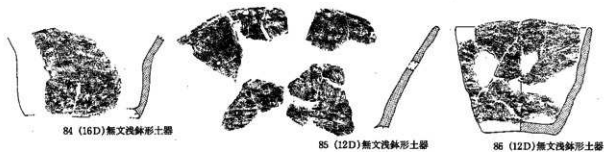
第73図 黒浜式中段階の土器 (2)



第74図 黒浜式中段階の土器 (3)



第75図 黒浜式新段階の土器



第76図 無文浅鉢形土器

第2節 縄文時代前期黒浜期の住居跡について

本遺跡では前期黒浜期の住居跡が20軒検出された。前節でも明らかなようにそのいずれもが中～新段階の比較的限定された時期である。本節では柱位置からみた分類を概観してみたいと思う。また本遺跡の住居跡において顕著に見られる床硬化面等を考慮して、出入口を想定してみたいと思う。

遺物から見た住居跡の時期は以下の通りである。

中段階 —— 09,10,21,23,24,26D

中～新段階 — 07,08,11,13,15,16,17,19,20,25D

新段階 —— 06,12AB, 14D

なお、中～新段階は過渡期としての時期ではなく、その範疇に位置するということである。

柱位置から見た住居跡分類

〔8本主柱タイプ〕19Dが該当する。6本柱とも想定しうるが明確な掘り込みを有し、掘り方位置に規格性があるため、あえて8本とした。

プランは隅丸長方形を呈する。

〔5・6本主柱タイプ〕出入口を意識した柱配置をとる。10D, 16Dには炉に重なってCピット(1981 笹森)が検出された。石、石製品の出土はない。10Dは4本の主柱で炉の対面に出入口が想定される。床硬化面の遺存とも合致する。25Dは深さ30cm程度のピットであるが出入口を意識した配置をとっている。16D,13Dともう1本北西側に柱が配置されると4～6本タイプの主柱となるはずだが検出されなかった。

プランはやや崩れた方形と長台形をとる。

〔4本主柱タイプ〕柱配置が正方形をとるタイプ(07D,11D)と長方形をとるタイプ(08D,17D)に大別できる。いずれもやや南側2本の幅が広がっている。07Dは床硬化面の状況からは東方向、ピットの状況からは3位置に出入口を想定できる。11Dは主柱穴間に各々炉が3基検出された。床硬化面の状況と小ピットの位置から北東及び南西側に出入口を想定できる。08Dは炉が3基あるが中央炉は極めて使用頻度はひくい。床硬化面とピットの状況から南ないし西側に出入口を想定できる。17Dは炉脇にCピット?が2基検出された。硬化面の状況からは南東コーナーに出入口を想定できる。このコーナー部のピット下層から垂飾品と石匙がセットで出土したことは興味深い。

プランは隅丸方形と不整台形をとる。

〔2本主柱タイプ〕柱配置が比較的中央に位置するタイプ(15D?, 20D, 23D)と壁側に偏ったタイプ(24D, 14D?)に大別される。20Dは硬化面とピットの状況から2位置に出入口を想定できる。23Dは主柱穴と副柱穴により三角形の柱配置が想定できよう。出入口は硬化面の広がりも考慮した。15Dは柱掘り方の深さが浅いので無柱穴タイプとなる可能性もある。出入口はコーナー部のやや膨らんだ部位に想定した。24Dは硬化面の状況から北及び南側に出入口を想定し

た。14Dは柱掘り方の深さが浅いので無柱穴タイプとなる可能性もある。

プランは隅丸台形、隅丸方形、長方形、楕円形をとる。

〔無柱穴タイプ〕規格性のない小ピットはいくつか検出されるが、明確な柱配置のみられないものを総じて一括した。09Dは硬化面の状況からは東壁中央に出入口を想定できる。06Dは壁をきるように2基のピットが検出された。出入口として想定した。12AD、12BDとも炉を奥壁とした対辺に硬化面が広がっている。21Dは破壊を受け1/2程度の遺存であるが、顕著な硬化面は検出されず柱配置も不明確である。

プランは不整形ないし台形を呈する。

以上概要を進めてきたが、捕捉点を列記して筆をおきたいと思う。

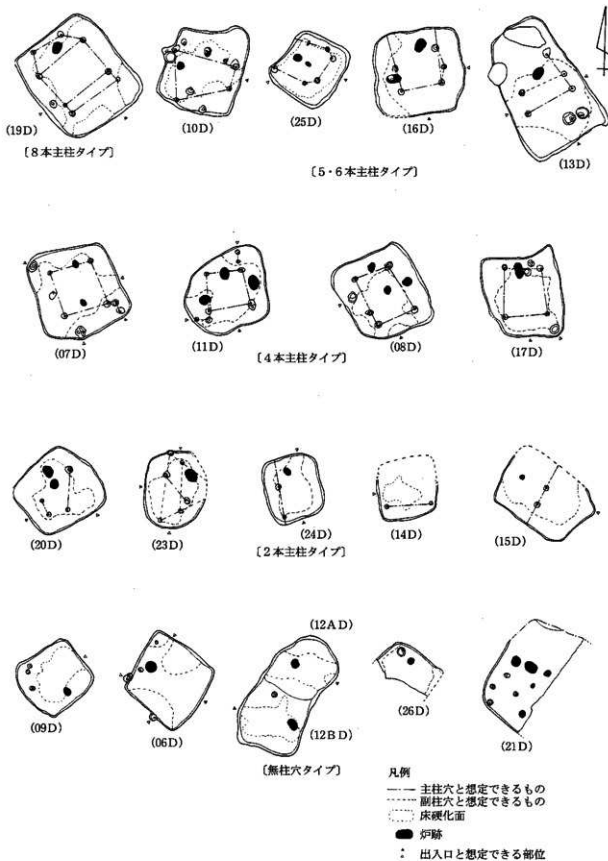
- ①4～8本主柱タイプでは柱方向と主軸方位がほぼ一致しているが、2本主柱タイプの20、23Dでは45°程度振られている。他の2本主柱も含めて上屋構造の基本的な違いに起因するものであろうか。これを示すように23Dでは三角状の柱方向をとっており、笹森氏が指摘する片流れの屋根構造をとるのではないだろうか。
- ②炉は奥壁単独炉と複数炉の2タイプがある。いずれの場合も奥壁側を意識して造られている。複数の場合、柱間に位置するものが主体である。例外として25D、13D、08D、21Dがある。この内25D、21Dにおいて住居中央の炉を使用している。他は単独炉としての使用に近い。
- ③出入口の想定は笹森氏の炉の対辺中央と側面に準拠しつつ、本遺跡において顕著であった硬化面を参考として想定した。
- ④黒浜期の中～新段階という比較的限定された時間枠のなかで、大まかに5分類、平面形を考慮すると更に細分でき得ると思う。傾向としては無柱穴タイプは中段階の09Dから新段階の06D、12ABD、14Dまで残る状況である。その他の傾向は把握することができなかった。

当初、住居の事実記載の執筆を進めているときに平面形の多様さ、複数炉の存在、柱位置のパラエティ性に気がついた。これを多少なりとも分類したら何か傾向がつかめるのではないかと思ったのが、その端緒であった。しかし浅学ゆえの力不足から平面形態の分類に終始してしまった。

Cピットの問題、柱配置の多様性にかかる上屋構造の問題、平面形と柱位置の関連等検討すべき点は多々あると思われる。諸氏の御意見・御鞭撻を賜れば幸いである。

(参考文献)

- 笹森健一 1981～1982「縄文時代前期の住居と集落Ⅰ～Ⅲ」土曜考古3～5号 土曜考古学研究会
石野博信 1990「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館
田中和之他 1991「黒浜貝塚群天神前遺跡」埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第17集
山本琢久 1993「住居論」季刊考古学44 雄山閣



第77図 ライノ作南遺跡住居跡の分類 (S=1:200)

第3節 縄文時代のピットについて

本遺跡では落とし穴と想定されるピットが15基検出されている。本節ではこれらピットの若干の分類と時期の特定について述べていきたい。なお、ここではおおむね1m以上の深度と落とし穴としての形態をもつピットを取り上げた。

平面形態から以下の4種に分類される。

- ① 隅丸長方形で底面に小ピットを穿つもの。(30P)
- ② 隅丸長方形で平坦な底面をもつもの。(52P, 53P)
- ③ 楕円形よりやや丸みをもつもの。(36P, 49P)
- ④ 狭長な楕円形のもの。(23P, 31P, 32P, 39P, 47P)

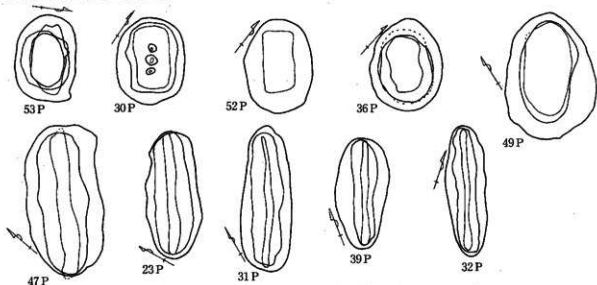
なお、②、④については同一規模でありながら深度の異なるタイプが見られた。

この内、出土遺物のあるピットは36P, 49P, 53Pの3基でいずれも最下層ないし下層の出土である。本市域で調査された落とし穴と想定されるピットについては、ある傾向がうかがえる。それは埋没土が、セクションの観察から上～中層でU字状に黒色土～暗褐色土の自然堆積をなし、中～下層ではローム土、ロームブロックを主体とした褐色土で、一気に埋めたかのような堆積を示していることである。本遺跡においても同様の状況が看取される。

出土遺物は36P, 49Pからは黒浜式古段階の土器片が、53Pから中期加曾利E式の土器片が出土している。これらの遺物は、本遺跡においてもその出土量は少量である。この時期の包含層も形成されておらず混入とも考えられない。こうした点を踏まえて、上記のピット出土遺物は使用段階ないし廃棄段階直後の遺物と考えられないだろうか。

出土遺物からみたピット形態毎の時期は③が前期黒浜期古段階、②が中期加曾利E期となる。49Pがやや楕円の形態をのこしていることから④はやや古い可能性も考えられる。傾向としては時期が新しくなるにつれて、丸くなるといえないだろうか。

稀少な出土遺物からやや結論を急いだ感がある。ただ、今回は覆土の特異性とそこに含まれていた遺物に着目してみた。こうした埋め戻しをしめす覆土の類例をほとんど調べていないので、今後精査して明らかにしていきたい。



第78図 ライノ作南遺跡ピットの形態別集成 (S=1:100)

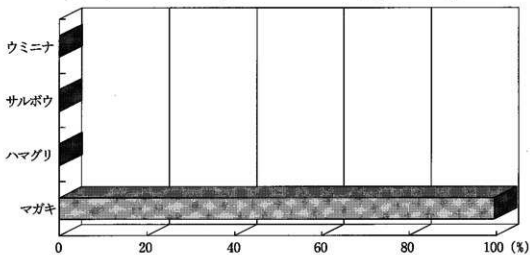
第4節 自然遺物について

a. 貝類

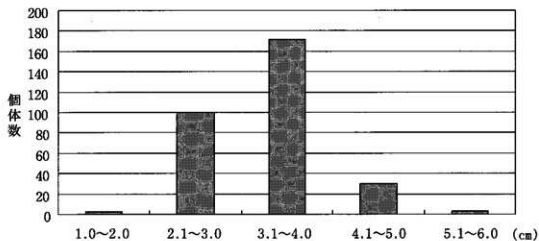
本遺跡から検出された貝層は、19Dの覆土内においてブロック状に堆積していた小規模な混土貝層である。貝種は、マガキを主体とした鹹水性の貝類で構成され、それに若干量のハマグリ、サルボウ、ウミニナが混在する。水洗作業は貝殻に付着した土を落とし、5mm、2mm、1mm、0.5mmのフルイを用いて行った。なお、貝殻に付着していた土と貝層周囲の土壌についてはフローテーション分析を行ったが、魚骨や獣骨などは検出されず、繊維を含む黒浜式土器の細片のみが検出された。

貝層を構成した貝種の重量および構成比は、以下のとおりである。

軟体動物門	Phylum MOLLUSCA	(総重量3393.8g)	
斧足綱	Class PELECYOODA		
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	3381.9g	99.6%
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	7.1g	0.2%
サルボウ	<i>Anadara suberenata</i>	4.3g	0.15%
腹足綱	Class GASTROPODA		
ウミニナ	<i>Batillaria meliiformis</i>	0.5g	0.05%



第79図 貝類構成比



第80図 マガキの殻高分析

貝種の主体であるマガキは、殻高3.1~4.0cmの小さなものがほとんどである。このなかには不整形を呈す幼貝も含まれており、全体的に成長途上のものを食用に供したことが推察される。捕獲採取は、鹹水域にて樹木の幹や根、岩礁などに形成された一塊のカキ礁を、一括して集落内に持ち帰ったことが想起され、廃棄は住居廃絶後の水子段階になされたものと思われる。

このような活動を支えた古環境がライノ作南遺跡周辺に実在¹⁾したのか、あるいは遠隔地から運ばれてきたのかは判断しかねるが、周辺の黒浜期の遺構から検出されている貝層²⁾と併せて、今後充分な検討を加えていく必要があると言える。

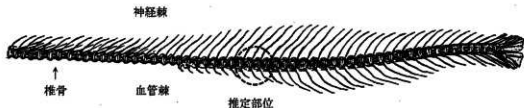
- 1) 稲田 見氏によると、縄文前期海進時の新川周辺の植生は、気候温暖化に伴う「コナラ林(落葉広葉樹)の拡大期」であったとされる。つまり台地上では「少量のクマシデ属とエノキムクノキ属を伴ったコナラ林」が展開し、海岸線の一部や古鬼怒湾の最奥部の入り江となった低地では「ヨシ原」や「ハンノキ、カヤツリグサ属、ガマ属の生える少量の湿地」により構成されていたとのことである。そしてその斜面部には、「アカガシ堅属やニレノケヤキ属、ブナ属など」がコナラ林に混在し、環境的に堅果類の採取は容易であったものと考えられている。また水域環境については、市内の宮内橋付近まで鹹水化し、波のたたない穏やかな内湾であったことが「ヨシ等のイネ科草本の茎の化石」の状態から理解されている。しかし集落の営まれた台地の眼下までは鹹水化せず、汽水域を保っていたものと考えられることから、本遺跡から最も近い鹹水性貝類の生息場として、新川の宮内橋付近から桑納川河口付近に想定されるものと思われる(第1図参照)。なお詳細は、「八千代市の歴史 資料編 自然 I、II」を参照されたい。
- 2) 芝山遺跡(落合 1989)ではアサリ、ハイガイ、オキシジミを主体とし、それにシオフキ、ハマグリ、カキなどが混在する黒浜期土坑1基。詳細は現在確認中だが、ライノ作南遺跡(森 1996)では、2軒の住居跡の覆土内よりカキやハマグリなどが混在する貝ブロックが検出されている。貝種の異なる点が懸念される。

b. 魚骨庄痕土器(第68図・写真図版48)

当初18Dとして調査を進めた縄文時代の落ち込みから、底部裏面に圧痕の状態では魚骨が残る黒浜式土器片が出土した。このため千葉県立中央博物館 歴史学研究科長 小宮 孟氏に魚種の同定及び分析を依頼した。なお、文章化は小宮氏の分析結果をもとに筆者が行い、文責は筆者に所在する。

圧痕の対象となった遺存体は、比較的乾燥の進んだ状態の魚骨である。推定部位は、腹椎骨から尾椎骨にかけての移行部分(第81図)と思われ、³⁾ 棘(スペイン)は椎体の前から出る。残存部位の計測値は、椎骨の長さが1.25cm、神経棘の長さが0.9cm、血管棘の長さが0.4~1.1cmで、推定復元体長は15~20cm程度である。

圧痕から推測される棘の硬さは柔らかく、太さは細目である。また棘の出る箇所は、椎体の前からである。このことはコイ科とニシン科の両魚種の特徴を備えていることになり、部分的な圧痕からの確定的な魚種同定には至らなかった。しかし可能性としてはニシン科の魚種が高く、推定される魚種は次のとおりである。



第81図 マイワシの中軸骨格(堀田 1961に加筆)

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

真骨類 TELEOSTEI

ニシン目 CLUPEIFORMES

ニシン科 Clupeidae

- ・コノシロ *Konosirus punctatus*
- ・ニシン *Clupea pallasii*
- ・マイワシ *Sardinops melanostictus*

カタクチイワシ科 Engraulidae

- ・カタクチイワシ *Engraulis japonicus*

コイ目 CYPRINIFORMES

コイ科 Cyprinidae

- ・コイ *Cyprinus carpio*
- ・フナ *Carassius*
- ・タナゴ *Acheilognathus*
- ・ウグイ *Tribolodon*

ここで推定される魚類からみた、周辺環境と捕獲時季について考えてみたい。

まず淡水～汽水域に生息するコイ目CYPRINIFORMESは、集落が形成された当時（縄文海進ピーク時）、台地の眼下や周辺域には湿地や水流が広がっていたものと思われる。したがって、淡水～汽水性魚類の漁場に適す箇所は遺跡周辺に存在し、捕獲は近隣でまかなうに十分な環境であったものと考えられる。一方、海魚や沿海魚であるニシン目CLUPEIFORMESは、主に海での捕獲を前提とし、古鬼怒湾や古東京湾に漁場を求めたものと考えられる。しかし、「太平洋岸に11月頃来遊し、12～4月に汽水域に入って産卵する群（湖沼ニシン）」に由来すると推定されるニシン*Clupea pallasii*が、印旛村石神台貝塚で同定されている（小宮 1984）ことから、印旛沼水系にも遡上し、産卵していた可能性も充分に考えることができよう。

食味的な観点からみた捕獲時季は、コイ目が冬季～初春にかけて、コノシロは冬季、ニシン、マイワシ、カタクチイワシなどは夏季に美味とされる。このことは捕獲時季を限定するには耐えないが、気候的に土器製作には不向きな季節と重複することが指摘される。

このように魚種の同定や土器製作の時季を測り得る本資料は、漁労活動を支えた土器片鏝や浮子などの関連性についても検討を加えていく必要があると言える。また、土器の底部に魚骨が圧着していた事実から、土器製作の場（生活レベル）に魚骨が散在していた事実も再認識すべきであろう。

(引用・参考文献)

- 貝類 江坂輝彌 1983「化石の知識 貝塚の貝」東京美術
 - 波部忠重・奥谷隆司 1983「学研生物図鑑 貝Ⅰ 貝Ⅱ」学研
 - 八千代市史編さん委員会 1986「八千代市の歴史 資料編 自然Ⅰ」
 - 八千代市史編さん委員会 1998「八千代市の歴史 資料編 自然Ⅱ」
- 魚骨圧痕土器 小宮 孟 1984「石神台貝塚・戸ノ内貝塚 石神台貝塚・戸ノ内貝塚発掘調査会 堀田秀之 1961「日本産硬骨魚類の中軸骨格の比較研究」『研究成果』5 東北区水産研究所

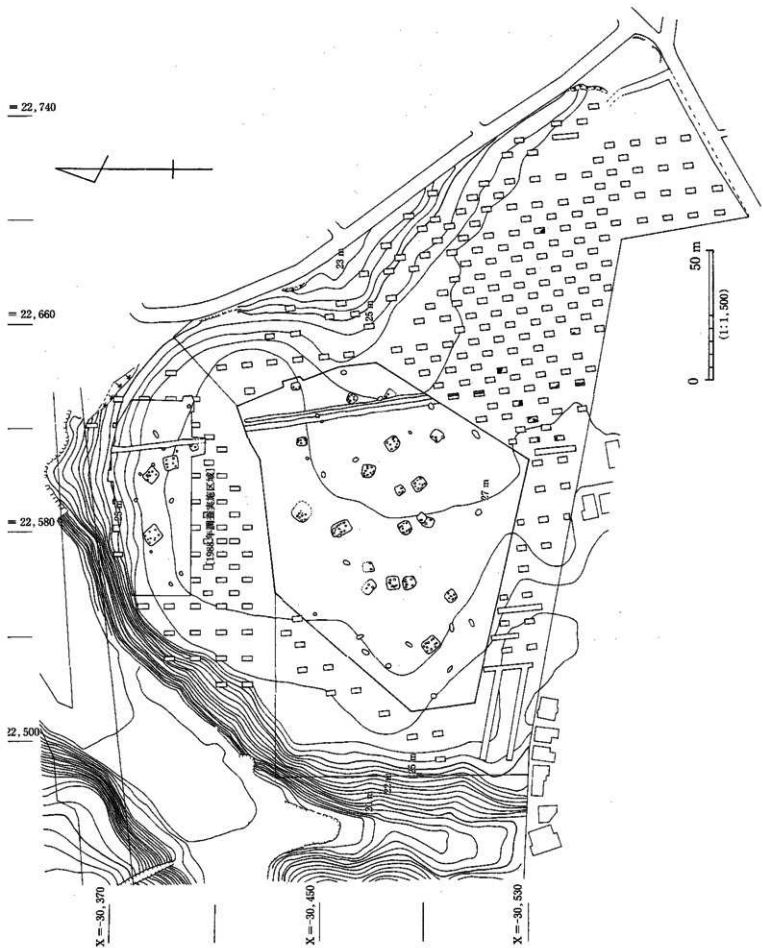
報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし をいのさくみなみいせきはつくつちょうさほうこくしょ -たくちぞうせいにせんこうしたまいぞうぶんかざいはつくつちょうさ-
書 名	千葉県八千代市 ワイノ作南遺跡発掘調査報告書 -宅地造成に先行した埋蔵文化財発掘調査-
編著者名	森 竜 哉 ・ 玉 井 庸 弘
編集機関	八千代市遺跡調査会
所 在 地	〒276-0045 八千代市大和田138-2 TEL. 047 (483) 1151
発 行 年	西暦 2000年2月15日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ワイノ作南遺跡	八千代市 大和田新田字ワイノ 作911他	12221	276	35度 43分33秒	140度 04分58秒	19960805 ～ 19961219	8,400㎡	宅地造成

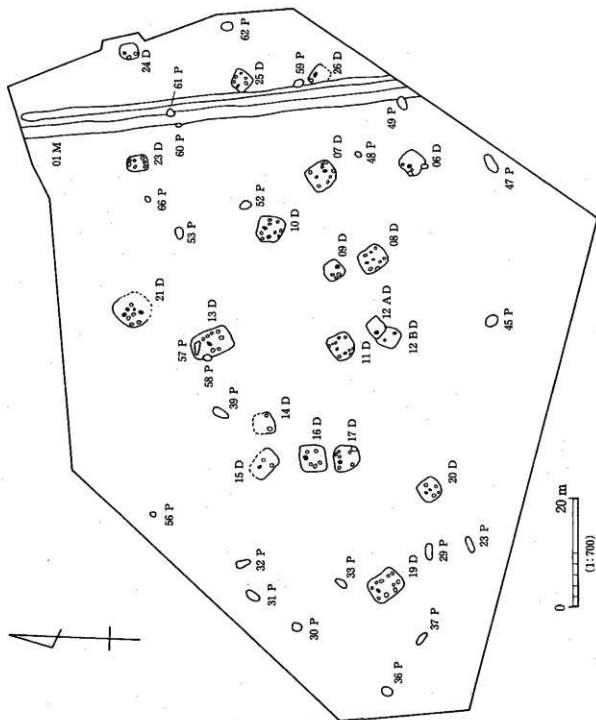
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
ワイノ作南遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡20軒、 ピット21基	縄文土器、垂飾品、 石鏃、石器等	なし

圖 版

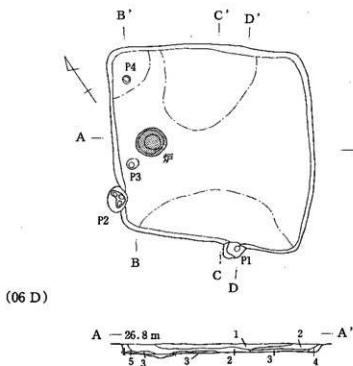


第3図 ライノ作南遺跡トレンチ及び遺構配置図

第4図 ライノ作南遺跡遺構配置図



第4図 ライノ作南遺跡遺構配置図

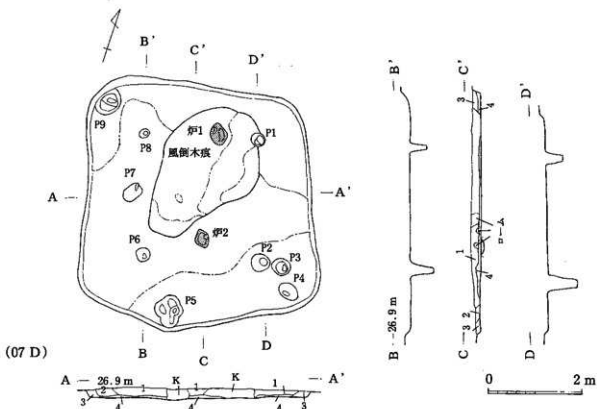


06 D 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含みしる。
- 2 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒含みしる。
- 3 明褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混層しる。
- 4 明褐色土 ローム粒、黒色土粒、混層、若干ぼそぼそする。
- 5 明褐色土 ローム粒主体、黒色土粒少量含む。

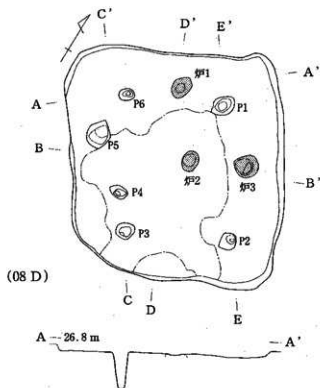
07 D 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒、2~3mm大ロームブロック含む。粒子細かく、しまっている。
- 2 暗褐色土 1層に類似、ローム粒の割合多い。
- 3 明褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混層。
- 4 明褐色土 3層に類似、ローム粒やや多く、かたくなにしまっている。

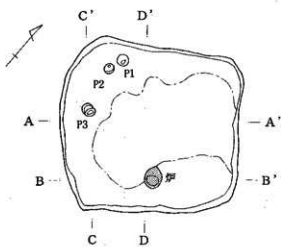
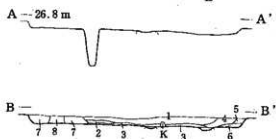


第5図 06 D・07 D平面実測図

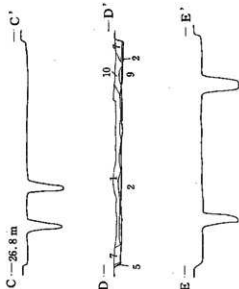
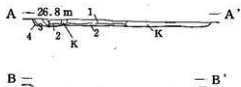
第6図 08 D・09 D平面実測図



(08 D)



(09 D)



08 D 土層説明

- 1 黒褐色土 焼土粒、ローム粒混入。粒子細かくしまっている。
- 2 黒褐色土 1層類似。ローム粒が若干多い。
- 3 暗褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混入層。炭化粒少量混入。かたくしまっている。
- 4 暗褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混入層。2mm大ローム粒混入。3-4mm大焼土粒混入。
- 5 明褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混入層。2mm大ローム粒混入。
- 6 明褐色土 ローム粒、黒褐色土粒混入層。
- 7 明褐色土 ローム粒主に暗褐色土粒少量含む。
- 8 明褐色土 ローム粒、ロームブロック混入層。
- 9 明褐色土 ローム粒主に焼土ブロック混入。
- 10 暗褐色土 1層類似。ローム粒が若干多く、焼土粒含む。

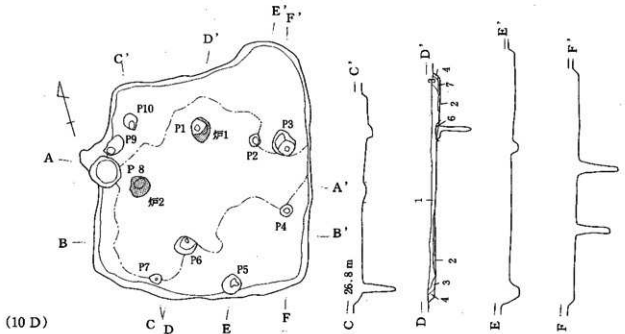


09 D 土層説明

- 1 暗褐色土 黒色土粒の割合多し。ローム粒少量含む。粘性あり。しまる。
- 2 明褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混入層。しまっている。
- 3 暗褐色土 1層に類似。ローム粒の割合多し。
- 4 明褐色土 ローム粒主体に暗褐色土粒少量含む。

0 2 m

第6図 08 D・09 D平面実測図

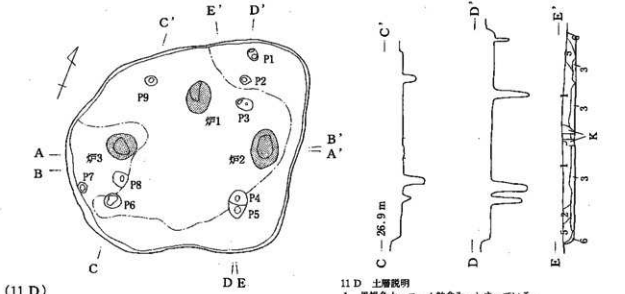


(10 D)

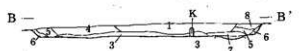


10 D 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層炭化粒部分的に混入。
- 2 明褐色土 暗褐色土、ローム粒混合層、非常にしる。
- 3 明褐色土 暗褐色土、ローム粒混合層、2に比べローム粒多い。
- 4 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土粒少量含む。
- 5 暗褐色土 1層に類似、黒色土粒の割合が多い。
- 6 暗褐色土 黒色土粒主に焼土粒少量混入。
- 7 褐色土 4層に類似、非常にしる。



(11 D)



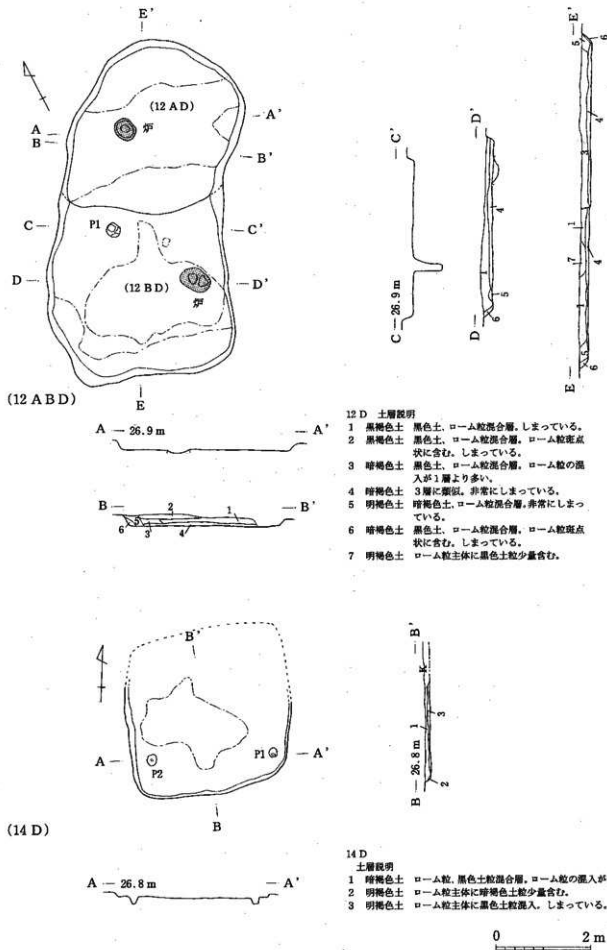
11 D 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒含み、しまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒含み、さらさらしている。
- 3 褐色土 ローム粒、暗褐色土粒含み、しまっている。
- 4 黒褐色土 ローム粒斑点状に含み、しまっている。
- 5 暗褐色土 ローム粒、主に黒色土粒混入、しまっている。
- 6 褐色土 ローム粒含みしまっている。
- 7 暗褐色土 焼土粒2~3mm大含み、若干さらさらしている。
- 8 暗褐色土 ローム粒少量含みしまっている。

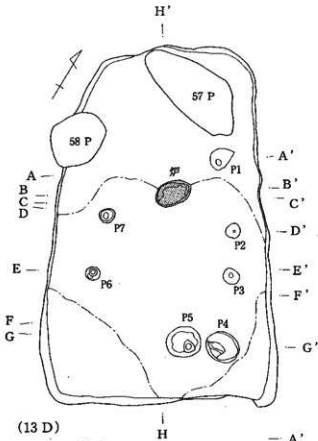


第7図 10 D・11 D平面実測図

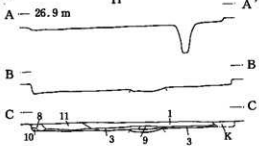
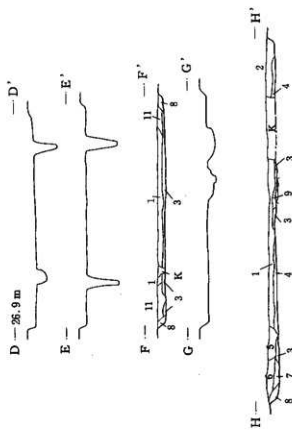
第8図 12 ABD・14 D平面実測図



第8図 12 ABD・14 D平面実測図

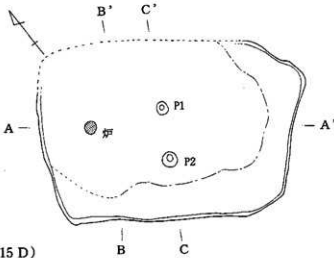


(13 D)

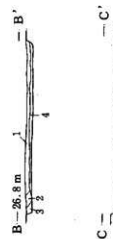


13 D 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒含みしまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒ごく少量含む。しまっている。
- 3 暗褐色土 ローム粒。暗褐色土粒含む。非常にしまっている。
- 4 暗褐色土 暗褐色土黒色土粒混合層。非常にしまっている。
- 5 黒褐色土 1~2mm大ローム粒点在。ローム粒含む。しまっている。
- 6 暗褐色土 ローム粒暗褐色土混合層。1~2mm大ローム粒含む。しまっている。
- 7 暗褐色土 6層類似。黒色土粒含む。
- 8 褐色土 ローム粒主体。暗褐色土粒少量含む。
- 9 暗褐色土 3層類似。粘土ブロック少量含む。
- 10 黒褐色土 ぼそぼそしている。
- 11 褐色土 ローム粒主に暗褐色土少量混入。



(15 D)

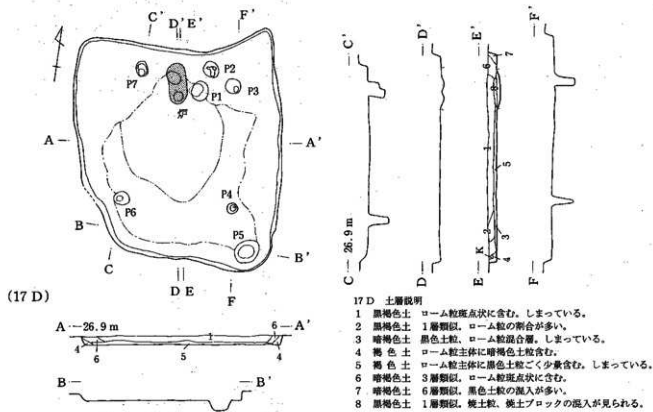
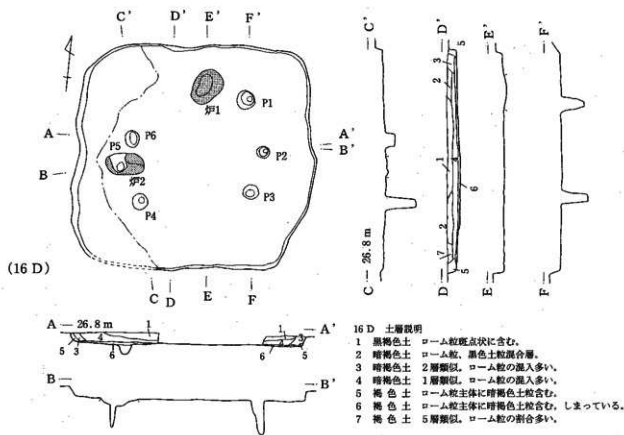


15 D 土層説明

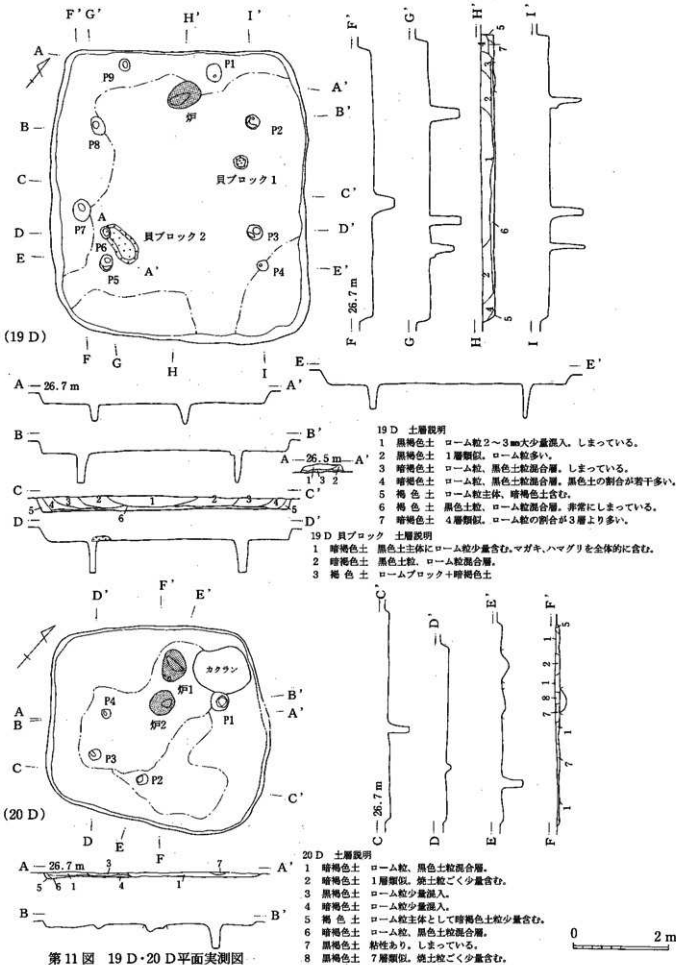
- 1 暗褐色土 ローム粒。黒色土粒混合層。しまっている。
- 2 暗褐色土 1層に比べ。黒色土粒の割合多し。
- 3 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土粒少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒主体に黒色土粒混入。

A — 26.8 m

0 2 m

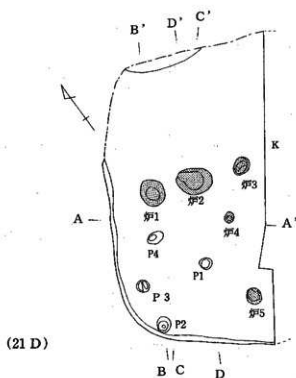


0 2 m

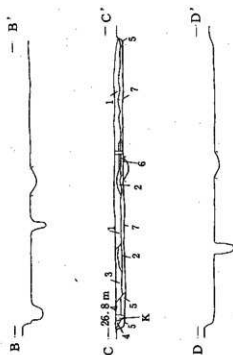


第11図 19D・20D平面実測図

第12図 21 D・23 D平面実測図

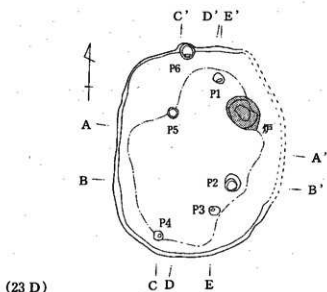


(21 D)

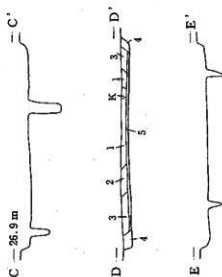
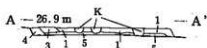


21 D 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒、暗褐色土混層。
- 3 黒褐色土 1層類似。ローム粒の割合が多い。
- 4 暗褐色土 2層にくらべローム粒少ない。
- 5 暗褐色土 黒色土とローム粒の混層。黒色土の割合が多い。
- 6 褐色土 暗褐色土、ローム粒混層。2〜3mm焼土ブロック混入。
- 7 褐色土 ローム粒、黒色土混層。しまっている。



(23 D)

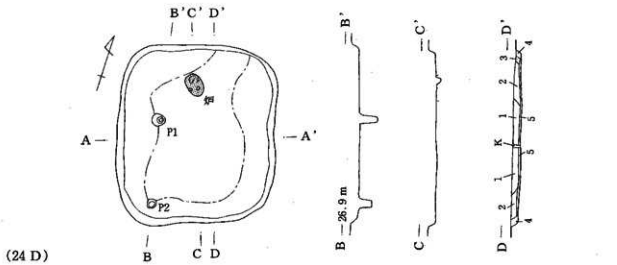


23 D 土層説明

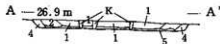
- 1 暗褐色土 黒色土、ローム粒混層。
- 2 暗褐色土 黒色土、ローム粒混層。1層より黒色土が多い。
- 3 暗褐色土 黒色土、ローム粒混層。1層よりローム粒多い。
- 4 褐色土 ローム粒主体、暗褐色土含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒、黒色土混層。しまっている。



第12図 21 D・23 D平面実測図

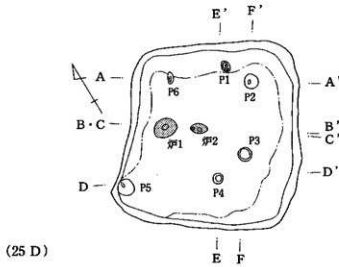


(24 D)

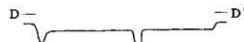
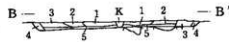
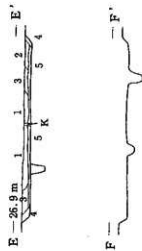


24 D 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、しまっている。
- 2 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、ローム粒の割合が多い。
- 3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土粒少量含む。
- 5 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土粒少量含む、非常にしまっている。



(25 D)



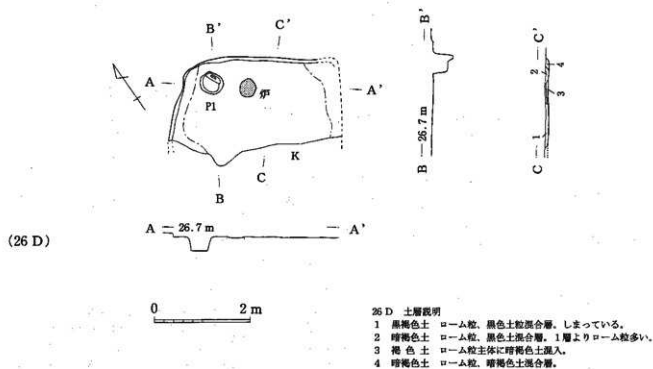
25 D 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒少量含むしまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒少量含むしまっている。
- 3 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層。
- 4 褐色土 ローム粒主体、暗褐色土含む。
- 5 褐色土 ローム粒主体、黒色土粒少量含む。

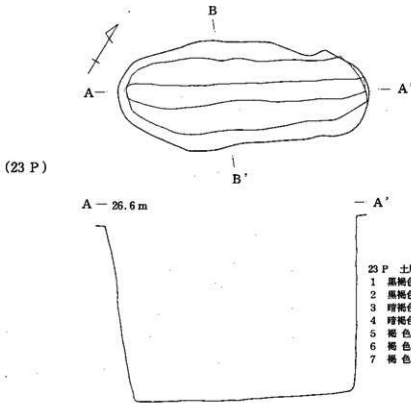


第13図 24 D・25 D平面実測図

第14図 26D平面実測図

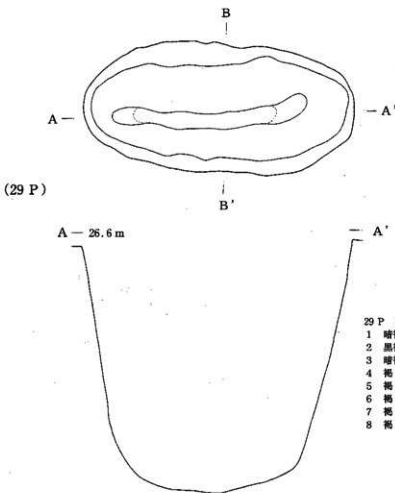


第14図 26D平面実測図



23 P 土層説明

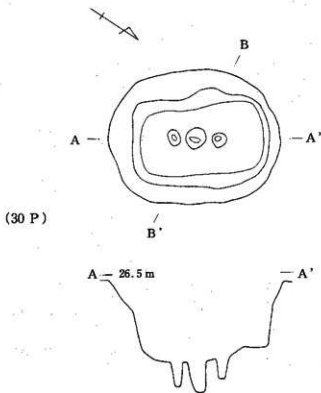
- 1 黒褐色土 黒色土主にローム粒含む。しまっている。
- 2 黒褐色土 1層に類似。ローム粒の割合が少ない。
- 3 暗褐色土 ローム粒。黒色土混合層。ローム粒塊状状を含む。
- 4 暗褐色土 3層に類似。ローム粒の混入が多い。
- 5 褐色土 ローム粒。主に暗褐色土を含む。
- 6 褐色土 ローム粒ロームブロック混合層。ぼそぼそしている。
- 7 褐色土 6層に類似。黒色土粒を含む。ぼそぼそしている。



29 P 土層説明

- 1 暗褐色土 黒色土。ローム粒混合層。しまっている。
- 2 黒褐色土 黒色土主体。ローム粒少量含む。
- 3 暗褐色土 黒色土。ローム粒混合層。ローム粒の割合多い。
- 4 褐色土 ローム粒主体に黒色土粒含む。ぼそぼそしている。
- 5 褐色土 ロームブロック+ローム土。ぼそぼそしている。
- 6 褐色土 ローム粒。黒色土粒混合層。ぼそぼそしている。
- 7 褐色土 ロームブロック+ローム土
- 8 褐色土 6層類似。黒色土粒の割合多い。

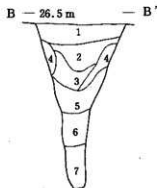
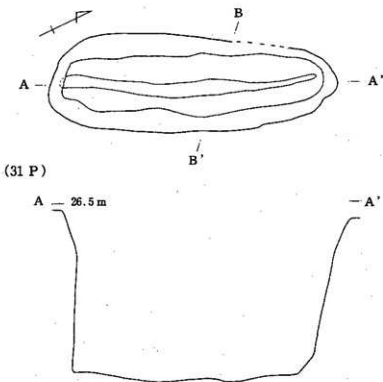




30 P

土層説明

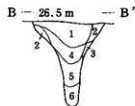
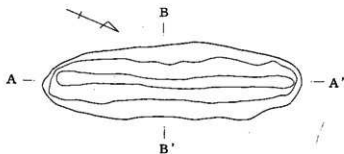
- 1 黒褐色土 黒色土、ローム粒混合層、非常にしまっている。
- 2 暗褐色土 黒色土、ローム粒混合層、ローム粒の割合が多い。
- 3 黒褐色土 1層類似。ローム粒の混入が若干多い。
- 4 褐色土 ローム粒主体、黒色土粒、ごく少量含む、しまっている。
- 5 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒混合層、3層類似だがローム粒の混入が多い。
- 6 褐色土 ローム粒主体、暗褐色土を少量含む、ぼそぼそしている。



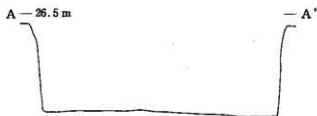
31 P 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、しまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒、斑点状に含む。
- 3 暗褐色土 2層類似。ローム粒の割合が多い。
- 4 暗褐色土 ローム粒+黒色土、しまっている。
- 5 褐色土 ローム土、ロームブロックを部分的に含む、ぼそぼそしている。
- 6 褐色土 ローム土、ロームブロック混合層、黒色土粒を含む、ぼそぼそしている。
- 7 褐色土 6層類似。黒色土粒を多く含む。

0 1 m

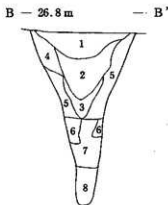
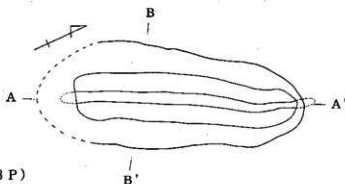


(32 P)

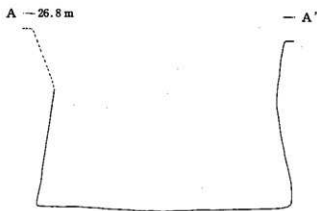


32 P 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混入層、しまっている。
- 2 暗褐色土 ローム粒主に暗褐色土含む。
- 3 褐色土 ローム粒主体、若干ぼそぼそする。
- 4 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混入層、黒色土粒の割合が多い、1層類似。
- 5 褐色土 ローム粒主に、黒色土粒含む、ぼそぼそしている。
- 6 褐色土 5層類似、ロームブロック含む。



(33 P)

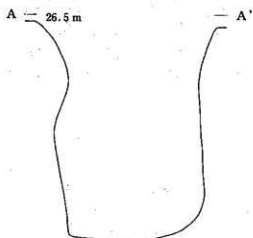
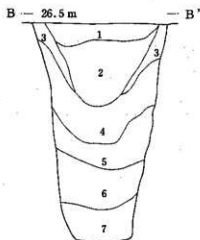
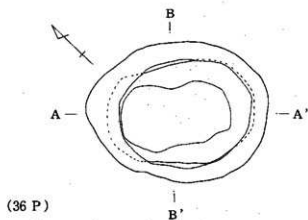


33 P 土層説明

- 1 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒混入層、しまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒、ごく少量含む。
- 3 暗褐色土 黒色土、暗褐色土混入層、しまっている。
- 4 暗褐色土 黒色土、ローム粒混入層、1層に比べローム粒が多い。
- 5 褐色土 ロームブロック+ローム粒、若干黒色土粒含む、ぼそぼそしている。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック。
- 7 褐色土 5層類似、ロームブロックが若干多い、ぼそぼそしている。
- 8 褐色土 7層類似、黒色土粒をより多く含む。

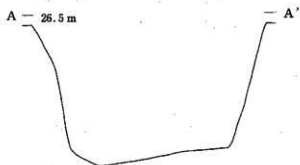
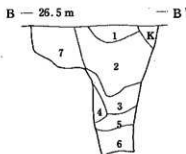
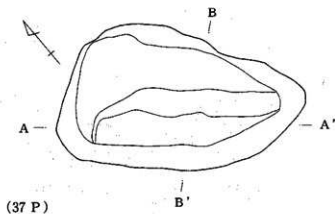


第17図 32 P・33 P平面実測図



36 P 土層説明

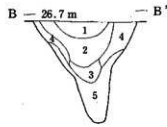
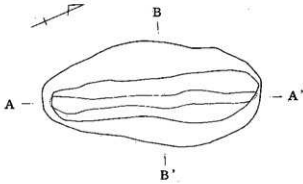
- 1 暗褐色土 黒色土粒主体にローム粒混入。
- 2 黒褐色土 ローム粒、ごく少量混入。
- 3 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、しまっている。
- 4 褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、粒子が細かい。
- 5 褐色土 黒色土粒、ロームブロック、ローム土混合層、ぼそぼそしている。
- 6 褐色土 ロームブロック+ローム土混合層、ぼそぼそしている。
- 7 暗褐色土 5層類似、黒色土粒の混入が多い。



37 P 土層説明

- 1 暗褐色土 黒色土、ローム粒混合層、しまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒斑点状に含む。
- 3 褐色土 ローム粒主体、黒色土粒少量含む、ぼそぼそしている。
- 4 褐色土 ロームブロック、ローム土、黒色土混合層。
- 5 褐色土 3層類似、黒色土粒の割合多い。
- 6 褐色土 4層類似、黒色土粒の割合が少ない。
- 7 不明。

0 1 m

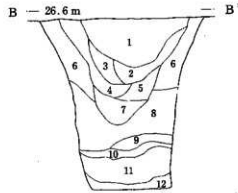
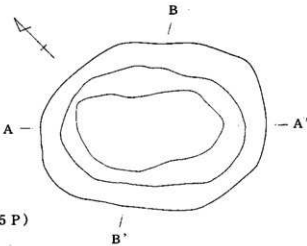


(39 P)

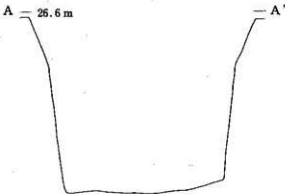


39 P 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまっている。
- 2 暗褐色土 黒色土主にローム粒含む。しまっている。
- 3 暗褐色土 2層類似。炭化粒を含む。
- 4 褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混合層。若干ぼそぼそしている。
- 5 褐色土 ローム粒主体に2~3mm大ロームブロック、黒色土含む。若干ぼそぼそしている。



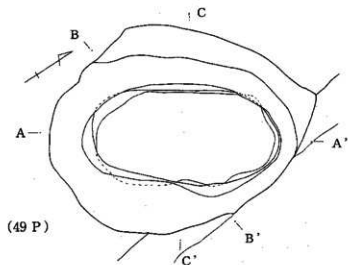
(45 P)



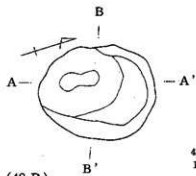
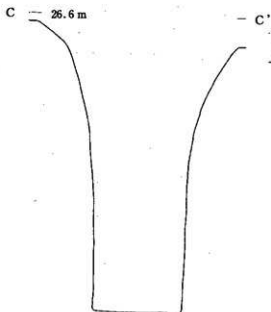
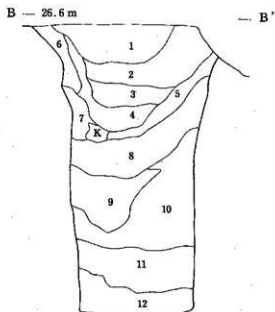
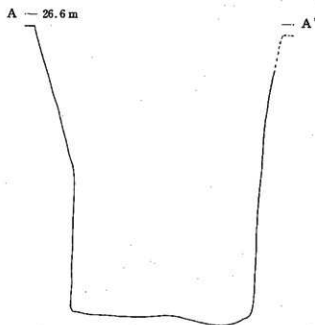
45 P 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒、黒色土混合。黒色土主体。
- 2 暗褐色土 ローム粒、黒色土混合。黒色土主体。
- 3 黒褐色土 2層類似。黒色土の割合が多い。
- 4 暗褐色土 2層類似。ローム風点状に含む。
- 5 暗褐色土 4層類似。ローム粒の割合が多い。
- 6 褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混合層。しまっている。
- 7 暗褐色土 4層類似。黒色土粒の割合が多くしまっている。
- 8 褐色土 ローム粒と1cm大ロームブロック混合層。ぼそぼそしている。
- 9 褐色土 ローム粒、黒色土粒、ロームブロック混合層。
- 10 褐色土 黒色土粒が多く、ローム粒含む。ぼそぼそしている。
- 11 褐色土 10層類似。ローム粒、1cm大ロームブロックを多く含む。ぼそぼそしている。
- 12 褐色土 11層類似。黒色土粒の割合が多い。ぼそぼそしている。

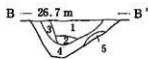
0 1 m



(49 P)



(48 P)

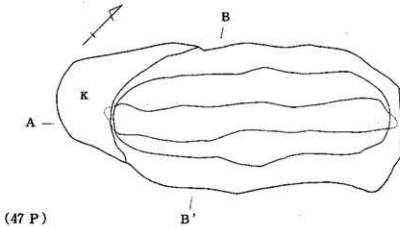


48 P 土層説明

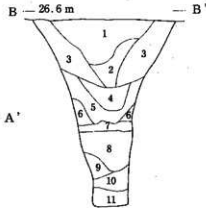
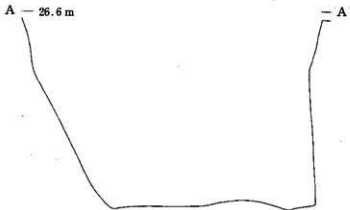
- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまっている。
- 2 黒褐色土 1層類似。黒色土粒多し。
- 3 黒褐色土 1層類似。ローム粒多し。
- 4 暗褐色土 ローム粒主体に黒色土粒含む。しまっている。
- 5 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土粒少量含む。

49 P 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒、暗褐色土混合層。粒子細かくしまっている。
- 2 暗褐色土 1層類似。ローム粒斑点状に含む。粒子細かくしまっている。
- 3 黒褐色土 黒色土粒主体にローム粒少量含む。粒子細かくしまっている。
- 4 暗褐色土 1層類似。ローム粒の割合多い。若干ぼそぼそしている。
- 5 明褐色土 ソフトローム主体として暗褐色土粒、ごく少量含む。べたべたする。
- 6 明褐色土 5層類似。黒色土粒ごく少量含む。べたべたする。
- 7 明褐色土 ローム粒主体として3~5mm大ロームブロック含む。ぼそぼそしている。
- 8 明褐色土 ロームブロック、ローム粒、暗褐色土粒混合層。ぼそぼそしている。
- 9 明褐色土 8層類似。黒色土粒含む。ぼそぼそしている。
- 10 明褐色土 8層類似。ロームブロックの割合多し。
- 11 明褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層。ぼそぼそしている。
- 12 黒褐色土 黒色土粒主体に2~3mm大ローム粒含む。ぼそぼそしている。

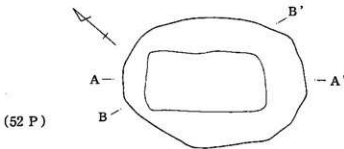


(47 P)

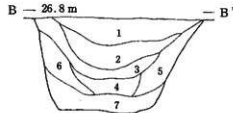


47 P 土層説明

- 1 暗褐色土 炭化物、ローム粒含まれている。
- 2 黒褐色土 1層類似。ローム粒点状に含む。
- 3 褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混層。
- 4 褐色土 3層類似。ローム粒の割合が多い。
- 5 褐色土 ハードローム、褐色土粒混層。若干ぼそぼそしている。褐色土粒の割合が多い。
- 6 褐色土 ローム粒、黒色土混層。若干ぼそぼそしている。
- 7 褐色土 ハードローム、黒色土粒混層。若干ぼそぼそしている。
- 8 褐色土 ハードローム主体に褐色土粒、黒色土粒少量含む。若干ぼそぼそしている。
- 9 褐色土 8層類似。黒色土粒含まず。
- 10 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土、ロームブロック少量含む。
- 11 褐色土 10層類似。ロームブロック含まず。



(52 P)

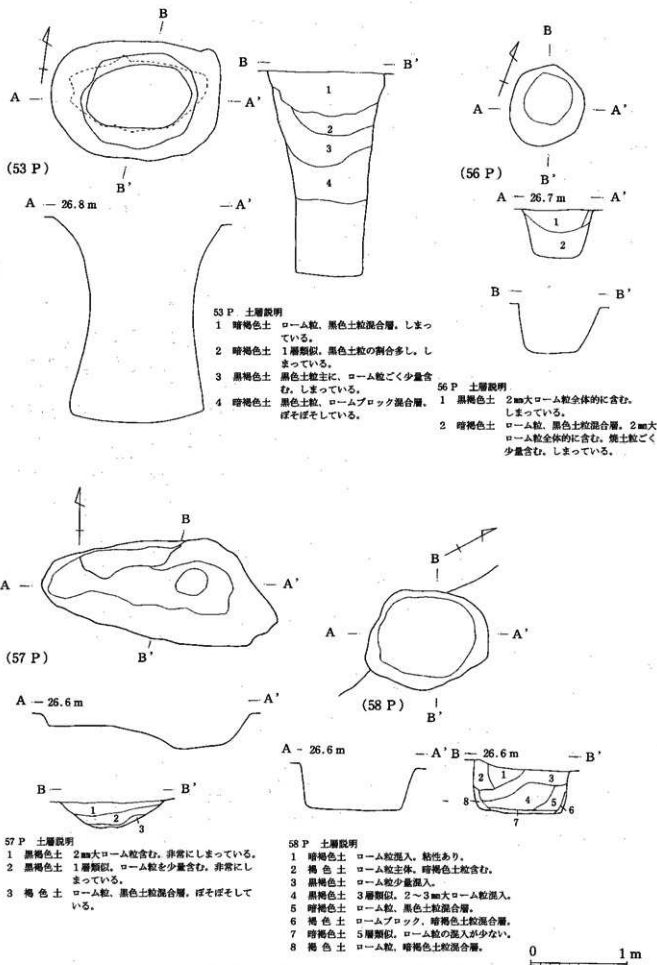


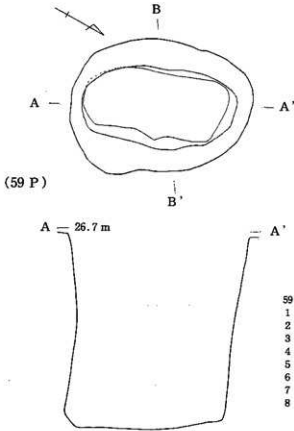
52 P 土層説明

- 1 暗褐色土 黒色土、ローム粒混層。しまっている。
- 2 暗褐色土 黒色土主にローム粒ごく少量含む。
- 3 暗褐色土 2層類似。ローム粒の混入が多い。しまっている。
- 4 暗褐色土 黒色土、ローム粒混層。1より黒色土が多い。
- 5 褐色土 ローム粒主に黒色土粒少量含む。
- 6 褐色土 ローム粒、暗褐色土粒混層。
- 7 褐色土 6層類似。黒色土粒を含む。



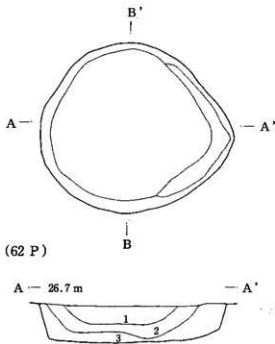
第21図 47P・52P平面実測図





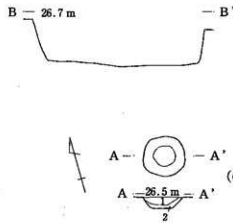
59 P 土層説明

- 1 暗褐色土 黒色土主体にローム粒少量含む、しまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒が斑点状に含まれる。
- 3 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、しまっている。
- 4 褐色土 ローム粒主に黒色土粒少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロック主にローム土を少量含む。
- 6 褐色土 黒色土、ローム粒、1cm大ロームブロック混合層、ぼそぼそしている。
- 7 褐色土 6層に類似、黒色土粒の割合が多い。
- 8 暗褐色土 6層に類似、黒色土粒主体。



62 P 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層。
- 2 暗褐色土 1層類似、ローム粒が多い。
- 3 褐色土 ローム粒主体、暗褐色土粒含む。

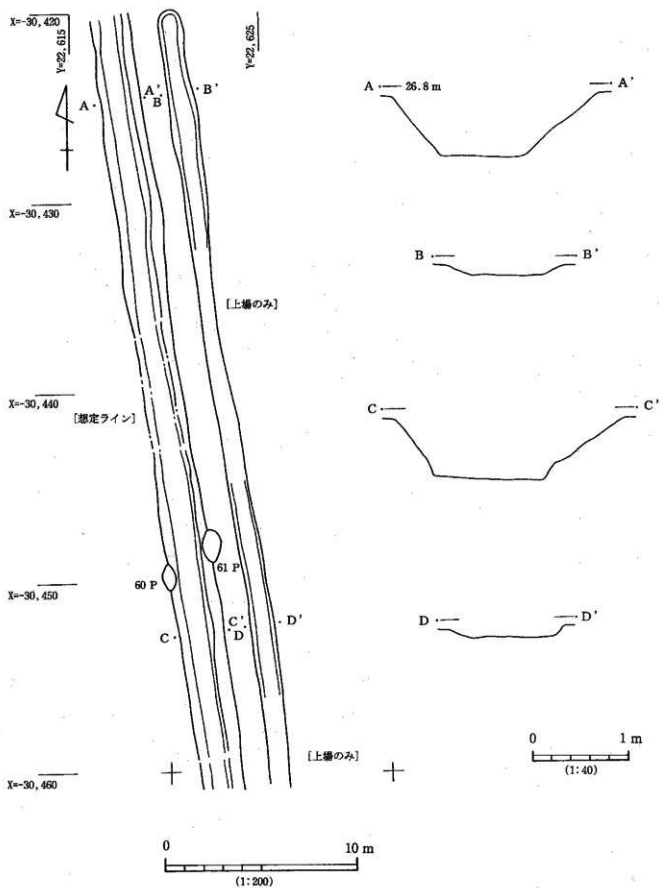


66 P 土層説明

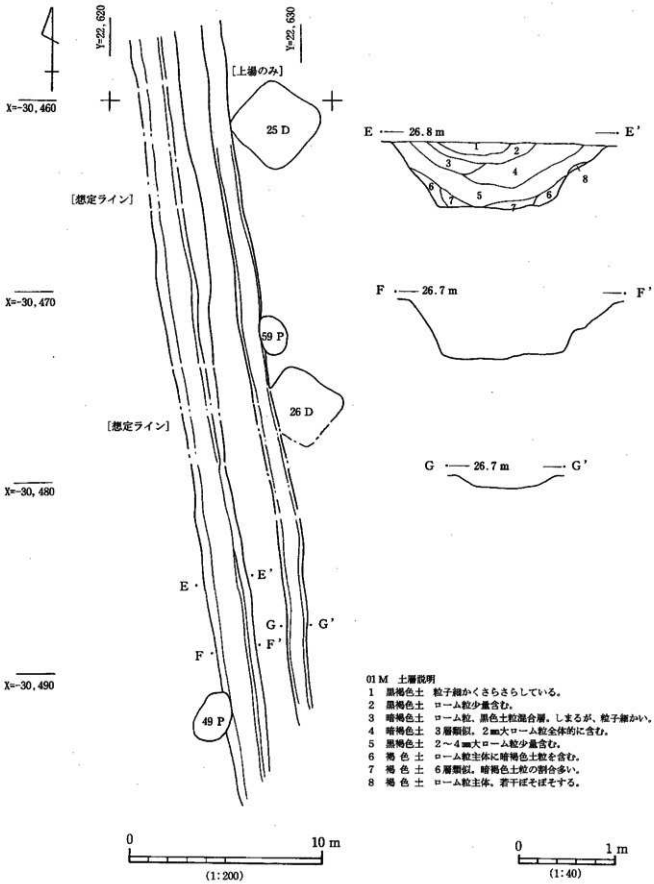
- 1 赤褐色土 焼土粒主体。
- 2 暗褐色土 焼土粒、黒色土粒少量含む、しまっている。

0 1m

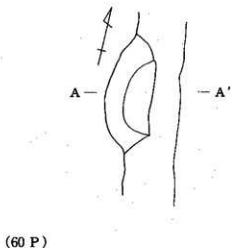
第 24 図 01 M 平面実測図 (北側)



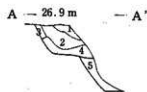
第 24 図 01 M 平面実測図 (北側)



第25図 01 M平面実測図(南側)

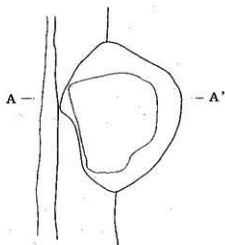


(60 P)

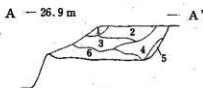


60 P 土層説明

- 1 黒褐色土 炭化物、ごく少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、焼土粒、炭化粒ごく少量含む。
- 3 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土を少量含む。
- 4 黒褐色土 炭化物主体、黒色土粒少量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒混合層、0.1 M堆積土。

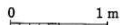


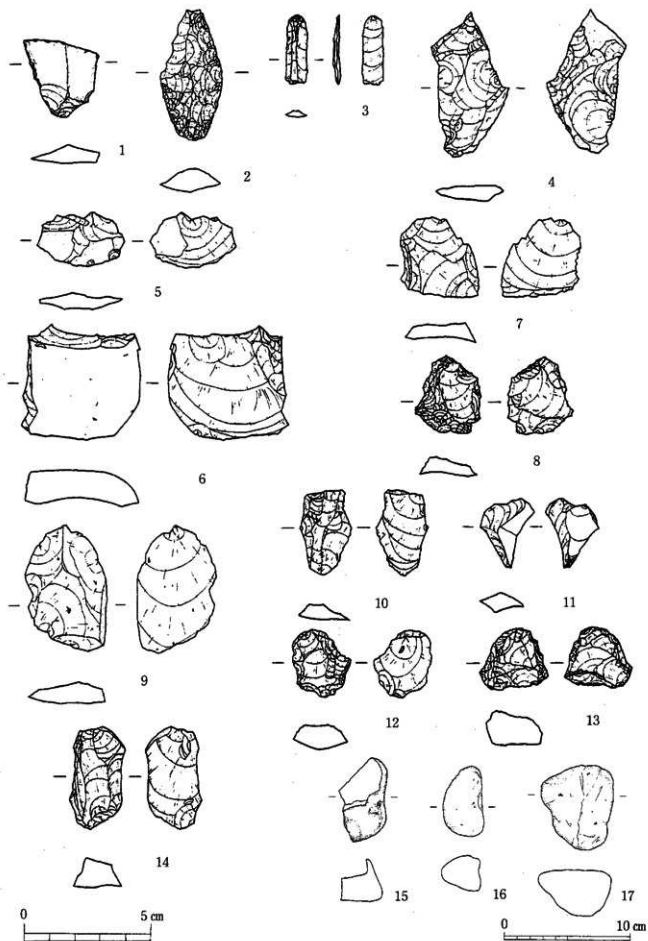
(61 P)



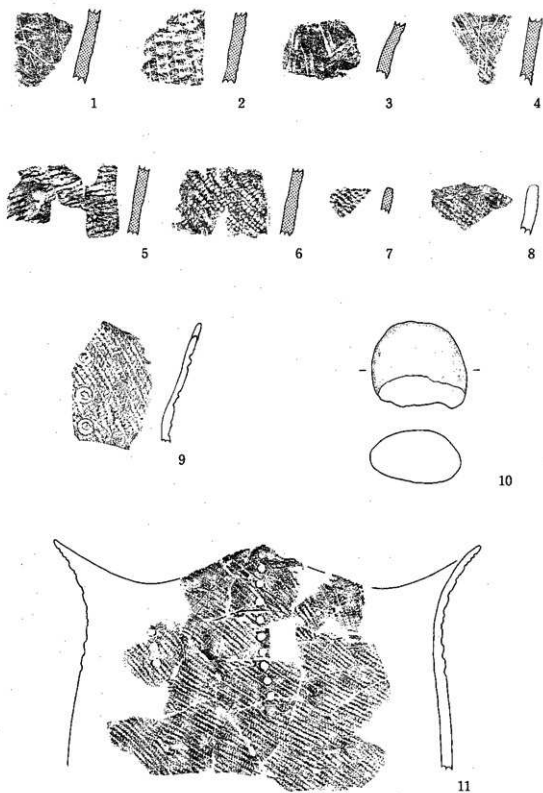
61 P 土層説明

- 1 黒褐色土 炭化物、ごく少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒、黒色土混合層、焼土粒、炭化粒ごく少量含む。
- 3 黒褐色土 2層類似だが、炭化粒の割合が多い。
- 4 暗褐色土 2層類似、ローム粒の割合が多い。
- 5 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土粒を少量含む。
- 6 黒褐色土 炭化物主体、黒色土粒少量含む。

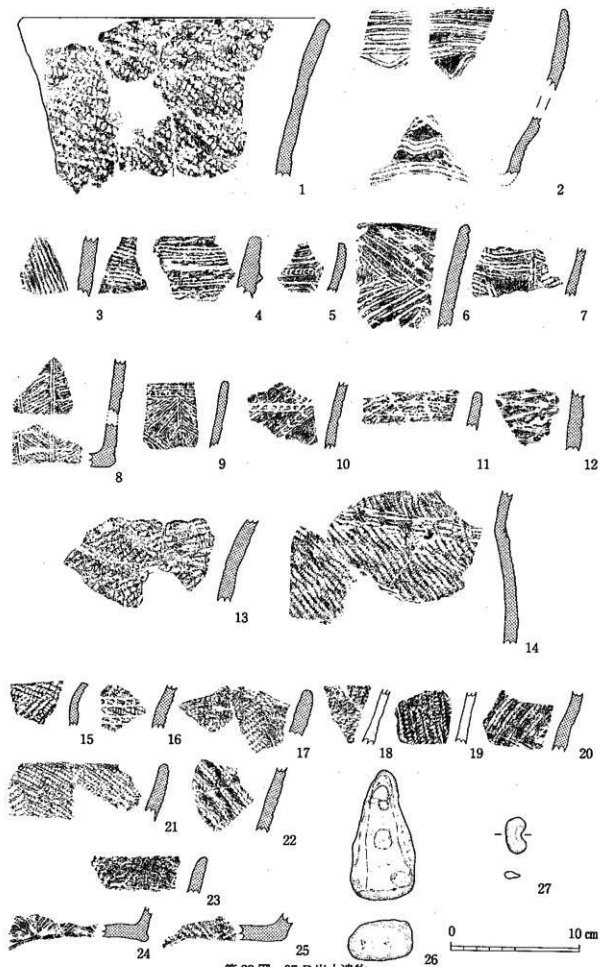




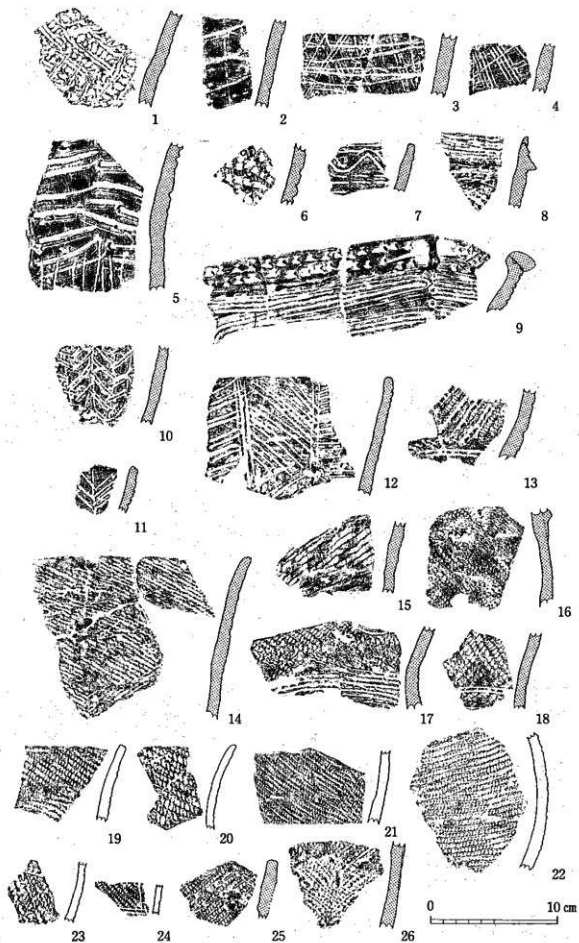
第 27 圖 旧石器時代石器



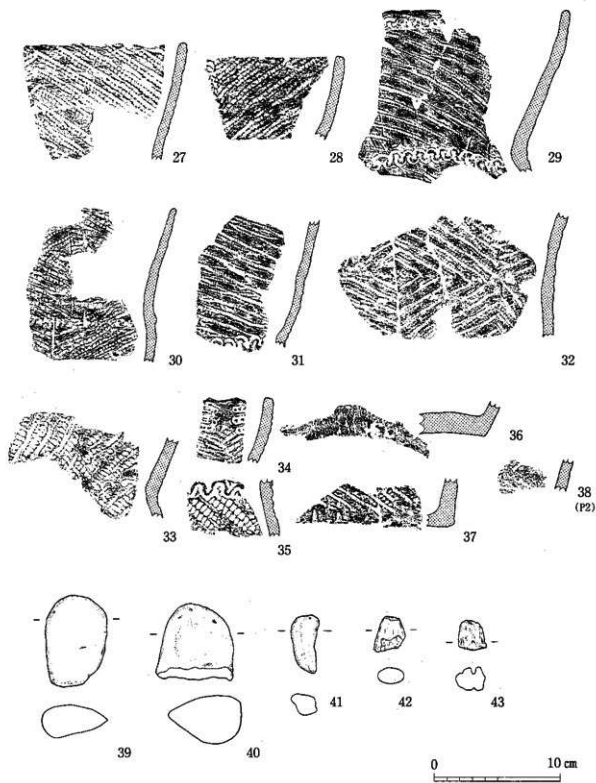
0 10 cm



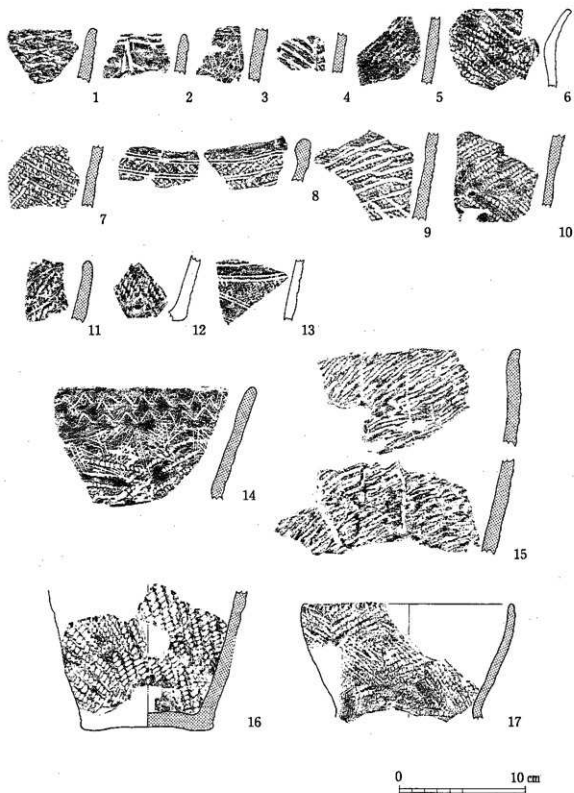
第 29 圖 07 D 出土遺物

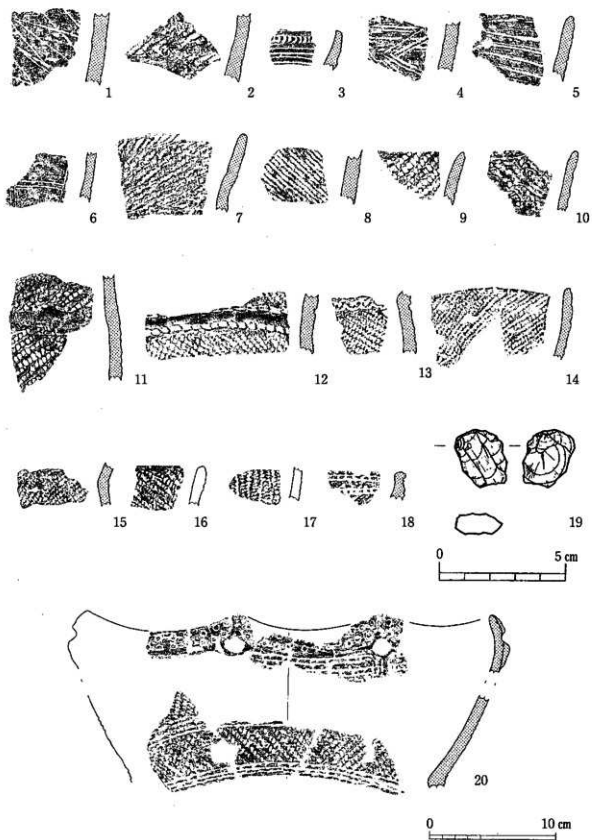


第30图 08 D出土遺物(1)

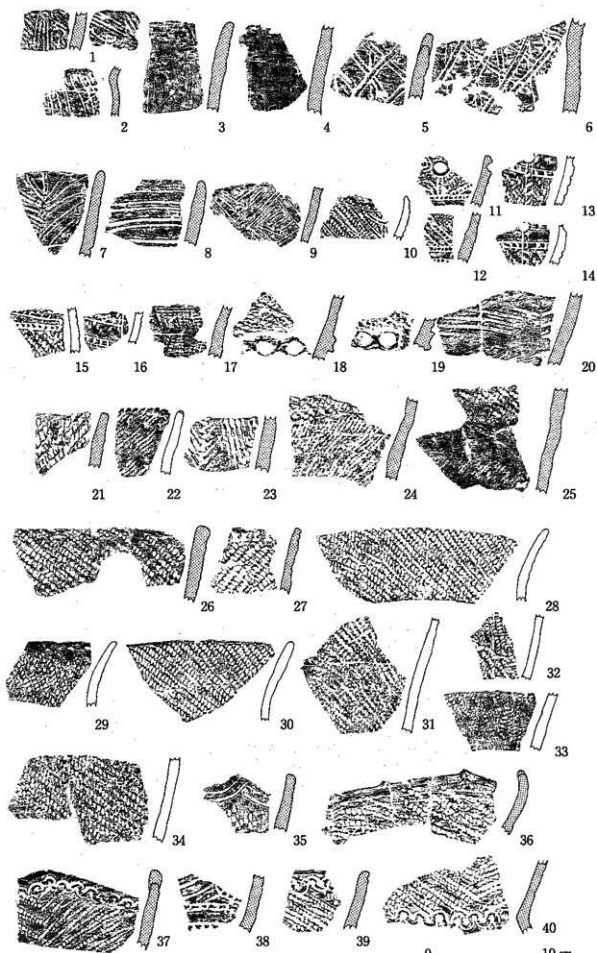


第31图 08 D出土遺物(2)



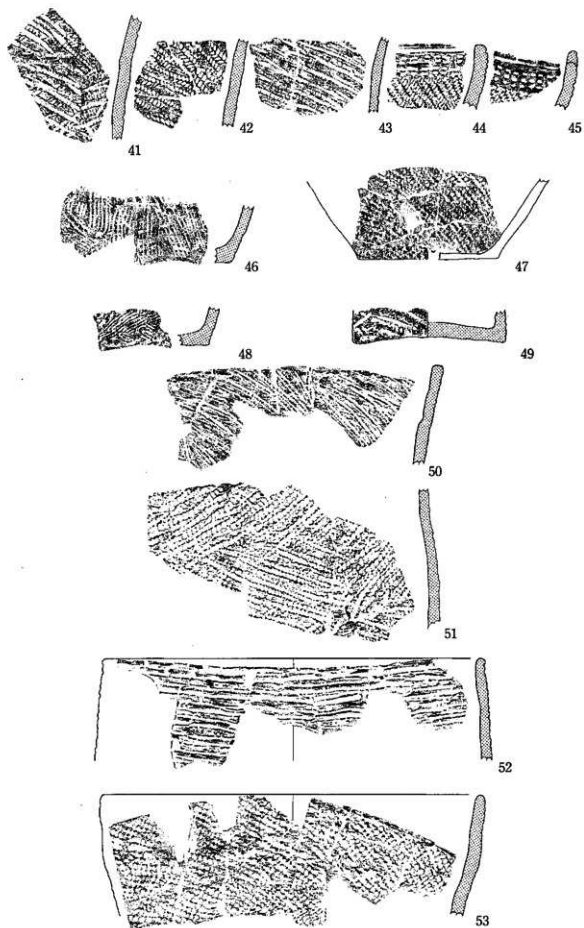


第33图 10D出土遺物



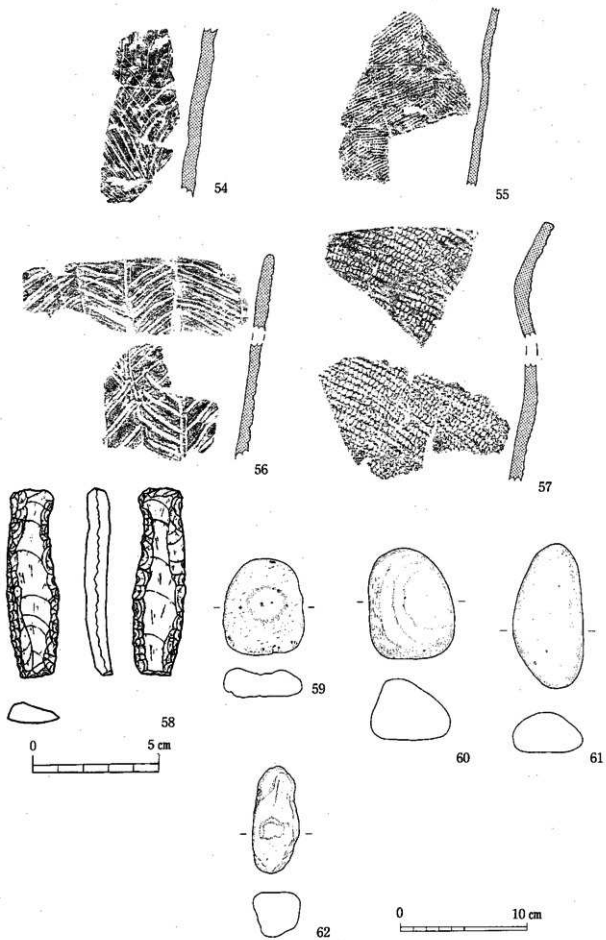
第34圖 11 D出土遺物(1)

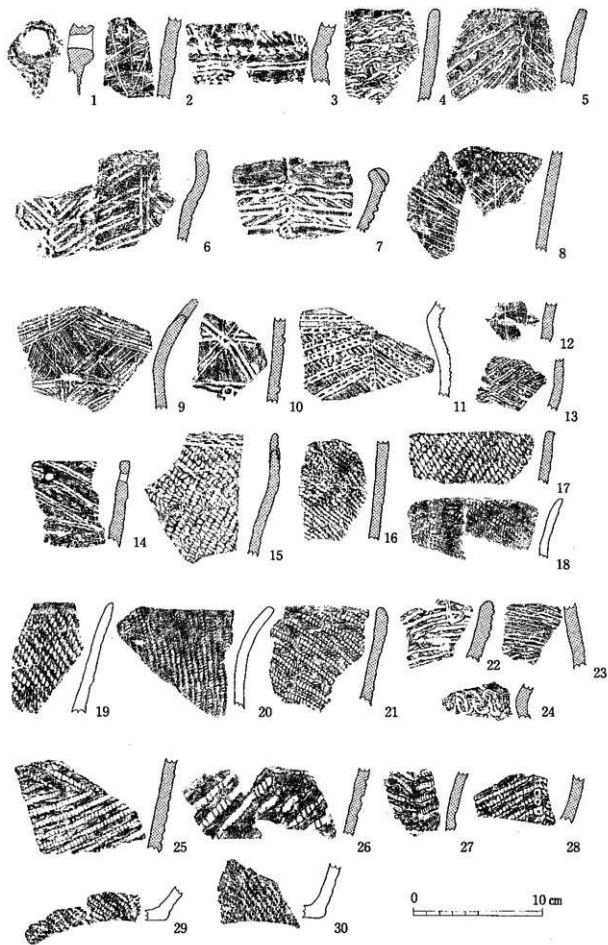
0 10 cm



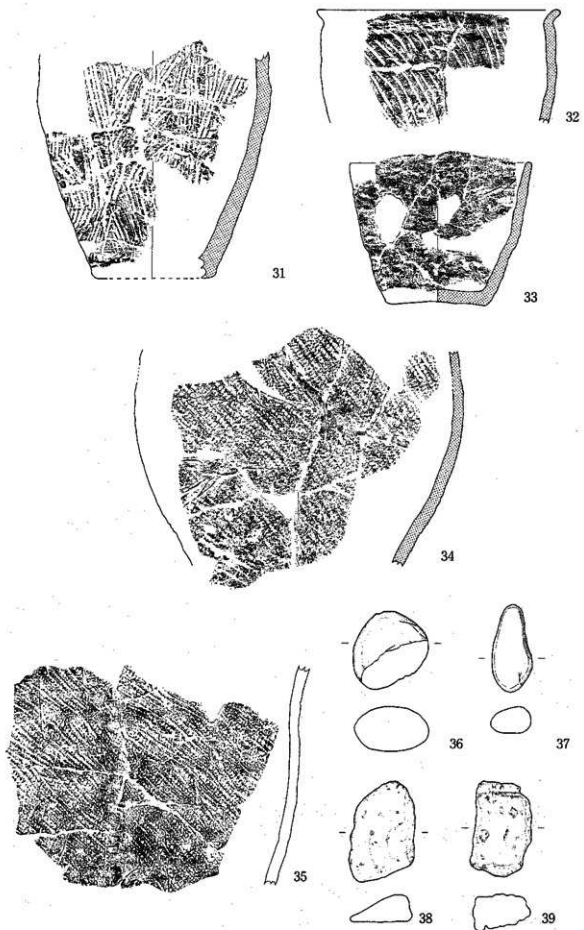
第35圖 11 D出土遺物(2)

0 10 cm



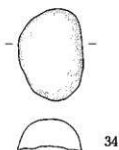
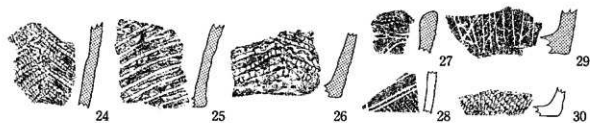
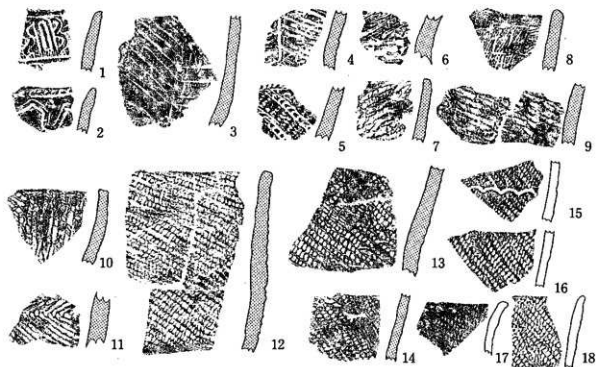


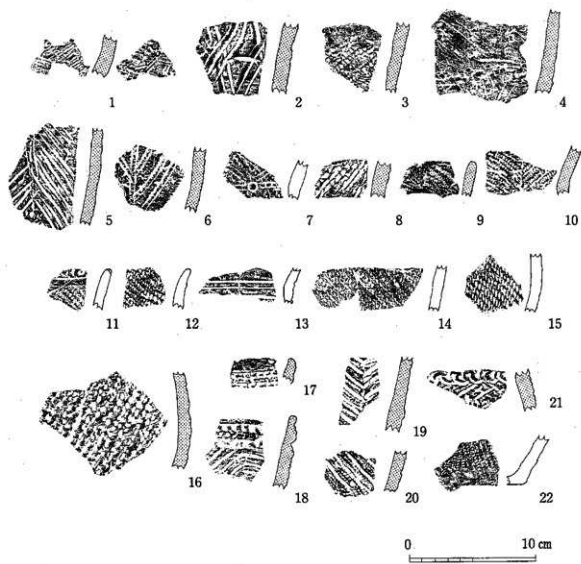
第 37 圖 12 D 出土遺物 (1)



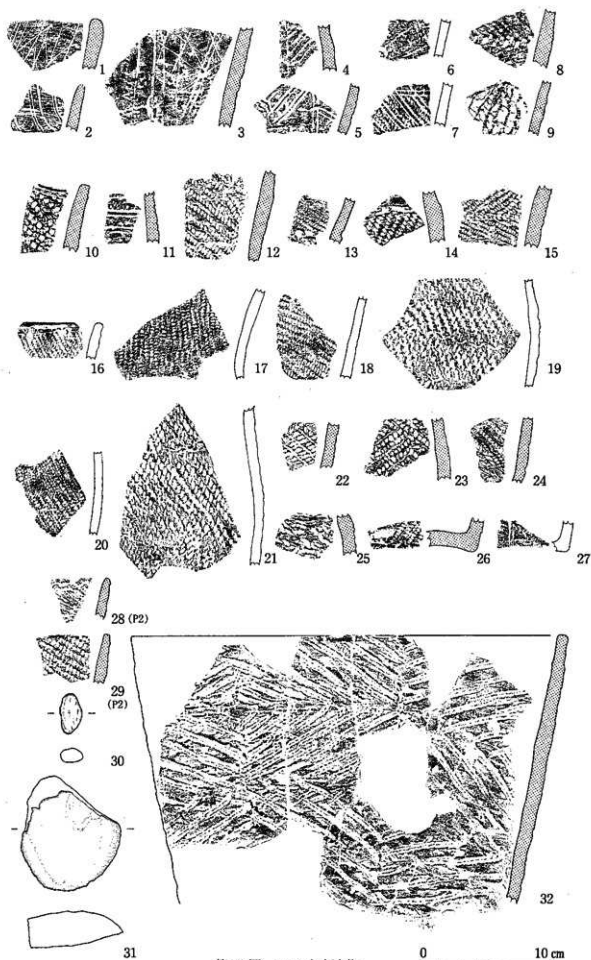
第 38 圖 12 D 出土遺物 (2)

0 10 cm



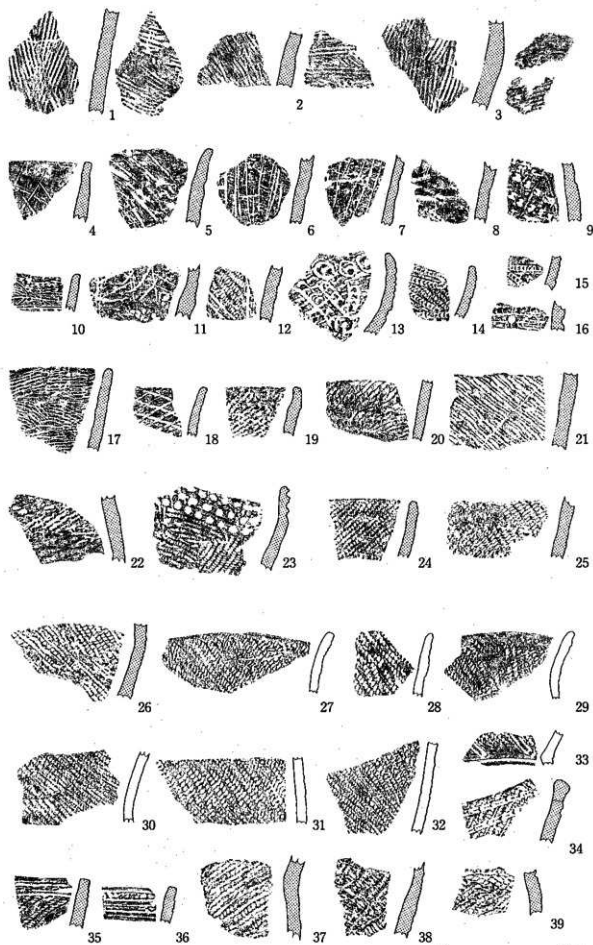


第40圖 14D出土遺物



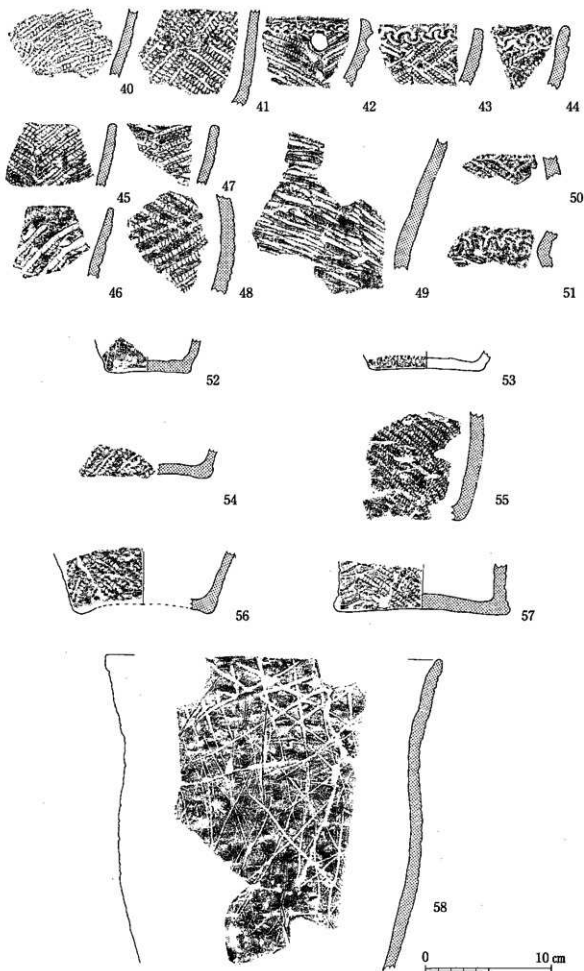
第41图 15D出土遺物

0 10 cm

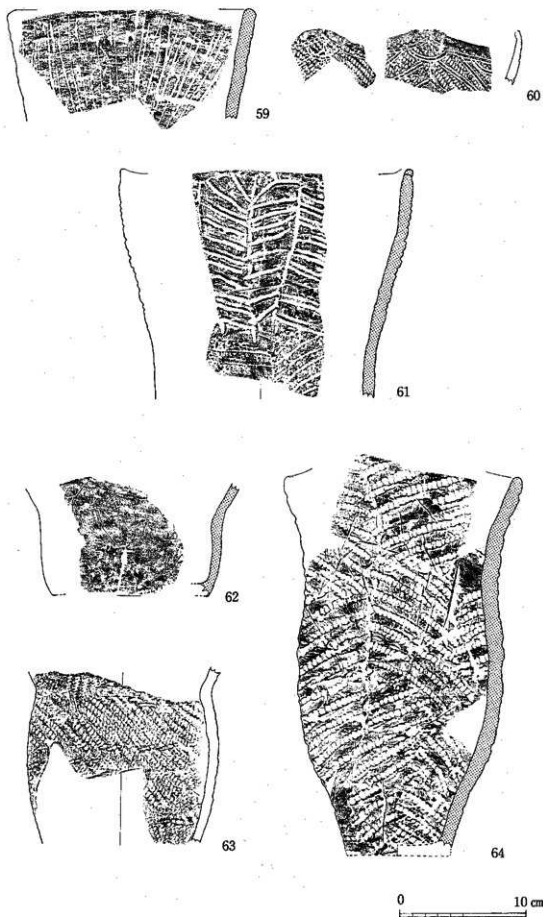


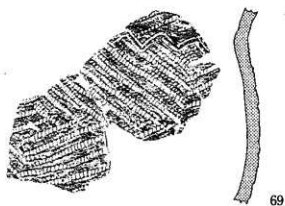
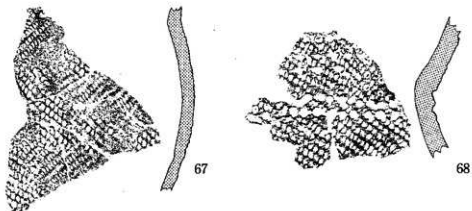
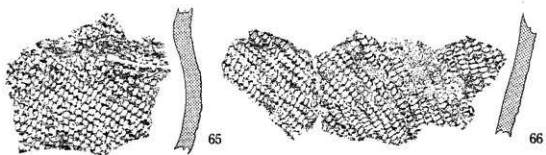
第 42 图 16 D 出土遺物(1)

0 10 cm



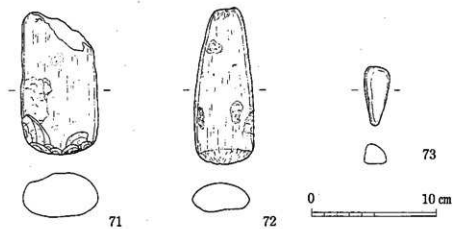
第43圖 16D出土遺物(2)



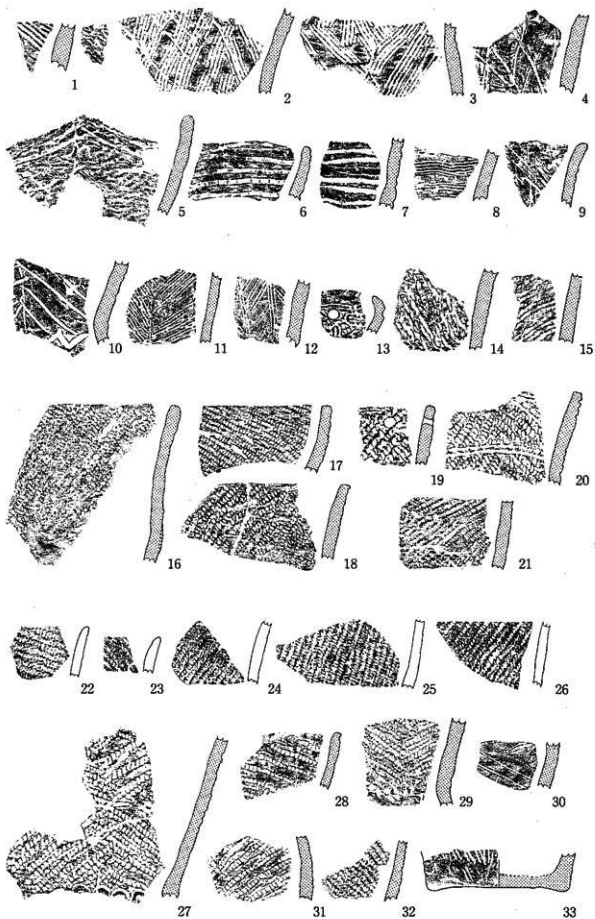


第 45 圖 16 D 出土遺物(4)

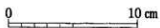
0 10 cm

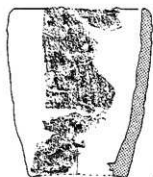


第 46 図 16 D 出土遺物(5)



第47图 17D出土遺物(1)

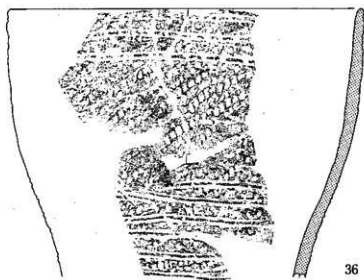




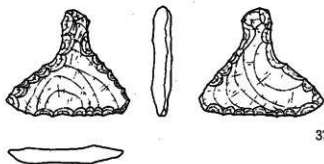
34



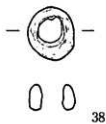
35



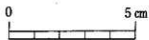
36

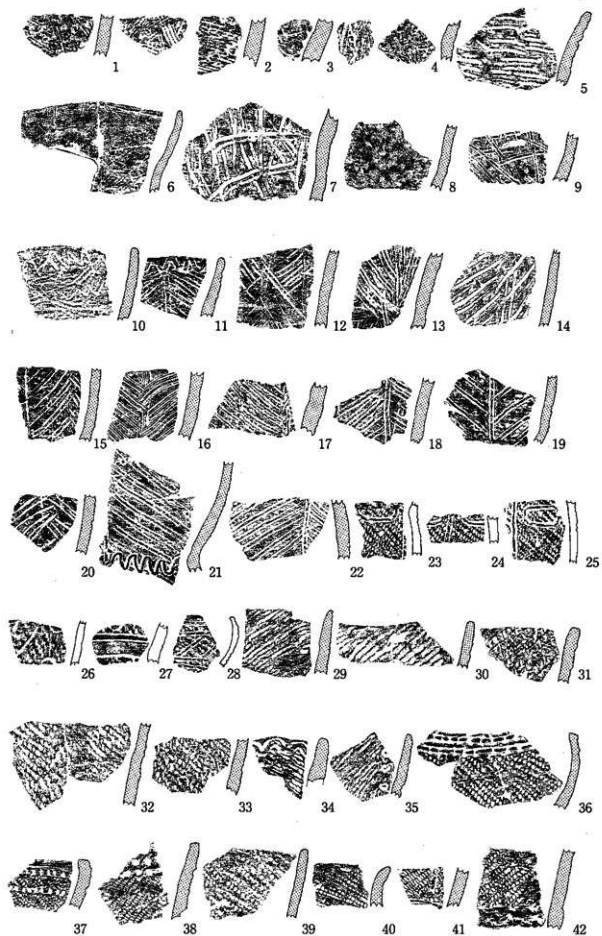


37

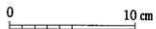


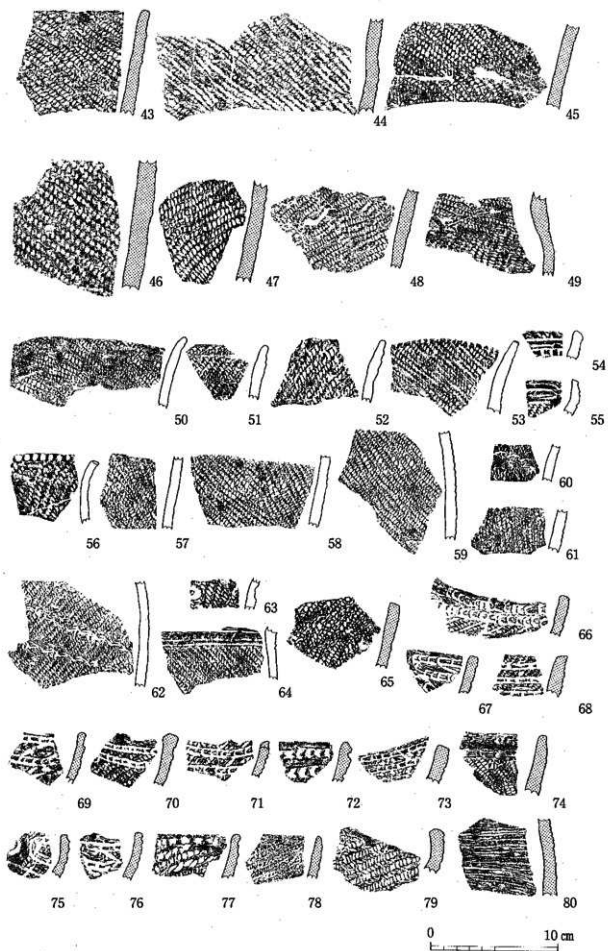
38

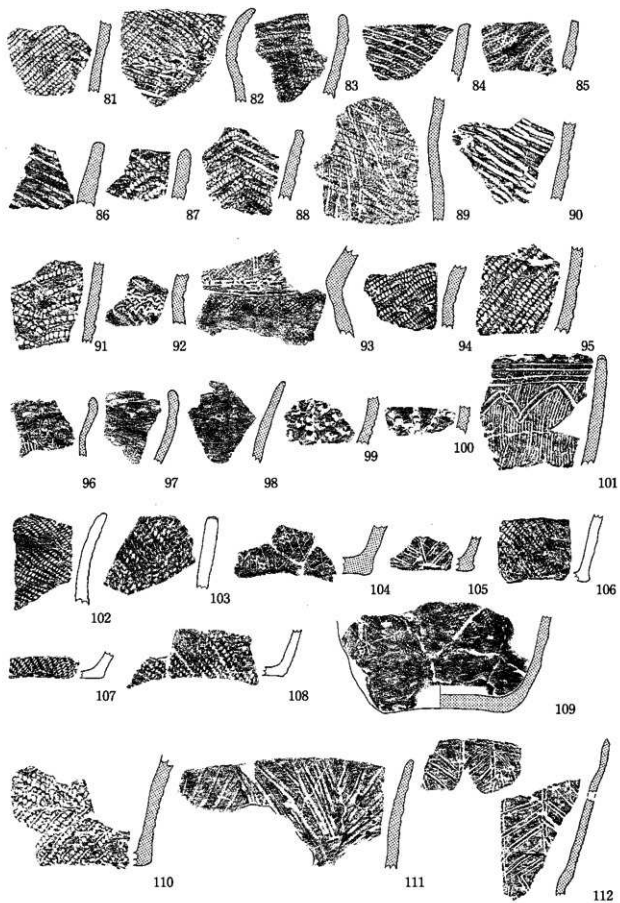




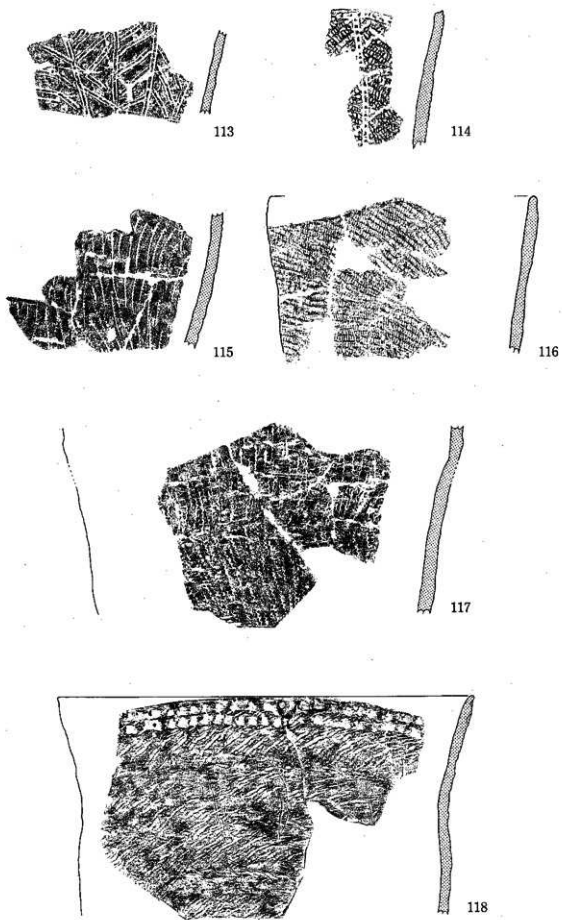
第49图 19 D出土遺物(1)





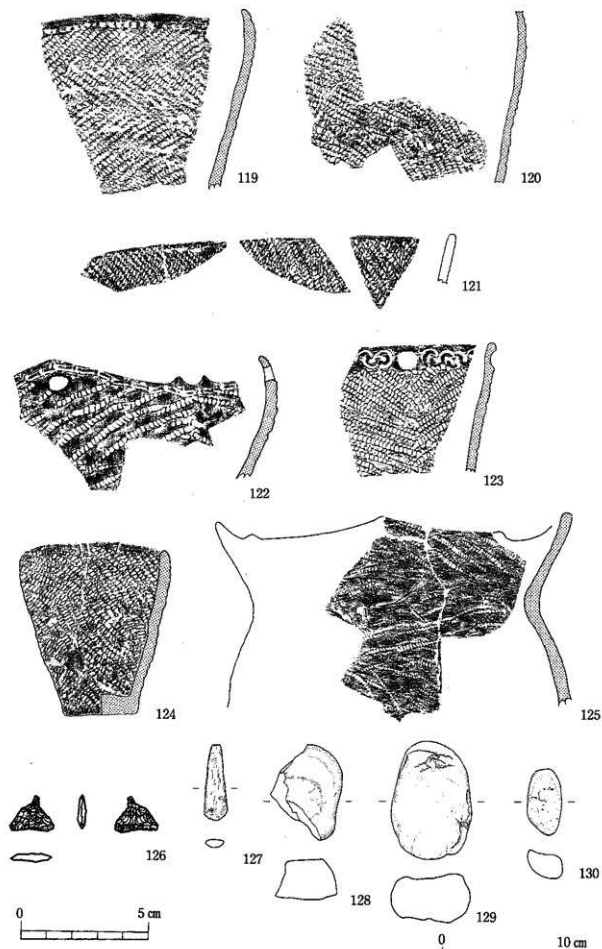


0 10 cm

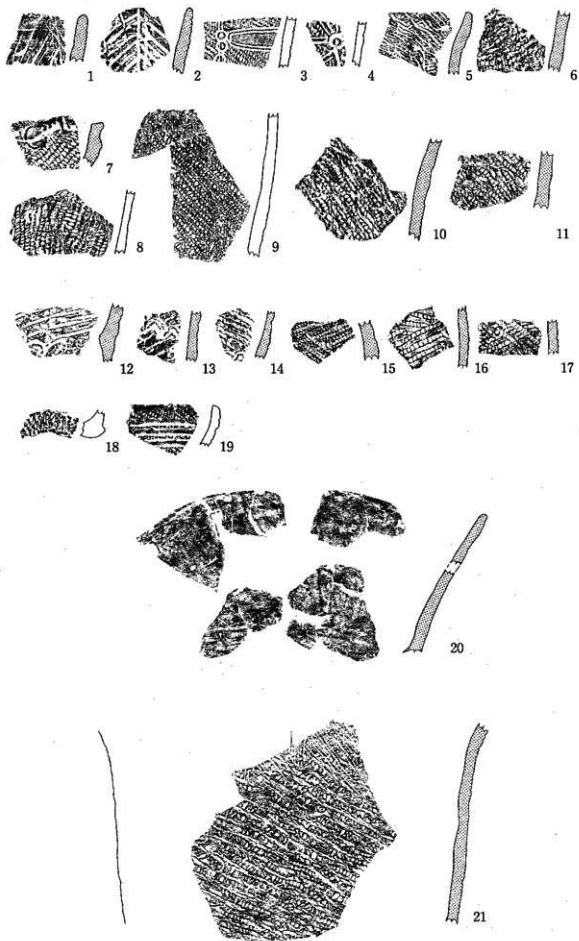


第 52 図 19 D 出土遺物(4)

0 10 cm

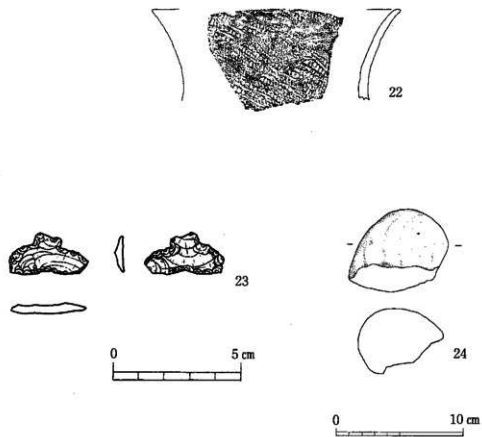


第 53 図 19 D 出土遺物 (5)

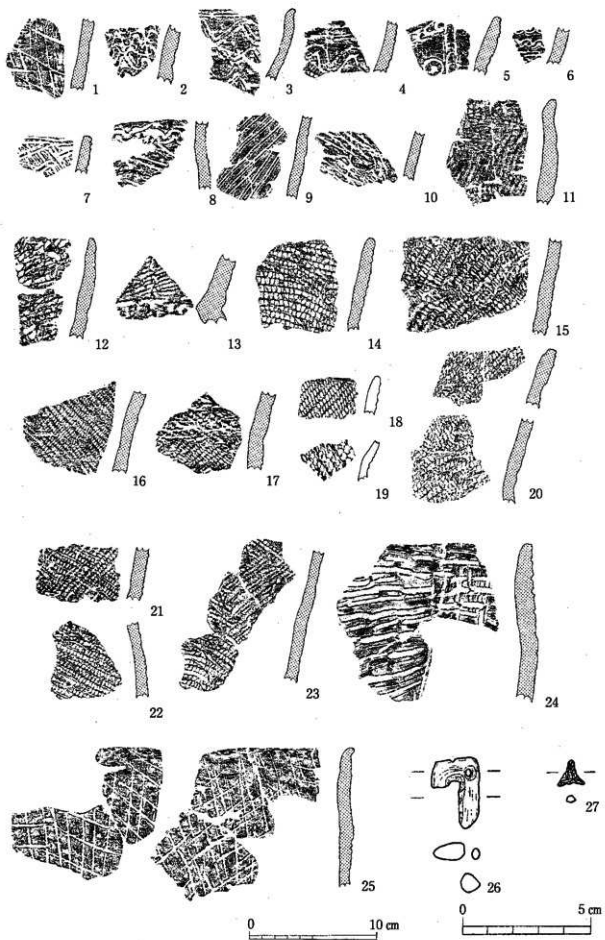


第 54 図 20 D 出土遺物(1)

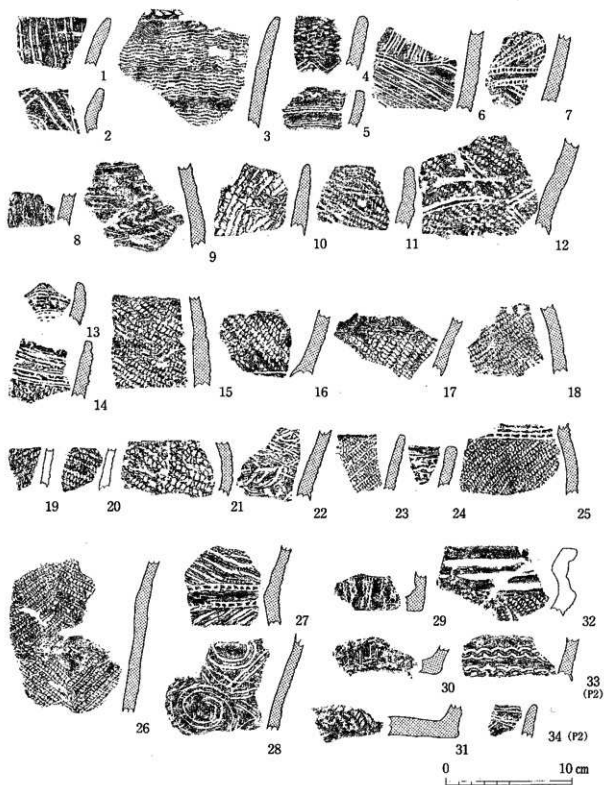
0 10 cm



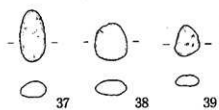
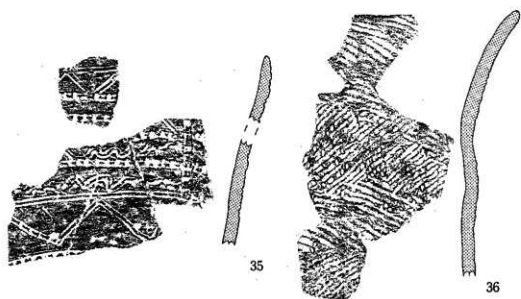
第 55 圖 20 D 出土遺物 (2)



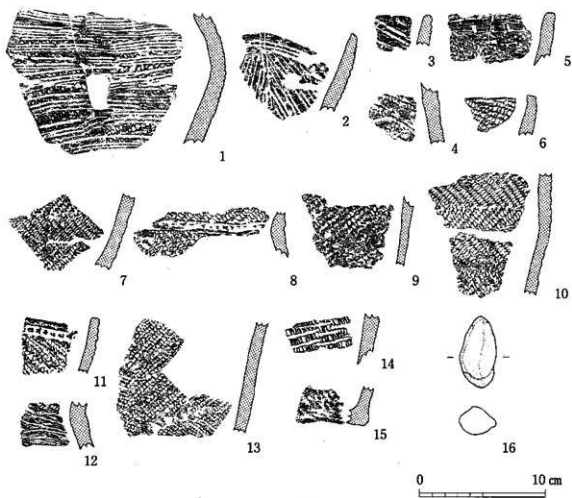
第 56 圖 21 D 出土遺物



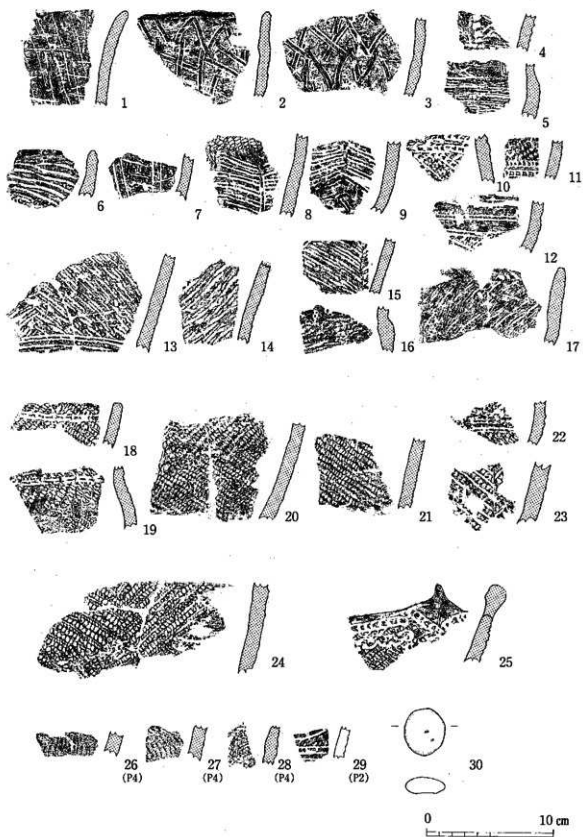
第 57 图 23 D 出土遺物 (1)



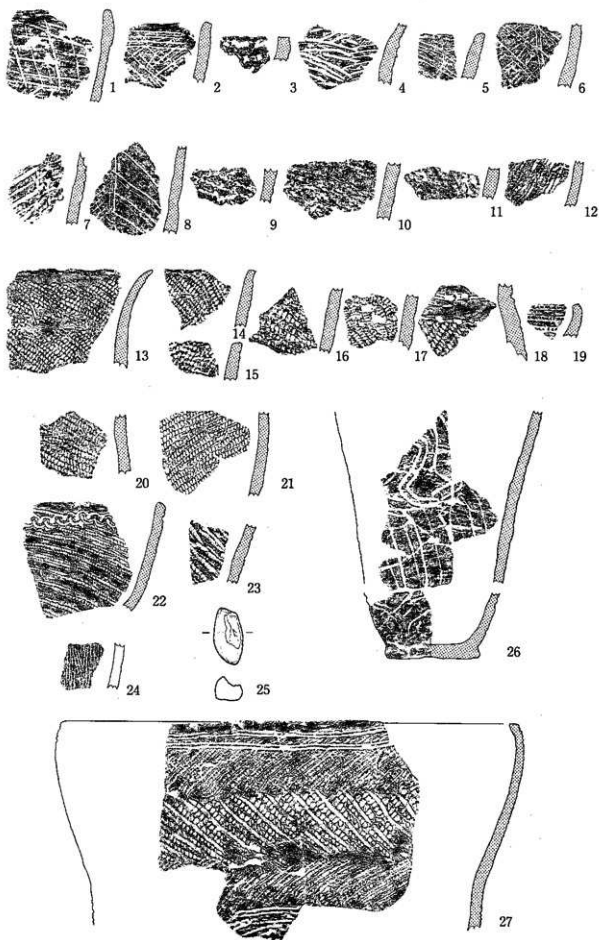
第 58 図 23 D 出土遺物 (2)



第59圖 24D出土遺物

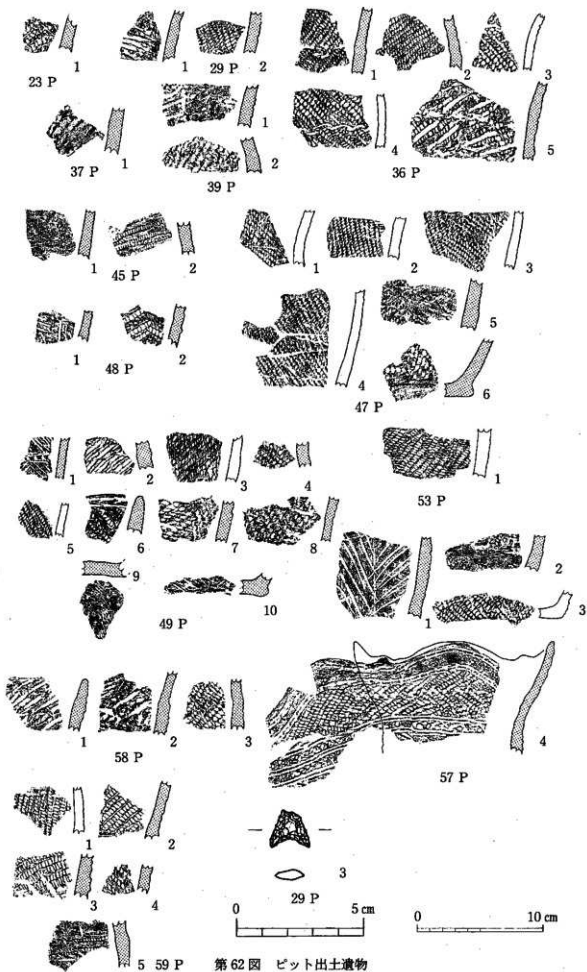


第60图 25 D出土遺物

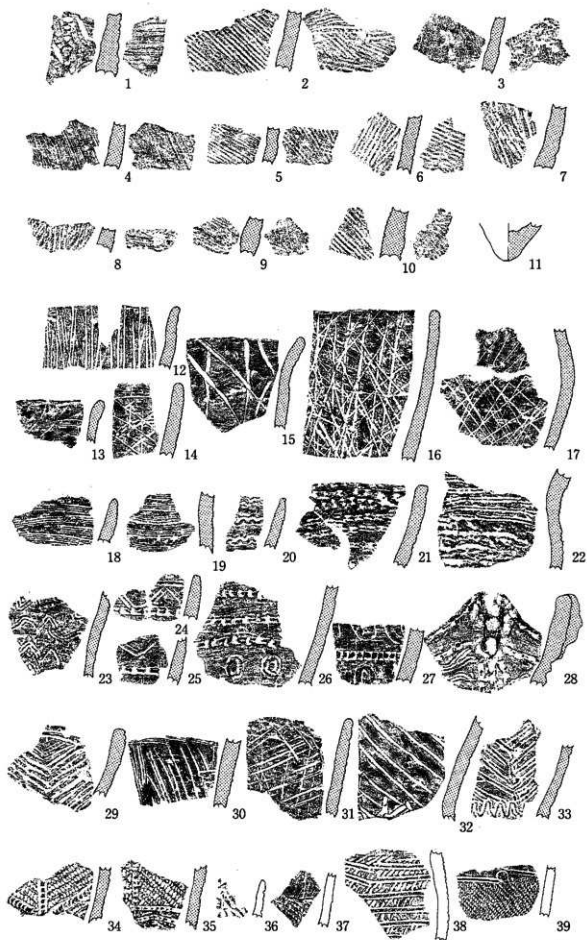


第 61 图 26 D 出土遺物

0 10 cm

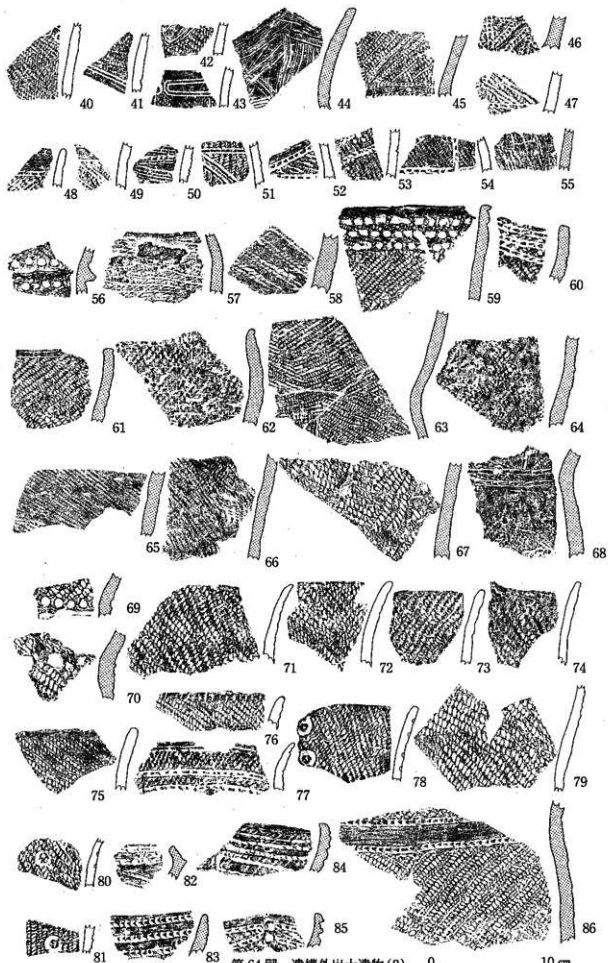


第 62 図 ビット出土遺物



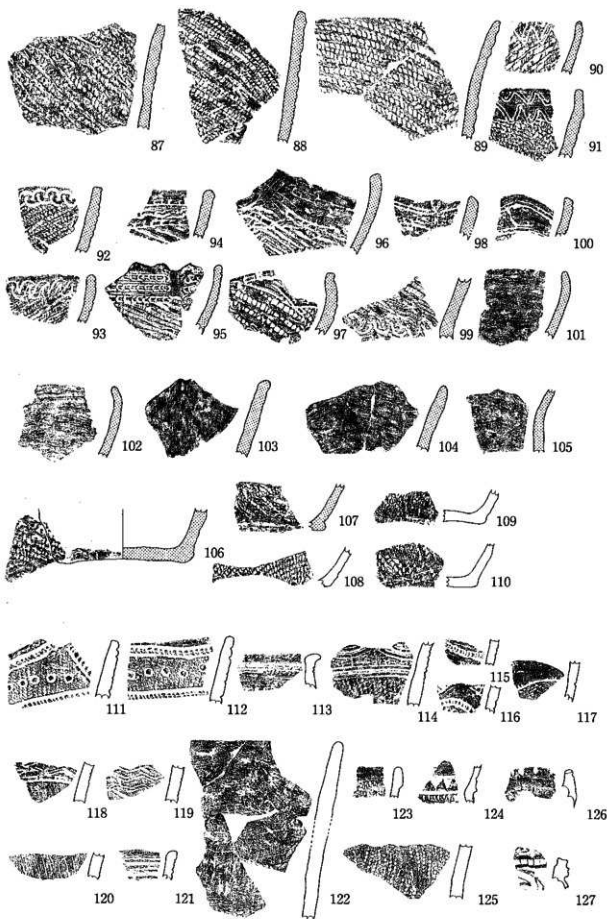
第 63 図 遺構外出土遺物(1)

0 10 cm

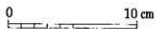


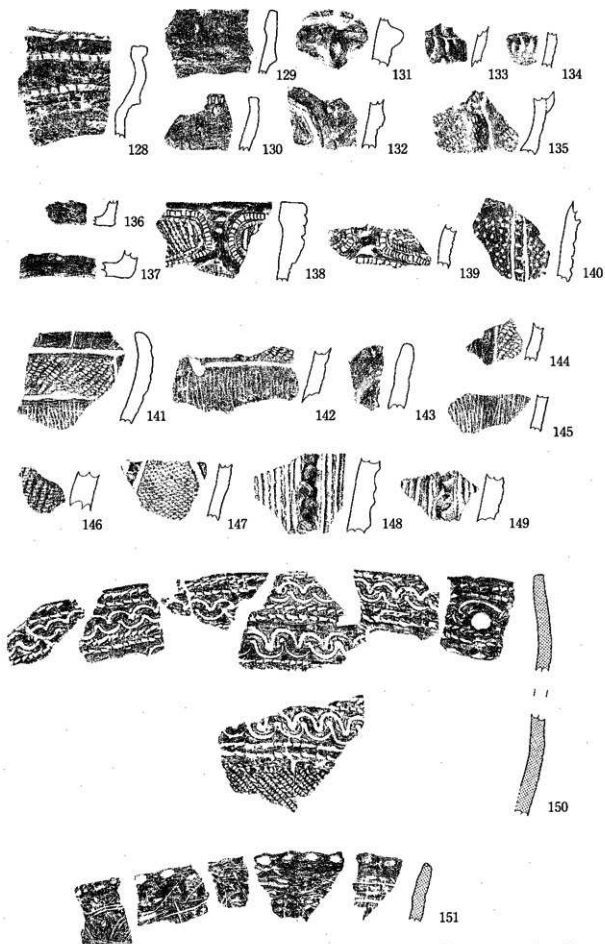
第64图 遺構外出土遺物(2)

0 10 cm



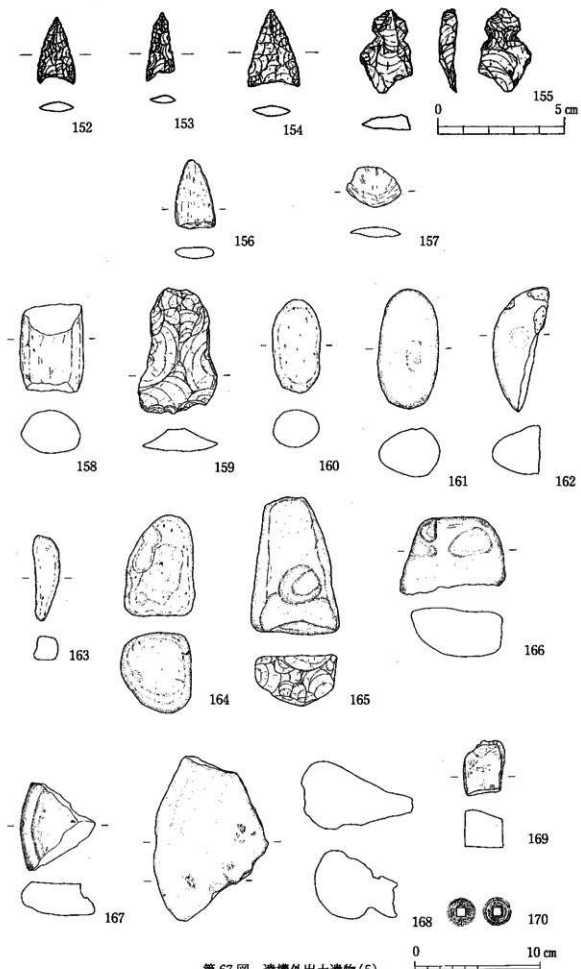
第 65 図 遺構外出土遺物(3)



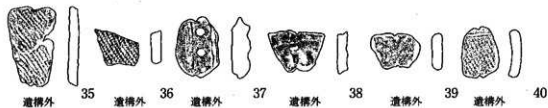
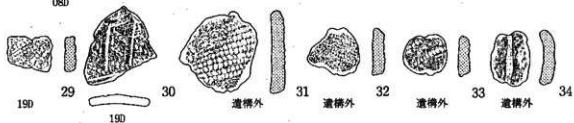
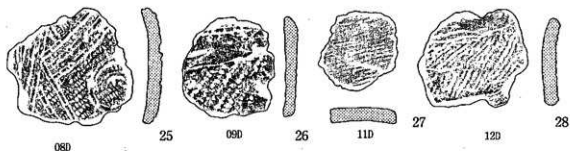
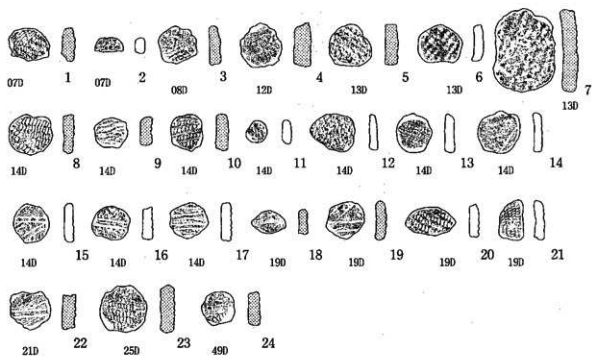


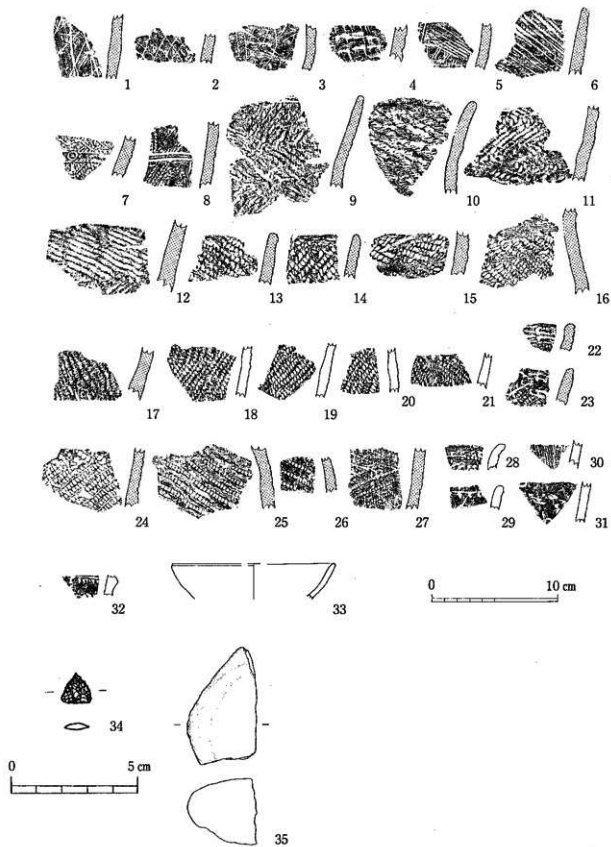
第 66 図 遺構外出土遺物 (4)

0 10 cm

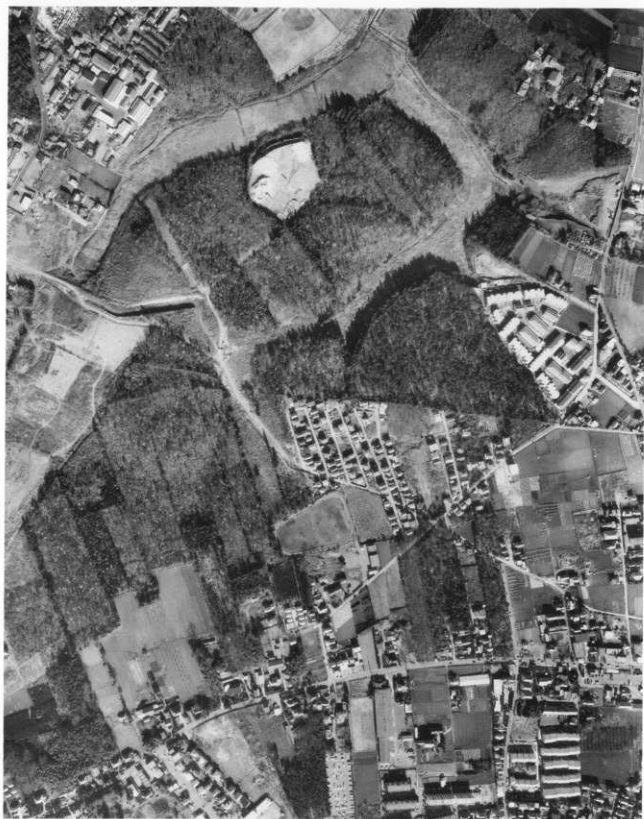


第 67 圖 遺構外出土遺物(5)





写 真 图 版



遺跡周辺の地形(昭和47年八千代市撮影)



遺跡近景
(北東方向から西を臨む)



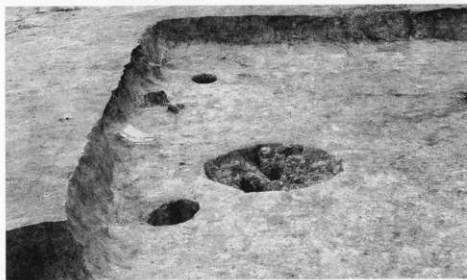
遺跡近景
(北東方向から南を臨む)



遺跡近景
(南東方向から西を臨む)



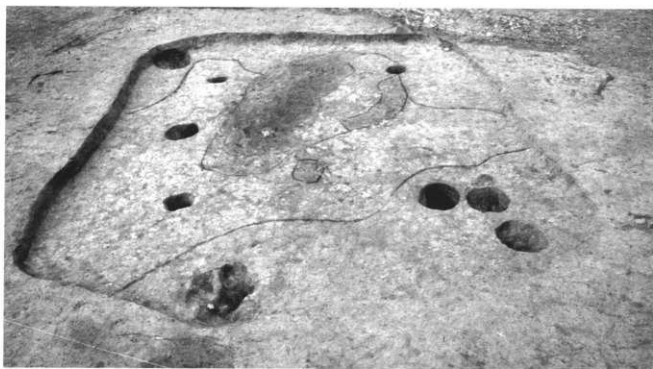
06D 全景(南東から)



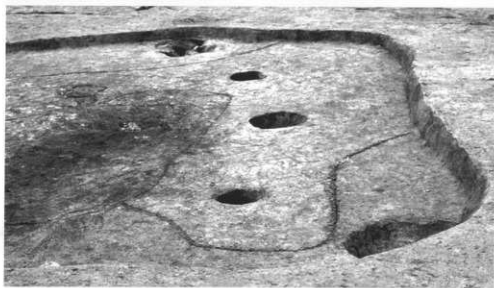
06D 床面状況



06D 炉跡状況



07D 全景(南東から)



07D 床面状況



07D 遺物出土状況



08D 全景(北東から)



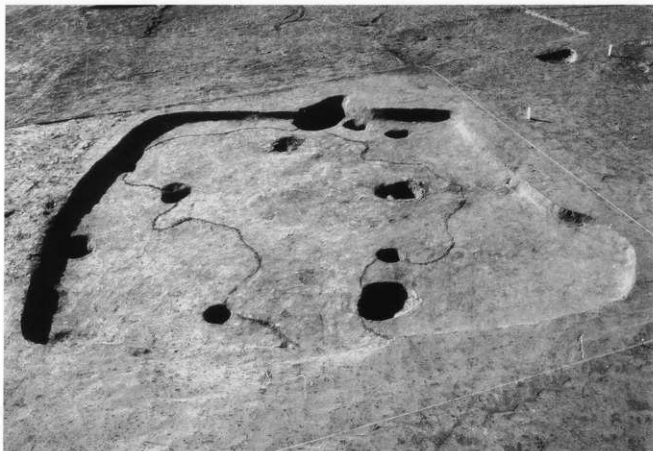
08D 床面状況



09D 全景(南東から)



09D 床面状況



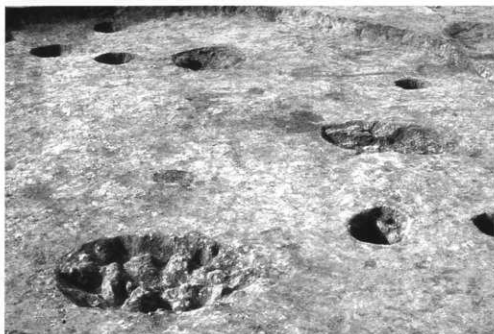
10D 全景(東から)



10D 床面状況



11D 全景(北東から)



11D 床面状況



11D 遺物出土状況



12D 全景(北から)



12D 床面状況



12D 遺物出土状況



13D 全景(北西から)



13D 床面状況



14D 全景(西から)